

デジャブる

coltysolty

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ときどき襲ってくる頭痛に悩まされるユノ。激しい頭痛の後には、必ず以前見たような景色が広がり不思議な錯覚に陥るのだった。

実際に起こる出来事が過去に起こったことなのか、これから起こる未来を予告するものなのか……

ユノとリラ姉妹の特殊能力がもたらす、現実と非現実の世界を行き来する不思議な感覚はいつたい何なのか。

ドクター・ヘンリーがその謎を解き明かしていく。

〈一旦閉幕〉

# 目次

## 第1部 不可思議編

|         |    |
|---------|----|
| 不思議な出来事 | 1  |
| 対話      | 4  |
| 出会い     | 7  |
| 回想      | 14 |
| 研究室     | 22 |
| つながり    | 24 |
| シックスセンス | 27 |
| 輪廻転生    | 35 |
| ほっこり日和  | 41 |
| 平穏な日々   | 47 |
| 引き寄せの力  | 57 |

|               |     |
|---------------|-----|
| 青天の霹靂         | 62  |
| 休憩室「番外エピソード」  | 68  |
| 花言葉           | 72  |
| トマテスタン        | 77  |
| 秘めた思い         | 84  |
| カウンセリング       | 89  |
| 揺れる想い         | 92  |
| 果てしない夢        | 97  |
| キジムナーの伝言      | 100 |
| 診察室           | 106 |
| 告白は手紙にて       | 111 |
| ミッシヨン・インポッシブル | 115 |
| 緊急逮捕          | 119 |

|            |     |
|------------|-----|
| 赤裸々に       | 123 |
| 開けちやダメ!    | 128 |
| W   d e 検査 | 133 |
| 検査結果       | 136 |
| ケガの功名      | 140 |
| 新しい一步      | 145 |
| 夢で会えたら     | 148 |
| 告夢         | 153 |
| 卒業文集       | 157 |
| 宿題         | 166 |
| Wの喜劇       | 170 |
| 秘密の裏日記     | 174 |
| カツチャギウエ?   | 178 |

|                |     |
|----------------|-----|
| あの時の記憶         | 182 |
| 巡り巡って          | 186 |
| 大変ダ            | 191 |
| ユノの独り言         | 197 |
| インタビュー         | 202 |
| インタビュー V o l 2 | 208 |
| 有終の美?          | 215 |
| ドクターヘンリーとの問診電話 | 219 |
| どやった?          | 223 |
| やっぱり一人多かった     | 228 |
| 溺れる夢           | 232 |
| G W            | 237 |

受診前準備

242

マカロン

249

第2部 状況転嫁編

悲しい連鎖

254

できるかな？

259

プチ修学旅行

266

真夏のつぶやき

272

セミの声

278

ねえねえねえ！

285

夏休み

290

がちやおじ登場

298

久々のデジャブ

306

第3部 発展展望編

少年の心を掴んだヒーロー

311

ユノの日記

316

ユノの休日

321

知らなかった！

328

青い海を映す空

333

南国紀行

338

お休み回です。

343

休憩中

348

昨今

353

恥ずか死ぬ

359

ご無沙汰メール

365

台風一過

370

あの時のタイムマシン

376

|                    |     |
|--------------------|-----|
| 回顧のしゅーりんガン         | 381 |
| ジャコランタン            | 386 |
| 光陰矢の如し             | 393 |
| デジャヴる【最終章】         | 400 |
| おまけ編               |     |
| + $\alpha$ 追記「幻日記」 | 410 |
| 再会の果て              | 416 |

## 第1部 不可思議編

### 不思議な出来事

2017年12月ある日の夕方、ユノは高熱のため病床に伏していた。いつもなら数日で引く熱もなかなか下がらず、枕元に置いた携帯に時折目をやるのが精いっぱいだった。

12時間も眠っているのにまだ起きることができない。食欲もなく朦朧とした中、携帯のニュース速報アラームが鳴る。それは、あるアジア系海外スターの訃報だった。

高熱のためか全身の節々が痛い。普段ならすぐに携帯を確認するのに、今はそれもままならない。そろそろ薬の時間だ。処方箋の袋に手をのばしたその時、誤って携帯を床におとしてしまった。床に落ちた携帯画面が点滅し、ポップアップが表示された。おそらく落とした衝撃による誤作動だろう。

ユノは携帯を手にとると、ポップアップをスライドして内容を確認した。

K国のスター、ジョヨンが亡くなった。

享年28歳。死因は心不全。

詳細は不明だが、どうやら自ら命を絶ったらしい。

ユノの妹のリラはジョヨンの大ファンだ。ユノはすぐにリラにテキストを送ろうとしたが、うまく指が動かない。高熱のため朦朧としていたのと、全身筋肉痛で体思う通りに動かなかったせいだ。

するとリラの方からテキストが送られてきた。

「おねーちゃん！ジョヨン、死んじゃった！」

重苦しい頭を無理矢理起こし、リラに返信テキストを送ろうとすると、ユノは突如激しい頭痛に襲われた。それと同時に

—この場面どこかで見たことがある・・・！

熱による幻覚なのか、夢なのか、混とした意識の中、ユノは再び眠りについた。

翌朝、熱を計ると微熱にまで下がっていた。頭痛も治まっているようだ。食欲も出てきたので、伯母が届けてくれた鶏粥を蓮華ですくって口に含んだ。口内炎が出来ていたため、あまり多くを口にするにはできなかった。

ぬるめのほうじ茶を飲みながら、少しずつゆっくりと粥を胃に流し込むことにした。

—そういえば、タペリラからテキストが送られてきたんじゃないか？熱でうなされていたから、記憶もあいまいだけど、リラの好きなジョヨンがどうか言つてたよ



うな・・・はつきりと思いつけなけれど、リラからの着信は確認した記憶がある。

ユノは携帯を手に取り、画面をスライドして、内容を確認してみることにした。

すると、リラからの着信はなく、ニュース配信の未読メッセージだけが一覧にあった。

—おかしいな・・・たしか、リラが何か送ってきたような・・・

するとその時、テキストメッセージの着信音がけたたましく鳴った。

「あ、リラからだ。・・・！え？ジョヨンが亡くなったの？いつ？なんで？

はっ！ちよつと待って！これって、昨日もこの場面見たような気がする！」

今は、はつきりとした意識で、昨日の記憶をたどろうとするユノだった。

## 対話

「それじゃあ、携帯からの送信日時は、最初に見たものとは違っていると言っただね？」  
ドクター・ヘンリーは、メデイカル記録を入力する画面をみながらユノに尋ねた。

ユノはたびたび悩まされている頭痛のため、ドクター・ヘンリーを尋ね、定期的な診療を受けていたのだ。

「ええ、そうなんです。以前も似たような現象があつて、今回リラも模試前に同じ夢をみたそうなんです。」

リラは中学3年生で受験まっただ中。小さい頃に両親を亡くしたため、親の記憶はほとんどない。姉のユノとはひとまわり以上も年が離れているため、ユノが親代わりを務めてきた。現在は、ユノが職場の寮に住み、リラは伯母と暮らしている。

ドクターヘンリーは、牛乳ビンの底のような分厚いレンズの入った眼鏡をずらしながら、ユノに尋ねた。

「以前ふたりが見た夢というのを、もう少し詳しく話してくれないか？」

ユノは大きく深呼吸をして、ゆっくりと夢の話始めた。

「今、リラと一緒に住んでいる伯母の旦那さんである伯父が亡くなった数日後、伯父が夢

に出てきたんです。そこは、小学校の給食室で、伯父が給食台の後ろでリラに手を振っているんです。私は給食室の外からそれを見ていて、好き嫌いの多かつたリラを心配した伯父が様子を見に来たのかなと、思ったところで、目が覚めたんです。」

「なるほど」

ドクター・ヘンリーは、キーボードをたたきながら、ユノに話の続きを促した。

「その夢の話のリラにすると、おねえちゃん！私も同じ夢みたよ！と、リラが言うんです。その日の給食メニューはあんかけ焼きそばで、リラが苦手なあんかけを指さして、きらいなら無理して食べなくていいぞ、つてジェスチャーでメッセージしたそうなんです。私は伯父の背後にいたので、その様子は見えなかつたんですが、給食室というシチュエーションも、伯父が出てきたのも同じで、リラと私が見ているアングルが違うだけなんです。」

亡き伯父を思い出し、目を潤ませながらユノが夢の内容を詳しく話した。

「うゝむ。つまり、姉妹で夢がシンクロしたというわけだな？」

腕組をしながら、ドクター・ヘンリーはユノに問いかけた。

「はい、同じシチュエーションで違うアングルの夢をたびたび見るんです。私達。」

「これは、研究対象になるかもしれない。お互いがお互いの思考を読んでいるのか、予知夢を同時に見ているのか。リラちゃんの受験が終わったら一度二人の脳波を詳しく調べ

てみよう。」

診療記録をウインドウズに入力し、以前撮った、脳のCT断面図をマツクの画面に表示させながら、ドクター・ヘンリーは、ユノの電子カルテを忙しく作成していた。

## 出会い

長時間のドクター・ヘンリーからのインタビューに少々疲労を感じてしまったユノ。しかしながら、不思議な現象を一通りドクター・ヘンリーに話したことで、若干の開放感  
は味わっていた。

ドクター・ヘンリーのオフィスからの帰り道、大好きなラムチョコを買おうと、コー  
ヒーショップに立ち寄りとしたその時、何か大きな衝撃がユノを襲った。

衝撃の弾みでユノは転んでしまい、持っていたショルダーバッグも舗道に落ちてしま  
った。バッグを拾いながら顔をあげると、そこには小学校高学年ぐらいの少年が立っ  
ていた。

「ご、ごめんなさい…。僕…」

少年はユノの手をつかみ、起こすのを手伝い、今にも泣きそうな顔でユノに許しを請  
うた。

「私は大丈夫だけど、君は？ けがはない？」

ユノは、不安そうな少年に話しかけた。

「あ、大丈夫です…」

そう答えると、少年は左手に握りしめていた何かを右手に持ち替えた。

「あれ？ミニ四駆？懐かしいなあ。君、ミニ四駆好きなの？」

少年が持っていたものに気が付き、ユノが少年に話しかけた。

「あ、はい。おじさんからもらったんです。」

少年は少しほっとした様子でユノの質問に答えた。

「そうなんだ？」

驚きながら、嬉しそうにユノは少年と会話を続けた。

「私もミニ四駆持ってるんだよ！小学校で一緒だった子が転校するときにくれたの。今も持つてるよ。たのしいよね。」

すると少年はちよつと恥ずかしそうに

「あ、はい：．． おじさんがサーキットとかたくさん持ってて、休みの時はいっしょに遊んでくれるんです。」

「そうなんだ！」

ユノは、小学校の時に転校していったヨンが、記念にくれたポンダのMSXを今も大事に持っている。女子なのに好んで車遊びをするので、ミニ四駆遊びに誘われたり、男子に混ざってベースボール遊びをして真っ黒になるのは常のことで、体を動かすのが好きな少女だった。

「君のミニ四駆、壊れてない？大丈夫？」

ユノは少年に問いかけた。

「あ、大丈夫です！ほんとうにすいませんでした…」

少年は自分がぶつかっていったのにも関わらずこちらをを心配してくれる目の前の女性に申し訳ない気持ちで一杯だった。

「ううん。久しぶりにミニ四駆をみてすごく懐かしい気分になったよ！ありがとう。気を付けて帰ってね」

ユノは笑顔で少年を見送った。

家に戻ると、妹のリラからメッセージが入っていたことに気付いた。

「おねーちゃん、今、ミーナ家。一緒に勉強してる。ミーナが今度、おねーちゃんにパソコン教えて欲しいんだって」

ミーナとリラは仲良しで、いつも一緒に勉強したり、遊んだりしている。ユナはリラへの返信画面を表示し

「パソコン教えるのいいけど、なにするの？アプリ？SNS？モノによつてはご両親に報告しないといかんよ」

数秒後にリラから返信があった。

「うん、大丈夫。高校に行ったら検定受けたいから、その対策をしてほしいんだって。親に言ってるあるって」

リラのメッセージを読んで安堵したユノは

「了解！受験終わったら、ミーナとみんなでお会いしよう」と、返信した。

するとまもなくリラからまたメッセージが届いた。

「さつき、ミーナ家には、男子が遊びにきたんだけど、ミーナの弟のユウトの友達。

その子さ、犬連れてきたんだよ。その犬がサスケにそっくりだったの！」

リラはまったくもってそっけないテキストメッセージを送るかと思うと、何か出来事があることやたら饒舌になるクセがある。

「へえ、そうなんだ」

とりあえず、返事を返すユノ。

「そっくりってか、あれ、ぜったいサスケだよ！」

文字上でもリラの興奮が伝わってきた。

「んなわけないじゃん。天国で今頃、おじちゃんと晩酌でも交わしてるわ」

サスケは、リラの伯父と伯母が飼っていた犬で、伯父が亡くなるとすぐに後を追うように亡くなった豆柴だった。



日本で最も有名な宅配便の「白犬サスケ」のイメージキャラクターにそっくりだったため、伯父が「サスケ」と名付けた。

ユノのメッセージにたたみ掛けるように、リラは文字攻撃を続けた。

「でもさ、サスケってしつぽまがつてたじゃん？ユウトの友達が連れてきた柴も、しつぽ曲がつてたんだってば！」

疑う余地はないとばかりに確信に満ち溢れたメッセージを読んで、ユノは笑いながらリラに応えた。

「リラあ。しつぽの曲がつてる犬なんて世の中にたくさんいるんだよ。たまたま豆柴で、たまたま曲がつてただけでしょ。まあ、獣医を目指してる君としては、とても興味深かったんだろうけどさ」

リラは小さい頃から犬や動物が大好きで、ぜつたい獣医になる！と、公言していた。

リラはユノの意見に納得いかない様子で

「そういうんじゃないかって……あれ、ぜつたいサスケだって……」

知識量は一般の中より多いとは言え、やっぱりまだこともだな、と、顔をほころばせながら、ユノはリラに言葉を続けた。

「じゃ、サスケの生まれ変わりかもね？今度、ユウトの友達が来たときに、教えて！私も見に行くから」

そのメッセージを読んで、少し落ちついたのか、リラはテンションが少し上がった様子だった。

「うん。ぜったい呼ぶから。速攻で来てね」

「おk。私の休みは日曜日と月曜日だから、その日なら大丈夫だよ。」

ユノは宅配便の白犬サスケで配送管理の仕事に携わっていた。

本来は大学進学を希望していたユノだったが、両親が亡くなったこともあり、高校を出てすぐに就職し、働きながら通信大学を受講し、大学卒業資格である学士を取った。それと同時に幼稚園教諭の免許も取得し、独学で語学を習得していた。

語学は、世界標準語である英語の他に、サッカーが好きだったこともあって、サッカー強豪国の南米で通じるスペイン語、そしてアジアではトップレベルの実力を誇る韓国の言語ハングルを勉強した。日本でワールドカップが開催された時には、語学ボランティアをして、南米や韓国の友達をつくり、SNSなどでやりとりをしながら、言語も身につけたユノだった。

これまでいろいろな仕事をしてきたユノだったが、婚約者がバイク事故で亡くなってからは、しばらくにも手に着かなかった。しかし、いつまでもそのままではいけないと、懇意にしてくれている知り合いが紹介してくれたのが、奇遇にも白犬サスケ宅配便での業務だった。できればまだ人とかかわりたくない、ユノは思っていたが、幸いこ

ここではあまり人と深く関わることもなく、業務上いつしよになる人々は詮索もせず、親切に対応してくれていた。

—受験が終わってから、つて言ったけど、久しぶりにミーナの顔でも見に行くか：・  
両親の没後、お世話になったミーナの両親にもご無沙汰している非礼を詫びなければと、手みやげを買いに、お気に入りのおイヤルブツセに向かった。

## 回想

ユノは、とぼとぼ歩きながら昔あつた出来事を思い起こしていた。中学生の時行つた修学旅行先の北海道に着いた途端、目の前に広がつた光景が、以前見たことがあるという強い印象だつたことを、今も鮮明に覚えている。北海道は初めて訪れたはずなのに、なぜ目の前に広がる羊ヶ丘牧場の景色に見覚えがあつたのだろう。おみやげに買ったホワイトチョコの甘さが懐かつたのもなぜなのだろう。はじめてみるそのブランドのチョコが珍しくて買ったのに。ミーナの家に行っていく手みやげのホワイトチョコ入りクッキーサンドの包装紙をみながらそんな事を考えていた。ミーナの家に着き、インターホンを鳴らすと、ミーナの母が快く出迎えてくれた。

「あら、ユノちゃん。久しぶりだね。仕事は順調？」

153cmのユノよりも更に小柄なミーナの母は、ユノの両肩を抱きかかえながら久々の再会を喜んだ。

「はい、大変ご無沙汰してしまいました。おかげさまで仕事は順調です。忙しい部署なので、なかなか時間がとれなかつたんですけど、急にミーナやおかあさんに会いたくなくて。」

「そうよ。仕事も大事だけど、自分を大切にしなくちゃ。これからは時々遊びにきなさいね。」

小柄ではあったが、アルトなトーンでゆつくりと話すミーナの母には、北海道の大地を思い起こさせるような不思議な包容力があつた。

ミーナの家では先に到着していたリラが、ミーナ家族と一緒に茶菓子をほおぼっていた。手に持った生どら焼きを飲み込むより先に、待てないとばかりに、話し始めるリラ。先日、ユウトが連れてきた友達の子犬が、昔飼っていた自分達の犬と酷似していることを訴えた。ミーナの両親は暖かい笑顔で、リラの話を受け止めてくれていた。すると、玄関のチャイムが鳴った。

「ユウトが帰ってきたわ」

ミーナの母はソファから立ち上がると、玄関の方に向かった。

「あら、いらつしやい」

ユウトの隣にたたずんでいた細身の少年に、ミーナの母は挨拶をした。2個目の生どら焼きを口いっぱいほおぼりながら、リラが玄関に向かった。

「あーユウトの友達！おねーちゃん、ほら、この間の！」

リラはソファでミーナの父と談笑していたユノを呼んだ。ユノはちよつと呆れながら

「食べるかしやべるかどっちなにしないヨ。しかも、客人前に失礼でしょ。こんにち… あー!」

ユウトの隣にいた少年をみて驚くユノ。

「あつ、こんにちは。この間はすいませんでした」

その少年はユノをみると少し驚きながら頭を下げた。

「え?なに、おぬしら、知り合い??なぜに??」

口をもごもごさせながら、ユノと少年を交互にみて不思議そうな顔で尋ねた。

すると少年は

「この間、ユウト君ん家に遊びに来た帰り、僕の犬が駅の方に逃げちゃって、それを追いかけて行ったときに、おねえさんにぶつかってしまつたんです。」

なにか面白そうだなと、いたずらっぽいなを浮かべながら、ユウトが尋ねた。

「この間、ミニ四駆見せにきてくれたときだ!あんどき連れてきたワンコが逃走しちゃつたつてわけだね。そんなもつて、猛ダツシユして追つかけてたら、ユノつちとぶつかつたつてわけだ!」

「あんた、なに楽しそうにしてんのよ」

ちよつとむつとしながら、リラがユウトに突つ込みを入れた。

「さあさあ、立ち話もなんだから、みんな中に入って、おやつでもつまみながらお話しし

ましよう。」

ミーナの母が全員を室内に促して、ジューズとおやつでもてなしてくれた。

「ユウト、久しぶりに見たけど、ずいぶん背が伸びたね。私より大きいじゃん。」

ユノは目を細めてユウトに微笑みかけた。

「ふん。ガワばかり大きくても、あかんねん！てか、あんたも背だけは大きいね。」

リラは横目で少年を睨みつけながらも、興味を示していた。小さい頃から、まずは男子にくっついてかかるリラは、ほとんど初対面であるユウトの友達にも闘志満々だ。自分のライバルは、いつも男だ！と、小学校時分は、年に数回男子と取っ組み合いのけんかをしてきたリラだった。

「あんた、名前は？」

遠慮がちにジューズのストローを右手でもっていたユウトの友達に、リラがぶつきらぼうに尋ねた。

「ケントです。よろしくお願いします。」

座ったままペコリとお辞儀をするケント。リラが質問を続ける。

「あんた身長何センチ？」

「あ、161cmです。」

リラの激しい質問攻めにあっても、礼儀正しく答えるケント。

「うわあ、大きいね。ユウトも同じぐらいじゃない?」

ユウトとケントを見比べながら、感心するユノ。

「ちっ、負けた。おれ160だから、今度の並び順、後ろから二番目になっちまうな。今までずっと一番後ろだったんだけどなー。でもさ、なんかさ、おれら、名前もにてるし、身長もだいたい同じだし、双子みてーじゃね?」

人差し指を互いの方に向けながら、皆に同意を求めた。

その瞬間、ユノは何かひっかかりを覚えた。双子?・・・なんだろう、なぜ双子に反応してしまうのだろう。そう思いながら、ユノはケントに話しかけた。

「ケント君。今日は、ワンちゃん連れてこなかったの?」

「あ、家に居ます。」

初対面のときよりリラックスしたのか、人なつつこい笑顔で答えるケント。

「写真とかないの?ケータイとかに」

つつかかるように、リラはケントに要求を突きつける。

「あ、携帯にあります。」

昨今の小学生は塾などに行っていることもあつて、携帯を持っていても珍しいことではなくなった。ケントも例外ではなかった。

「あ、ほんとだね。サスケにそっくり。」



ケントから携帯を渡されたユノは、目を見開いて携帯画面に見入った。  
「サスケ……って、なんですか？」

少し驚いた様子で、ケントはユノに訊ねた。

答えようとしたユノを制するようにリラが答えた。

「サスケは、うちで飼ってた犬。あたしが小学校の時に、おじちゃんが死んじゃって、そのあとすぐにサスケも死んじゃったの。」

「そうなんですか……。僕の犬は、沖繩にいた頃、車に跳ねられていたんです。瀕死の重傷を負っていたのを僕がみつつけて、すぐにおじさんに連絡したら、来てくれたんです。おじさんは獣医なのですぐに手術してくれて、それで助かりました。」

当時の場面を思い出しながら、ケントは自分の犬を飼うまでの経緯を説明した。

「そのおじさんが、ミニ四駆の人ね？」

ユノが訊ねると、ケントは目を見開いておおきくうなずいた。

「はい。この間はユウト君がミニ四駆をみたいっていうんで、持っていったんです。その帰り、おねえさんにぶつかってしまっただけです。」

「そうだったのね。」

ユノはぶつかったときの光景を思い起こし、なぜ急に体当たりしてきたのか納得していた。

すると、リラが『獣医』という言葉に反応した。

「おじさん獣医さんなの？」

「はい。沖縄では水族館で獣医をしていたんですが、転勤でこの町に来ました。僕は進学のこともあったので、おかあさんがおじさんといっしょに行けばいいよって。僕はアニメの勉強をしたかったから、おじさんと一緒に来ることに決めたんです。」

「沖縄！」今度はユノがその言葉に大きく反応した。ユノの婚約者は沖縄が好きだったため、亡くなった後、遺骨は沖縄の海に散骨したのだった。

「沖縄には友達もいるし、別荘もあるので、よかったら今度遊びに来てください。」

まだ慣れ親しんでいない街で、大人も交えて会話が弾んだことが、ケントは嬉しかった。

ミーナの家からの帰り道、リラは難しい顔をして、ユノに疑問を呈した。

「やっぱり、あれ、サスケじゃないかと思う。だって沖縄だしさ、おじちゃんが連れてきたんじゃないかと思うんだよね。」

そんなことはあり得ないと思う一方で、もしかしたらそんなこともあるのかもしれないと、非現実的なことが自分達の心を癒すのなら、それを信じてみるのかもいいかもしれないと思うユノだった。

ほっこりした気分で、リラを家に送り届けると、ユノは自分の部屋に戻ってきた。リ

ラを送ってから、いつもとは違う静かな通りを歩きながら帰路についたユノは、ミーナの弟が連れてきた少年のことが気になっていた。沖繩の海のような、果てしなく澄んだ目をした少年ケント。あの目を以前どこかで見たような気がする・・・どこだったんだろう。なんとなく懐かしいような愛おしいような、そんな気持ちかわき上がって仕方ないのを、ユノは無意識に感じ取っていた。

## 研究室

ぐしゃぐしゃの頭をぼりぼり搔きながら「ああ、どこもかしこもかいかい」と、ドクターヘンリーはぶつぶついながら、パソコンの画面に向かっていた。フケとひどい水虫と戦いながらメールチェックに夢中になっている。受診したメールのひとつは、核廃絶運動の祖について書かれていた。

ドクター・ヘンリーの研究仲間でもある、クーニー教授は原子力の研究者であり、核廃絶運動の第一人者であった。ドクターヘンリーが今、開こうとしているメールは、クーニー教授からのものであった。メールに添付されていた資料を開くと、そこには放射能研究をしていた科学者のプロフィールが記されてあった。

ある東ヨーロッパにある、チヨルノブイラという村に生まれたミルタンには双子の兄と姉がいた。男女の双子は妹のミルタンと一緒に羊の世話をしていた。ある時核戦争が起こり、村は全滅の危機に晒された。双子の兄は、小さかった妹のミルタンと、双子の姉を助けようと、投下された原子爆弾に自ら飛び込み、二人の姉妹を身を呈して守りぬいた。目の前の無残な光景をみて、妹のミルタンは失語症になってしまった。双子の姉も心神喪失状態になり、一時的に記憶喪失になってしまいが、徐々に記憶を取り戻し、弟

の無念を晴らすべく、看護師となり、戦地に向かう看護部隊に志願した。ところが、戦地で兵士の手当て中に、焼夷弾に打たれ、双子の姉は命を落としてしまった。息をひきとる直前、生まれ変わったらぜったい兄を助ける、そう言い残して、短い一生を終えた。

兄と姉を失ったミルタンは、後に原子力（放射能）研究の科学者になった。この世の中から核を廃絶するという強い信念の元、日夜研究を続けたミルタン。しかし、年間に浴びてもよい1mmシーベルト量をはるかに超える1シーベルト以上をあびてしまい、白血病になってしまう。

ドクターヘンリーは、水虫専用スリッパをずらし、右の足で左の足をごりごりこすりながら、パソコンの画面に見入っていた。ドクターヘンリーはクーニー教授からのメールを興味深く読み入っていたが、このときはまだ、ユノトリラの夢の話と関連があることには気づいていなかった。

ドクターヘンリーが受け取ったメールの話と、ユノトリラの夢の話はなにか関係があるのだろうか。時代も場所も違うところで起きた出来事が、時空を超えてつながる不思議。世の中には科学で説明できないことがまだまだたくさんあるのだ。

## つながり

ユノの職場は相変わらず忙しく、パンをちぎりながら作業場を移動する人、おにぎりをほおぼりながら事務所を後にする人、皆、ひとのことにかまってる暇などない程、一分一秒無駄なく、せわしなく動いていた。ユノが自販機でジャスミン茶を買おうとコインを入れると、ドリンクが二つでてきた。

「お、儲かったねー！」

背後から誰かがユノに話しかけた。

「あ、すみません……もしかして、お金、入れました？」

誰かがすでにいたことに気づかず、コインを入れてしまったのかもしれない。考え事をしていて、時々奇妙なことをしてしまうユノ。

「ははは。大丈夫だよ。2個でてきちやつたんだから、ラッキーって思っただけなんだよ。いいこと」

細身で長身のその男性は、2個目のドリンクをユノに渡した。

「すみません……ありがとうございませう。じゃ、遠慮なくいただきますー！」

ユノはその男性を見上げながら、ドリンクを受け取った。

事務所に戻ると、サポートをしてくれる女性が話しかけてきた。

「さつき自販機で、誰かと話してた？」

「ええ……ドリンクが二つでてきちゃって。私が間違つたみたいなんですけど……」  
話しかけてきた女性の語気が少々強かったので、躊躇しながらユノが答えた。

「そこにいた人って、こんどの新しいプロジェクトの担当者らしいよ」

鼻息荒く女性がユノに説明しようとしていた。

「プロジェクト？」ユノが問いかけると女性は続けた。

「今度、うちの支店でも福祉活動の一環として盲導犬を育成することになったらしいよ。ほら、うちのキャラはシロイヌでしょ？で、その管理者である獣医がさつきの人なんだった。山中さんって言うらしい。先月から来てたらしいんだけど、姿をみるのは、今日はじめて。あんたがさつきしゃべってた人だよ。」

「へえ。獣医ですか」

そう答えながら、そういえばケント君のおじさんも、獣医さんって言ってたつけ。しかもなんとなくケント君に似てるかも。細身で背が高く、どこか繊細な感じがケント君を大きくしたみたいだなと、そんなことをぼーっと考えながら、ユノはジャスミン茶を飲みほした。忙しい時間を過ぎると、帰宅時間になった。そそくさと身支度をして帰途につこうと、セキュリティゲートをくぐって外に出ようとした時、ユノは守衛のおじ

さんに話しかけられた。

「あく、さつき身分証落とした人がいて、あんだんどの部署と同じ階だと思うがら、明日にでもこいづ渡してけね？川下さんさ。」

「あ、はい。わかりました。」

身分証を受け取って、よくよく見ると『山中』とある。ユノは吹き出した。

—『山中』と『川下』って、微妙に違うじゃない！というか、どうしてそう変換されちゃうかな。頭の中で。あのおじさん、いつもそうやって、ボケかましてくるよね。まあ、おもしろいからいいけど。

ユノは笑いながら、本日の献立はなににしようかなと、いつも立ち寄るスーパーの方に向かった。

\*\*\*\*\*

ユノの職場に新しくやってきた男性は、ケントのおじなのか？だとすると、世の中の縁というのは不思議なもので、どこかで丸く輪のようにつながっていたりする、まさに六次の隔たりが無数に存在するのかもしれない。



## シックスセンス

翌朝すぐに山中に身分証を届けようと、ユノは盲導犬プロジェクト室に向かおうとしていた。すると色の浅黒い五分刈りの男がエレベーターを待つていた。

「あーみのさんー！」

声を弾ませ笑顔で近づいたユノの方に顔を向けたその男は

「あつらくー！ユノノー！お久しぶりぶりー」

と、肩をすくめながら喜んだ。

「みのさん、こんなところで何してるんですか？」

ユノが訊ねると、男は目を細めて横目でユノを見ながら答えた。

「何って、見たらわかるでしょ！エレベーター待つてるんじゃないのっ。ランチしてるように見える？」

笑いを堪えながらユノが答える。

「だって行き先ボタンを押さないじゃないですか。どこに行きたいんですか？」

はっとして、バツ悪そうに男が言い訳をする。

「あらいやだっ。あんたが話しかけたから押すの忘れたのよっ」

ユノはよじれそうな腹を押さえながら答えた。

「そうでしたかー。それはすいませんでしたー。▲ですか?▼ですか?」

「う、上よ… 広報課に書類置きに行くのよ」

広報課に置きに行くときいて、不思議に思ったユノは男に尋ねた。

「あれ? 置きに行くって、みのさん広報課でしたよね?」

ユノの疑問に答えるように説明を始める男。

「移動したのよ。今は盲導犬プロジェクトで所長のアシスタントしてるのよ。」

「え! そうなんですか! でもなんで?? アシスタントだったら降格じゃないですか。みのうえさん、広報課では課長だったでしょ?」

口をすぼめて、目元はうつすらと笑いながらユノに説明を続ける男。

「僕、犬がすきでしょお。だから、新プロジェクトに是非参加させてくれって申し出たのよ。降格なんかどうでもいいの。地位や金より犬がすきなわ!」

「みのさんらしいわ。あ、じゃ山中さんって知ってます?」

ユノは預かった身分証を届けに行こうとしていたことを思い出した。

「あたりまえよ。僕の上司だもの。」

「じゃ、これ、山中さんに渡しておいてくれませんか?」

そう言いながら、ユノは山中の身分証を男に渡した。

「なんであんたが持つてんの?」

ユノは男の顔を見て、笑いを堪えながら答えた。

「入り口で落としたらしいですよ。守衛さんが拾ってくれて。それより、風邪なんか引かないみのさんが、マスクなんかしちやつて、もしかしてまたひげそり失敗したとか?」

男はぶいっと横をむき、すねた顔で答えた。

「うるさいわね。朝、鼻の下剃ってたら血が噴き出しちやつて止まらなくなったのよ。絆創膏しても血がにじんじやつて。かっこわるくてしかたないからマスクしてのよ。あいかわらず揚げ足取りばっかするわね」

凶星をさされたとばかりに、声のトーンをあげ、軽く興奮しながら話すその男は蓑上といい、元アマチュアジュニアフライ級のボクサーだ。かなり良い成績を残していたが、打たれすぎてパンチドランカーになる寸前にドクターストップがかかり、ボクサー生命を絶たれてしまった。仕方なくプロへの道をあきらめて、ボクシングのスポンサーだった白犬宅配便に入社した。ユノが入社当時、蓑上が指導係を務めていたため、ユノとは顔見知りだった。

「ところでさ、ユノノ。第3ビルに行っちゃダメよ。」

急に話しが変わるのは常のことだったが、いつになく真剣な蓑上の表情に軽く動揺するユノ。

「帰り道とは反対方向だから第3ビルには行きませんよ。」

ユノの返事にかぶせて早く伝えたいとばかりに、蓑上は口調を早めた。

「あんたのことだから、ぼーっとして、たまにへんな方向行っちゃうじゃん！」

「ま、そうですけど・・・第3ビルがなんでやばいんですか？」

蓑上はユノに近づくと、ひそひそ声で話し始めた。

「あそこね、出るってウワサなのよ」

「出るって、何がですか？777のぞろ目ですか？」

蓑上をみるとどうしても一度はつつこみたくなるユノだったが、蓑上はそれには乗らず、さらに声をひそめて話し始めた。

「業務課のさ、課長が落ちたんだって。あそこから」

突然の話題に驚きを隠せないユノ。

「え！なんでまた？」

「なんでもね、通院してたらしいわ：：心の病気で。こどももまだ学校行ってるのにな・・・気の毒だわ」

蓑上は普段のへっぴりとは裏腹に、人物観察は鋭く人の評価も厳しい。一方で人一倍情が厚く心優しい男で、そんなところにユノも一目置いていた。

夕方になり、ユノは帰宅しようとしてゲートを出たところで、誰かに声をかけられた。一度どこかで聞いたことのある声だった。振り向くと、真つ赤なナツダのオアシスRW7に乗った男が運転席のウィンドウを降ろして、身を乗り出していた。

「名札届けてくれてくれたのって君だよ？ありがとうございます。助かったよ。再発行って面倒だし、時間かかるし。今日はとりあえず仮の許可証で入ったんだけど。」

運転席から声をかけたのは、盲導犬プロジェクトの所長である山中だった。

「私が拾ったんじゃないかって、守衛さんに頼まれたんです。」

テレながら答えるユノに山中はハンドルを戻しながら笑顔で礼を言った。

「でも、わざわざ持ってきてくれたんでしょ？とにかく助かったよ。お礼にといつちゃなんだけど、よかつたら送っていくよ？」

思わぬ提案に一瞬喜ぶユノだったが、寮はすぐ近くだったため、乗せてもらうには近距離すぎた。

「とてもありがたいんですけど、寮、すぐ目の前だから」

正直に答えるユノだったが、できれば横に乗ってみたいと思った。

(ちっ、遠かつたら送ってもらおうのに。いいなあ。あんな車に乗ってて…)

隅々まで清掃の行き届いた美しい車に、ユノは見とれていた。

「じゃ、こんどスイーツでも食べに行きましよう。」

笑顔を向ける山中に苦笑いをしながら答えるユノ。

「ありがとうございます。是非！」

「じゃまた！」

山中はさわやかにそう言い残すと、アクセルをふかし走り去った。深紅の車を目で追いながら、ユノは思いにふけていた。

（ス、スイーツかいっ！ま、好きだからいいけど。というよりそれって社交辞令だよ。でも、あの車かっこいいなあ。いつかあんな車のりしたいなく。というか運転したい！それにしても、ずいぶん手を加えてるっぽいな。マフラーとか特注じゃないかな。お金かかってソ。あくあ、疲れたからうなぎ食べたいなく。でも、今の季節ウナギなんか売ってないよね。じゃ、さんまで我慢するか・・・）

ユノは、近くのスーパーに立ち寄り、当日の晩御飯用と翌日用に魚や野菜を多めに買った。いつも少し多めに購入し、調理して翌日分以降は冷凍保存している。その方が経済的だし、面倒ではないからだ。次の日の夕方、リラがチャットメッセージを送ってきた。模擬試験だったため、近くまで来ていると。一緒に晩御飯を食べようと誘ってきた。

「リラ、今どこ？」

方向音痴のリラがうろろうろして迷う前に居場所を突き止めて、そちらに向かおうと、直接リラにコールしたユノだった。

「んと、コンビニの向かい」リラはすぐに応答した。

「え？コンビニの向かいって、第3ビルじゃないの！第3って書いてない？」

朝、蓑上が話したことを思い出し、いやな予感にさいなまれながら、詰め寄るようにユノはリラに居場所を確認した。

「第三って書いてある」

姉の切迫した声をきいて、突然訪れたことをとがめられるのかと戦々恐々としながらリラが答えた。

「わかった。すぐいくから動かないで」

リラの方向音痴の心配よりも、蓑上の話がひっかかって仕方ないユノだった。

無事落ち会おうと、二人は近くの和食バイキングに向かった。座席について注文を終えると、水を飲みながらリラが話をはじめた。

「さっきさ、第三ビルの前にいたら、ビルのとこにいたおじさんがずっとこつち見てるんだよね。ガリガリで背が小さくて眼鏡かけてた人。姉もみたでしょ？」

ユノは背筋に冷たい感覚が走るのを覚えた。

「私が見た時は、だれもいなかったけど。．．．もしかして、この人？」

ユノは携帯を開くと、勤続30周年表彰式の写真をリラに見せた。

「そう!!!この人!このおじさん!さっきリラのことずーっと見てた人!」

ユノの鼓動が早くなり、いまにも脂汗が吹き出しそうな感覚に襲われた。

「リラちゃん．．．この人、今はこの世にいないのよ．．．」

「まじかい．．．」

どうりで顔面蒼白で微動だにしない人間が、ずっと自分を凝視しているのが、なんとも不自然であったことの原因が今やつと理解できたリラだった。

またしても、不思議な体験をするユノ・リラ姉妹。定期検診の前に、ドクター・ヘンリーを訪れることになりそうだ。

※ユノ・リラの不思議な体験はシックスセンス（第六感）に基づくものなのか。夢の共有や、今回のような現象がなぜ二人に起こるのか。この世とあの世をつなぐ道筋に迷い込むような不思議はこれからも続いていくのだろうか。



## 輪廻転生

ドクター・ヘンリーの定期検診日より先立つて、話しがしたいとイレギュラーな予約を申し込んだユノ。約束の時間にはまだ早かったので、伯父の墓参りをしてから診療所に行こうとしていた。

（みどりのなかをはしりぬけてく、まっかなくなるまゝ♪って、おじちゃんがよく歌ってたな。リラがそれを完コピして、チーたらにぎりしめながら、踊ってたっけ。子供の頃から酒のつまみ系の食べ物が好きで、今でも和食しか食べない子だもんな。ふきの煮たのとか切り干し大根好きとか、変わった子やな。）

とうかまるで昭和だな。平成生まれなのに昭和娘だ〜っていいながら、おじちゃんも喜んでたっけ。いつものように幕があき〜って、いきなり歌い出したときは、度肝抜かれちゃったもんね。なんで知ってるんだ???っておじちゃんがびっくりしてたら、なんと、お笑い芸人のナゲツトのマネやったつちゆう…。

だから黒粘土でつかいほくろつくってたわけやね。なんつっても3才から落語番組の笑線みて、蘭蔵ちゃんおもしろい！って拍手してた子やもんな。かわいかったな。おじちゃんリラのこといつも見守ってくれてありがとう。こんなに大きくなりまし

たよ。）

蠟燭をともし、木蓮の香りのする線香束に火をつけると、ゆつくりとそれらを線香台の上に置いて手を合わせた。

（そういうえば、リラが小さい頃、祖父母の墓参りに行ったら、知らないお墓の方にトコトコ歩いていくから、リラちゃん。そのこはいないこだよって。

3才ぐらいの男の子がお墓に座っているのみえたから、思わずそう言っちゃって。近づいて墓石の掘り名みたら、『昭和45年〇〇三才』って書いてあつて、やっぱりね。：つて思いながら、リラの手をひっぱってそそくさとお墓をあとにしたつて。よく小さい子はあの世の人が見えるっていうけど、リラも見えてたのかな。）

リラの小さい頃のことを思い出しながら、ユノは墓園をあとにしドクター・ヘンリーの元に向かった。

こどもは、生まれてすぐには母親の胎内の記憶があるらしく、話し始める頃に聞いてみると、生まれる前の事を話し出すことがある。天国(?)らしきところでは、モニターのようなものがあつて、どのおかあさんがいい?と訊ねられ、この人、と自ら選んで新しい生命宿を選ばらしい。

なんでもあの世では、次の世での生命活動の準備期間を過ごし、そのあと自ら親を選んで修行の道のりを歩み、さらに魂を磨くらしいのだ。つまり魂のバージョンアップ?

が行われていくのだそうだ。

現世で悪行の限りを尽くした人は人間に生まれ変わることができないとも言われているが、沖縄ではごきぶりが出現すると、あい、おじいがいたよ、と、たくましいおばあが素手で黒い物体をつぶしちゃうらしいから、その話を聞いた時、そのおじいは悪行三昧だったのかな？と、クスクス笑いながらユノは不謹慎なことを想像していた。

生まれ変わった直後は、それ以前の記憶があるらしく、新たな人間としての成長の過程でその記憶はなくなっていくらしいが、まれに大人になってもその記憶が残っていたり、なにか特殊な事象によってフラッシュバックがあつたりするのだそうだ。

ゆうべたくさんつくったおでんをリラに届けようと東の方向に歩いていった。すると車のエンジンが止まる音がした。ふりむくと盲導犬プロジェクト所長の山中がユノに向かって手を振っていた。山中の方に近づき、ユノは挨拶をした。

「こんにちは」

ユノが手に何か持っていたので、山中は興味ありげにしげしげとユノのトートバッグをみながら話しかけた。

「お、いい匂いがするな〜」

ユノは、この人鼻が利くなあとと思いながら笑顔で答えた。

「おでんですよ」

「え？おでん。いいなあ」

山中はまだ昼食前だったため、思わずうらやましいといった顔をしてしまった。

「食べます？たまごぼっかりですけど」

昨日スーパーで安売りをしていたため、たくさん購入したのと、おでんの具はたまごが好きなユノはいたずらっぽく笑うと、山中に尋ねてみた。

「え？いいの？僕、おでんのためたまごが大好きなんだよね」

予想外の答えに一瞬躊躇するユノ。

「え・・・あ、そうなんですか？じゃ、よかつたらどうぞ。お口に合うかわかりませんけど」

リラには好物のきんぴらレンコンも作っていたので、おでんはついでだったし、あげてもかまわないと思いい、なんとなく提案したところ、欲しいと言われ少し戸惑ったユノだった。

「わく。ありがたい。お昼まだだったんだよね。今回二つも借りができちゃたね。今度は必ずスイーツごちそうさせてもらいます」

山中の提案に、やっぱりスイーツなんだ、と、揺るがない提案を快く思ったユノは「じゃ、ぜったい今度は非お願ひします！」

実現したらいいなという思いを込めて力強く答えた。

「はい、必ずね！」

笑顔で答える山中に、ユノはトートバッグからおでんの入ったタッパーを取りだし、運転席の窓から手を伸ばして渡した。

「ありがとう！」

さわやかな笑顔で、山中はユノに礼を言うと、サイドミラー越しに手をふりながら走り去った。

いつ会っても爽やかだなあ、と思いながら軽くなつた手荷物をひじにかけながら、ドクター・ヘンリーの診療所に向かった。路地を入って行くと、ドクター・ヘンリーの診療所が見えた。今日は診療所はお休みだったため、隣にある自宅の書斎に足を運んだ。

築50年の木造建ての家は修繕を重ね、こじんまりとした旅館風の建物で、ユノはこの玄関をくぐるときに漂ってくる木の香りが好きだった。

踊りのお師匠さんでもあるこの女主人は、いつも和装姿だ。上品で質素な藍色の着物で現れたドクター・ヘンリーの奥さんは、ユノに丁寧に挨拶をすると、和菓子と煎茶を書斎に運んでくれた。

ユノは職場の近くで起こった出来事と、リラの小さい頃の事を詳しく語った。話を聞きながら、ドクター・ヘンリーの研究テーマである輪廻転生とユノ・リラの体験が密接に関わりがあるのではないか、またあの世の人々からのメッセージを何らかの加減で、

キャッチできる受信装置を持っている人間がいるのかもしれないと、PC画面の資料と照らし合わせながら、ドクター・ヘンリーは更に考察を深めていこうとしていた。

この世で会っている人は、前世でも関わっているらしいが、それらは科学では証明されてはいない。ただ、魂は何度も生まれ変わりを繰り返し、修行しつづけているのではないかと言われている。

とりあえず、ドクター・ヘンリーへの報告が終わると、ユノはリラの家に向かった。

## ほっこり日和

今日は朝から暖かい日差しがふりそそいでいる。同級生から送られた北海道のおみやげを、職場におすそわけしようと、ユノは高級そうな一口ドーナッツを袋に小分けにしていた。昼休み前に少し時間が空いたので、盲導犬プロジェクトチームにも届けようとしていた。ドアをノックすると、例のおもしろ男、蓑上が出てきた。

「あら、ユノノこんな時間にいったいなんの用？」

笑いながらユノが答える。

「ごあいさつだなー。昨日友達が旅行のおみやげを送ってくれたので、おすそわけに持ってきたんですよー」

「あら〜そうなの〜」

と、自分のためにもつてきてくれたのかと、蓑上はほくそ笑んだ。

「みのさん、ひとりで食べないでくださいよ。ちゃんと所長にも渡してね」

蓑上の魂胆は見え見えだとばかりに念を押すユノに

「あ、あたりまえでしょ！上司を差し置いて自分だけいただくわけないでしょっ！」

「そうですかね〜。ま、とにかく、よろしくう」

人一倍食べるのが早い蓑上は、一瞬で全部たいらげそうだと、ユノは訝しげに蓑上を横目で見ながら軽く会釈して部屋を出ようとした。

「ねえ、ユノノ。あんたさ、どんなタイプが好きなの？」

礼によって唐突に変な質問を投げかける蓑上。

「はあ？ドーナツの好みですか？」

めんどくさそうにユノが答えると

「そのボケいらない。男のタイプに決まってんでしょ！」

何をいきなり質問してくるんだ、とばかりにユノが呆れながら答える。

「人間だったらいいですよ。とりあえず」

ユノのテキトーな答えに、イラツとしながら蓑上が続ける。

「そーじゃないわよつ。ガツチリタイプとか、秀才タイプとか」

訓練中も『ここ以外に住むんだたらどこに住みたい？』とか、まったくもって脈略のない質問を突然してくる蓑上だったが、元広報課なだけに、ヘタなことはいえない。数秒後には全社中に広まる危惧がある。しかしながら、おちゃめなこの目の前のおもろ男が発したアンケートトクエスチョンに、ユノはとりあえず付き合っただけのことにした。

「そうですねえ。繊細なタイプがいいですね。あ、まちがってもみのさんじゃないです



ね」

ちやかしながら答えるユノに、テンションをあげる蓑上。

「ぬわんだって！生意気な子ねえ！こっちだってお断りよっ！こうしてやる！」

と、息巻きながら、持ってた画鋏をユノの頭に刺そうとする元アマチュアボクサー。運動部出身でとりあえず反射神経は鍛えられていたユノは、咄嗟によけた。すると、くぬううう、と言いながらへっぽこボクサーは、ユノの頭をおさえ、人差し指と親指をくつつけてユノの顔面に向けた。

「いつてえー！」

目から火花が飛び散ったのかと思うほど、ものすごい衝撃がユノの額に走った。おでこは痛みを訴えているが、腹も同時に腸捻転を起こしそうな勢いで苦痛を訴えてきた。ユノは可笑しきで腹がよじれそうなのをがまんしながら、ポケットに潜ませておいたコンパクトミラーで自分の顔を確認した。

「あーもー、赤くなってる・・・元ボクサーのくせに、か弱い女子にデコピンとかするかなー。まったく乱暴なんだから。あんなの一家に一台あつたらおもしろいかもしれないけど、毎日ああだったら、うるさくてしかたないだろーな。今度電池抜いとかないと笑い死にするわ」

「なにぶつぶつ言ってるのよー！」

まだふざけたりないとばかりに、乱暴男がユノに絡もうとしたその時、所長の山中が室内に入ってきた。

「おードーナツ!!」

一瞬目を輝かせて、山中がドーナツの置かれたテーブルに近づいてきた。

「所長。ユノノからの差し入れ。どうぞお食べ」

（お食べって、ペットじゃないんだから・・・仮にも所長でしょ）と、突っ込みたい言葉は飲み込んで

「どうぞ召し上がって下さい」

と、笑顔で、ユノは山中にドーナツを勧めた。

「僕、ドーナツ大好きなんだよね」

といいながら、一気にドーナツをほおぼると、両方の頬が丸くふくらんで、まるでコットコハム次郎の様な顔になった。（ぶぶぶぶつ、かわいい。そんなに好きなんだつたら、もっと持ってきてあげればよかった）大食い早食いの蓑上が負けそうな勢いで、ドーナツを口に放り込む山中を微笑ましく眺めながら、ユノは事務所をあとにしようとした。すると、突然蓑上が

「僕も山中ちゃんみたいのに、ロンゲにしちゃおうかな」

と、のたもうた。ユノは一旦床に倒れ込み、蓑上が山中のヘアースタイルのカツラを

かぶった姿を想像し、笑い転げた。葦上よりは髪の毛が長いとはいえ、言うに事欠いて『ロンゲ』という表現を使ったことも、ユノを爆死寸前に追いやった。

そんな出来事を、家に帰ってからPC版テレビ電話で、リラに一部始終報告した。リラも大受けして、今度そのがちやがちやおじさんに会いたい!と、手をたたいて笑っていた。

「いつか見学に行っちゃだめ? 職業体験とかつつつて。獣医先生にも会ってみたいし」  
リラが興味を示したので、ユノもその提案は悪くないと思った。

「いいんじゃないかな。今度、会社にきいてみるね」

白犬サスケでは小・中学生の職業体験を受け入れていた。どの部署での体験になるかは、業務との兼ね合いもあるので、学生側からの要望は必ずしも通らないのであるが、社内に家族親戚などがある場合は、例外として受け入れてもらえる可能性もある。業務課の担当者で電話を入れると、思ったより短時間で承認が降りた。職業体験とは別に、見学ということで、受け入れ許可証を発行してもらった。

許可証を手に、ゲートをくぐったリラは、まず姉の部署に立ち寄り、保護者同伴ということで、盲導犬プロジェクト部屋に入室した。リラは入り口で挨拶すると、満面の笑顔で女子中学生を見ていた、浅黒のごつい男をすぐに認識し、笑いを堪えながら挨拶した。普段から姉に聞いていたため、紹介されるまえに、あのがちやがちやおじさんだ、と

気付いたのだ。

ユノは、最初に所長を紹介した。すると、声には出さず、目で『ね、この人、ケントに似てね?』と、姉のユノに話しかけた。だまつてうなずくユノ。すると、リラは唐突に山中に話しかけた。

「あの、豆柴連れて、ミニ四駆持つてる甥っ子とかいません?」

いきなりのリラの質問に、心臓をつかまれたように驚いたユノは、

「ちよつ、リラ……いきなり失礼……」

ユノがフォローをしようとしたその時

「え? ケントのこと? なんで知ってるの?」

即答する山中に

「えー!!!」

ユノ・リラ姉妹は同時に驚いた。

「なんなのなんなの?」

好奇心たつぷりに、蓑上が訊ねると、ユノが事の次第をぎつくり説明した。なんと、いふ奇遇だろう。でも、せっかくの縁だから、今度みんなでバーベキューでもしようか? との山中の提案に、ユノ・リラ姉妹とへっぽこボクサーはハイタッチしながら喜んでいった。

## 平穏な日々

休日は時間があれば、リラと食事をするユノ。リラが受験中ということもあり、小一時間ほどランチをとることにした。

「職業見学楽しかったよ。早く車の免許もとりたいな。あれって、どのぐらいかかるの？」

リラがルイボステイーを飲みながら、ユノに訊ねる。

「実をいいますと、私自動車学校行ったことないので、詳しいことは知りません。費用はネットで調べてみるけど、期間は人によつて違うらしいから、ママさんにきいてみるね」  
そう言つてドリンクバーのおかわりを取りに行こうとすると

「え？ 姉、自動車学校行かないでどうやって免許とつたの？」

リラが訊ねた。一旦腰を下ろして、ユノが説明を始めた。

「自動車学校通わないで、一発免許と言われるもので取つたのです。免許センターあるでしょ？ ま、ぶっちゃけ警察なんだけど。直接そこで実技試験と筆記試験を受けるの。絶対一回ではとれないようになってるんだけど、受験料だけしかかからないから、自動車学校行くよりは安く済むんだよね」

そんなやり方もあるのかと、興味を示したリラが尋ねる。

「えーそんなのあるの？運転はどうやって練習したの？」

「今はあるかどうか分からないけど、昔は実技だけ教えてくれるところがあって、あとは内緒で、私有地の中で練習したり。仮免許中には、ボール紙でつくった『仮免許』ってプレートをつけて、県北のはじっこまでいったりしました。」

ユノの説明にさらに興味を示すリラ。

「えーひとりで？」

笑いながらユノが答える。

「仮免許は隣に免許歴3年以上の人が乗らないとダメだから、お父さんが乗ったんだけど、居眠りするんだよね……。めっちゃ怖かったけど、おかげで、かなりたくましくなりました」

私はムリだ……。とため息をつきながらリラはユノに他の方法がないか探ろうとした。

「ママさんに、どれぐらいかかったかきいてみて？あの年齢でとったってすごいよね。パパさん亡くなって仕方なく取ったんだっけ？」

「そう。パパさんの車を売りたいくなかったから、仕方なく取ったらしいよ。来週行ってみるね」

そう答えながら、そういえばママさんのところにもご無沙汰していたなと思ったユノ

だった。ママさんとは、ドルチエというカフェのオーナーで、前オーナーのご主人亡き後、ひとりでドルチエを切り盛りしている。ユノの同級生の紹介で、ユノが昔この夫婦にパソコンを教えていた縁でもう15年以上の付き合いになっていた。

このママさんが、ユノに今の仕事を紹介してくれた。ママさんの知り合いが他の部署で既に仕事をしていたため、コネがあつたのだ。ユノの婚約者の没後は、心配してなにかと世話をやいてくれた人の一人だった。日曜日は営業していないので、月曜日のランチに久々に行こうとユノは東に向かつていった。

「あら〜!!!ひさしぶりー!!!」

甲高い声で、出迎えるドルチエのママ。

「ママさん、相変わらずセンスいいね。そのブーツイタリア行つたとき買ったの?」  
何か一つ話題を提供すると、しばらく止まない程話し好きな人である。

「そうなの〜!ミラノのね〜etc etc」(30分ノンストップ耐久へ突入)

あいにくの天候で客足がなかったことも幸いしてか、しゃべり続けるカフェの女主人。存分にしゃべらせてあげないと、質問するタイミングをつかめない。だまつてきていると、女主人の方からたずねてきた。

「そういえば、リラちゃん元気?」

「元気元気。今受験勉強中で今日は連れてこなかったの。ママさんに免許のこと聞きた

「いつて。どれぐらいかかったんだっけ？」

女主人はユノよりもひとまわり以上も年上であるが、しゃちこぼった関わりを苦手とするため、ユノも極めてフランクに接するように努めていた。女主人はひととおり免許をとったときのことを説明すると、唐突にユノに質問を投げかけてきた。

「ところでさ、ユノ。だれかい人いないの？彼亡くなつて、もう5年でしょ？」

「へ？ママさん相変わらず、急に方向変換するよね。ウインカーあげてからじゃないと危ないよ？」

動揺を隠すかのように、ユノが女主人の質問をはぐらかした。直後、真つ赤な車の持ち主の笑顔が脳裏をよぎった。ユノは冷静さを取り戻そうとして、水を飲み干した。それからカフェ自慢のクワトロフォルマッジをゆったり味わいながら、ユノは久しぶりに女主人と談笑した。

夜になってリラからチャットが入っていたので、ドルチェでの会話を報告することにした。

「じゃあ、あたし12月誕生日だから高校中に免許通えるよね？」

ちよつと考えながら文字で返答するユノ。

「通えるけど、受験勉強中じゃないのかな。その頃。一浪はさせられませんよー」

「そっかー。じゃあ、大学入ってから通った方、いいかな？」



ひねくれているかと思うと、妙に素直なところもある中3女子だ。「バイトして自分で払ってね。」

なにからななまで保護者が負担をすると、依存心が強くなってしまうことを懸念していたため、ユノはあえてリラに苦勞を買ってでもさせようと考えていた。

「ところでさー、学校でもジョヨンのこと話題になって、他のメンバーすんだろね？とかって話してる。ミーナがさ、レミンのファンだからさ。あたしとミーナって趣味かぶんないんだ。てか、姉とも趣味かぶんないよね？」

リラは困ったときやテンションがあがったときは、おねえちゃんと呼ぶこともあるが、普段はユノのことを『あね』と、呼んでいる。

「あんたと趣味かぶらないって、年の差あるもの、対象になんないでしょ？」

時々同年代の友達と会話しているような錯覚を起こさせる程、リラは中学女子にしては、ませた会話でユノを刺激してくる。

「今時年の差なんて関係ありませんよ。姉様。好きになつたら、年なんてもうまんたい（無問題）！」

大笑いしながら、キーボードから絵文字を送るユノ。

「姉さ、キャパ広いじゃん？」

リラのチャット攻撃に応戦するユノ。

「広いつてさ、少年男子とかは男子趣向で話が盛り上がるだけで、恋愛感情つてのとはまた別なのではないでしょうか」

中学生相手にとりあえず正統理論で返すユノ。

「わかりませんよー！ー！人々を好きになるには理由なんかありませんよつ。気が付いたら、フォーリンラブ！つてことも世の中多々ありますからねえ」

どこのおっさんだ？と、思いながらユノが応じる。

「なんですか、そのおっさん発言は。おいちゃんが憑依してるんでちゆか？」

軽くふざけながら、リノの返事を待っていると

「あー、そうかもね。でもさ、姉、背中押さないに進まないでしょ。おいちゃんが、天国から、あくもどかしいな！つて、あたしに乗り移ったのかもしれないぜ？恋愛の女神は後ろ髪がないそうで。前髪つかみそこねると、うしろはつるんつるんで、あり？つてことになるんだつてよ！」

恋愛の女神とやらの姿を想像し、爆笑しながら震える手でキーボードを打つユノ。

「ひゃー！4才の恋愛博士に説教されちゃいました。はいはい、やるときやります。がんばります。伝えたい思いがあれば、伝えるよう努めますダ」

受験勉強の妨げになるようなことをしてはいけないと肝に銘じていたが、時折の息抜きは必要かなと、短い時間のチャットには応じるようにしていた。

「姉、そういうえば最近、不思議な夢みないな。ってか、夢見ずに爆睡してるよ。不思議なことつて続くときは続くよね。なんかあるのかな」

リラの質問にはつとしながら、深呼吸してから締め文を送った。

「受験生はそんなこと心配しなくていいから、勉強がんばんなさい。たまに息抜きはいいけども」

「はいはい。じゃね。おやす〜」

受験生を配慮する姉の真意を読みとったリラは、素直にチャットを終えることに了承した。

不思議な夢をみないね、と、リラに言われたときに実はある夢について思い出ししていた。数日前に、赤い車の助手席で景色を眺めながら、森の中を走っている夢だった。あれ？もうつきあつてるんだっけ？と、思いながらユノが持参した手作り弁当を赤い車の主と仲良く食べている夢だった。目覚めると、あまりにリアルな感じが残っていたため、しばらく動悸がおさまらなかつたのを覚えている。

数ヶ月後、リラの進路も決まり、落ちついた日々を送っていたユノだったが、ある時、廊下で騒がしい浅黒男の姿をみつけると、さつと柱のカゲにかくれたユノ。今、笑い死したら仕事に影響してしまう。顔を合わせるわけにはいかない……すると

「そこにいるのはわかつてんのよ！でてきなさい！」

へっぽこのくせに、動物的勘だけは異常に冴えている、盲導犬プロジェクトのアシスタントだった。

「バレたか……。今日はちと忙しいので、みのさんの相手できませんよー。」

と言うと、表情を変えずに、浅黒アシスタントの叢上は話しを始めた。

「お宅のお嬢ちゃんの前路も決まったことだし、みんなBBQしない？ っていううちの山中ちゃんが言ってるんだけど、どう？ 山中ちゃん家で花見BBQだって。持参するものとか日程はあとで知らせるから」

いつものふざけた会話ではなくて、イベントの提案だったため、ふいをつかれたユノは、すぐに返答できなかつたが、短気なこの男はそんなユノの躊躇を受け止めてはくれないだろうと、とりあえずまじめに返した。

「あ、わかりました。じゃ、連絡待ってます」

数日後、待ちに待ったBBQの日。ユノとリラは一緒につくったお酒のおつまみと、飲み物を持参して山中の家を訪れた。

「いらっしやい。気楽にしてね」

笑顔で出迎えた山中の横には、少年ケントも嬉しそうに立っていた。

「ケント君、久しぶりだね。元気だった？」

笑顔で話しかけるユノに、照れながらケントがうなずいた。

（あ、がちやがちやおじさん！）と、お気に入りの浅黒おやじをみつけると、リラは藁上の隣に陣取った。人数分よりはるかに多い肉や野菜を焼きながら、たわいもない話して盛り上がっていると、山中は沖繩の水族館時代の話をはじめた。

「イルカって、笑うんだよ。でもね、イルカは心のきれいな人にしか笑いかけないんだ。キジムナーも心のきれいな人にしか見えないんだよ」

すると、ユノは速攻で

「じゃあ、みのさんは一生イルカの笑顔もキジムナーもみれませんねー」

とつつこみを入れた。すると

「なんだってー！ー！！」

と、叫びながら、トングを持ってユノを追いかけた。引退したとはいえ、元アマチュアボクサーの俊足に勝てる人はいないと思いきや、それをしのぐ勢いで超ダツシユで逃げたユノは忍者のごとく森の中に雲隠れしたのだった。

「あの人達、漫才コンビみたいだね」山中が笑いながらそう言うと、リラが答える。

「そうですね。でも漫才コンビってオフでは仲悪いらしいですよ」

「じゃあ、実は犬猿の仲なのかもね？」

その言葉にケントが反応した。

「どっちが犬でどっちが猿？」

山中はうくと、腕を組みながら

「蓑さんは犬好きだけど、猿っぽいよね？申年（さるどし）だしね？」

山中の言葉を聞いて、リラとケントが爆笑した。

「あるあるく!!!」

リラもケントも手をたたきながら、激しく同意していた。

「姉はオオカミ犬かな」

リラの意見に一同うなづく。

まだ肌寒い春BBQの夜、一帯は暖かい笑顔に包まれていた。

※キジムナー：沖縄で樹木の精霊として伝えられているこどものような妖怪で悪さをしたりせず、どちらかというとな天使のような存在。

## 引き寄せの力

山中の家の裏にはうつそうとした森があつた。葎上からの猛攻から逃げ切つたユノはいつたん休憩しよう、古木に寄り掛かつた。ところが、あれ?ここどこだ?どつちから来たんだ?わからない・・・その時、道に迷つたことに気が付いた。手ぶらで飛び出してしまつたから、携帯も財布も置いてきてしまつた・・・はて、どうしたものか。へたに動くと、遭難してしまうかも・・・薄着できてしまつたから、この季節に夜を越すのはよくないな・・・なんとかしなくちや。

「すいませーん、だれかいませんかー」

その時、がさつ、と草に何かが触れた音がしたので振り向くと、「こつち!」という声が聞こえた。ユノは声のする方向に歩いていくと、遠くの方で子供のような人影が見えた気がした。「あのお!」と、いいながら、追いかけていくと、赤い髪の毛のこどもの姿がちらつと見えた。

(え??キジムナー?まさか・・・さつき話してたばかりだから、思い違いかな)

そんなことを考えながら、人影のする方に歩いていくと通りに出た。

(よかつた)

ほっと溜息をついて前を見ると、山中とケントが心配そうな顔できよろきよろ通りを見渡していた。

「あーいたー！」

ケントがユノを見つけると、ユノの方に駆け寄ってきた。

「迷ったんじゃないかと、心配してたんです」

ユノの無事を確認し、安心するケント。

「ごめんねー」。調子こいちゃって走りすぎちゃった」

と、謝りながら、内心ホツとしていたユノだった。

山中の家に戻ると、蓑上とリラも心配そうな顔でキャンプチェアに座っていた。悪態はついても心優しい蓑上は

「走りすぎてお腹すいたんじゃないの？まだ肉あるから食べたら？」

と、ふざけた手前、少々責任を感じてのねぎらいだった。紙皿の肉をつつきながら、ユノが森の中で迷ったら、子供に案内されたと言うと、ケントが

「もしかしたら、キジムナーかも！」

と、一瞬、立ち上がって森の方を見た。以前、犬を連れて散歩をしているときに、森に入ってしまったとき、ユノが体験したのと同じように、案内してくれた



こどもがいたらしい。こどもなのに髪の毛が赤かったので、すぐにキジムナーだ！と思つたそうだ。なぜなら、ケントが沖繩にいた時も、キジムナーに助けられたからだ。沖繩にはガジュマルという南国独特の大きな木があるが、そのそばに立っていたのが、髪の毛の赤い子どもだった。その子どもはケントをみると微笑んで「いつかもうひとりの君に出会おうよ」と、ささやいたそうだ。

ユノとリラはケントの話を真剣に聞いていた。

「ケンちゃんはおかしいからいいけど、いい大人が白昼夢みちやつて。」

反省したのはほんの5分程で、すぐに調子を取り戻した蓑上にユノが応戦する。

「うるさいなー。ピユアな少年の前で夢を壊すようなこと言わないでくださいよつ。だから腹黒いって言われるんですよ」

と、言つた瞬間、殺気を感じたユノは

「あ、今回はもうなしね。ロープロープ。ノーカウント！」

蓑上も、また遭難されたらかなわれないと思ひ、ふざけたい衝動を抑えていた。

「今日はたのしかった。今回、法事って言つてたから、ミーナとユウトは誘わなかつたのですけど、今度連れてきていいですか？」

と、リラが山中の方を向いて話しかけると

「どうぞどうぞ！多い方が楽しいもんね。」

笑顔で答える山中。

「ミーナかわいいから、危険だなー」

性懲りもなく、蓑上をみながら、ユノはまた絡もうとする

「どういう意味よ？」

いちおう冷静に応じる蓑上

するとリラがユノに

（だいじょうぶ。へんなことしたら、かみつくから！）

と、シークレットサインを送る。

ユノがそれに応じる

（かみついたら、歯が砕けるよ。ブリキでできてるからね、この人）

ユノ・リラ姉妹のシークレット会話に気づいた蓑上は

「なに、この女たちはコソコソしてんのっ。」

と、2人を睨みつけた。

「さて、宴もたけなわ、デザートタイムにしますか。」

そう言いながら、山中は買っておいたクレームブリュレを持ってきた。

（スイーツおごりますってこれでチャラにされそーだなー。まあいいけど）

ユノのテンションが少々下がる。

「あら、ユックマツクのじやないの」

と、喜ぶ蓑上。ごつい外見からは想像できないが、彼も大のスイーツ好きだ。

たのしいひとときを過ぎ、リラを送ってユノが寮に戻ろうとすると、リラが別れ際こんなことを言った。

「ねえ、姉？もし獣医になれたら沖繩行つていいかな？北海道のミツゴローさんともいいなつて思つてたけど、沖繩もいいな―つて。キジムナーにも会つてみたいし」

「いいかもね？知り合いがいないとつらいけど、ケント君達とも知り合えたし、つてを頼ることもできるから、その選択肢はありかもね」

もしかしたら、サスケの生まれ変わりも、ケント君たちも、あのキジムナーが連れてきてくれたのかもしれないな、と、ユノは夜空に瞬く星を見上げながら、ファンタジックな気分浸っていた。

## 青天の霹靂

その日はなんだか胸騒ぎがしていたユノだった。前日の休みに部屋を大掃除して、不要なものは徹底的に捨てた。なぜなら、部屋のスペースを確保したかったからだ。昔UF0キャッチャーでとりまくったぬいぐるみも最低限お気に入りのものだけ残して、あとはそのままエリア指定のゴミ袋に入れた。

かなり大がかりに掃除をしたため、久しぶりに体力を消耗した。翌朝、寝坊してしまい、あわてて家を出た。いつもなら左右を確認してから通りに入るのに、焦ったためか、思わず飛び出してしまった拍子に、左から来ていた軽自動車に気付くのが一瞬遅れた。目の前にある車の運転手の表情が、あ！と驚くのが静止画像で見えた。その瞬間、ゴン！と鈍い音を立てて、ユノの体は1回転し、地面にたたきつけられた。

(や、やばい……これで研修は打ち切りだ……)

業務研修を控えていたユノは、車に跳ねられた瞬間、すべての予定は水の泡になったことを悟った。しばらくして救急車が到着すると、救急隊員はユノにいくつか質問をして意識の有無を確認した。ひとつひとつの質問にゆっくり答えるユノをみて、応急処置をしながら、隊員はユノの意識がはっきりしていると判断し、血圧を測った。

病院に到着すると、待機していた医師と看護士が運ばれてきた怪我人に声をかける。

「大丈夫ですか？動けますか？担架からこちらのベッドに動けますか？」

ユノは、これからくるであろう痛みを想像しながらも、まだなにも感じない状態を幸いと思いついて、

「大丈夫です。自分で行けます」

しっかりと答えると、匍匐（ほふく）前進で簡易ベッドに移動した。その後、レントゲンやCTを撮られ、医師より症状についての説明があった。

『全治6週間、尾てい骨骨折』

ユノにとっては初めての骨折だった。高校生の時に小型バイクを運転し、後方から車に跳ねられたときは、ただの打撲だった。

木登りをして手が滑って落ちたときも、打撲だけで、『骨折』という診断は初めて耳にした。ただし、骨折と言っても、ぽつきり折れたわけではなく、ヒビが入っただけだった。ユノの家系は骨が丈夫で、母も祖母も頑丈な骨を持つていたため、ユノも最悪の事態は避けられたようだった。

入院はせずに済んだが、当日の夜から数日間、体を動かすたびに絶叫する日々をすごさねばならなかった。痛み止めが切れると激痛が走る。飲み続けると、胃に負担がかかる。このジレンマに苦しみながらも、2週間目には、自分で簡単な料理ができるまで

になった。15分ぐらいなら、立っけていても問題ない。それ以外は、寝室にノートパソコンを持ち込み、ニュースや動画などを見ていた。

友達や家族も看病すると申し出てくれたが、自炊もできるから大丈夫と、断っていた。リラは時折チャットで、様子をうかがってきた。そういえば、前日にぬいぐるみを捨てた、という話しをしたら、それはだめだよ！ちゃんと供養しなきゃ、と言われ、ぬいぐるみを袋に入れた瞬間、閃光が走ったことを思い出した。たしかに、人の形をしたものを捨てるときは注意が必要だということはどこかで聞いたことがあった。不注意を反省しながら、体を休めるために横になった。

普段より眠りにつく時間が長かったためか、不思議な夢をみていた。

一面に広がるひまわり畑。ふたりの子供が遊んでいる。男の子は女の子より少し背が高いが、同じぐらいの年に見える。

「サムエル、四つ葉のクローバーみつけたよ！」

「お、よくやったな。アニタン。壊さないように持ち帰るんだぞ」

2人は仲良く家に戻ると四つ葉のクローバーを分厚い植物図鑑に挟んだ。

「四つ葉のクローバーはTrue Love(真実の愛)っていう意味があるんだ。いつか必ず真実の愛をみつけられるんだ」

双子の弟サムエルは、数秒前に生まれたというだけで姉とされたアニタンの先回りを

してリーダーシップをとっていた。行動力のあるサムエルのことを、姉という自覚はないアニタンは兄のように頼りにしていた。

姉弟仲良く植物図鑑をながめていると、小さい妹のミルタンがとことこやってきた。サムエルはミルタンを膝に乗せると、図鑑のページをめくってみせた。窓の外では、たくさんの向日葵が風に逆らうかのように揺れていた。

ちようどその時、ドカーンという大きな音の後に、キーーーーーンと耳をつんざくような音が一带を覆った。「空襲だー」

サムエルがそう叫ぶと、ミルタンをかかえ、アニタンの手を引きながら、近くの防空壕に逃げようとしていた。ドーン！という爆音と震動が3人の背後まで迫っていた。サムエルはミルタンとアニタンを大きな岩のそばに座らせ

「ここを絶対動くなよー」

姉と妹をとりあえず避難させると、爆音のする方に勢いよく走っていった。アニタンとミルタンが爆撃機から追撃されるのを避け、自分の方に誘導しようとしたサムエルは「ここっただー！ここっちに来い！」

と叫び、手を振りながら、爆撃機を挑発した――

――その時――

爆弾がサムエルの体を直撃した。サムエルの体は一瞬で粉々になってしまった。

一部始終をみていたアニタンはミルタンを抱きかかえながら、その場で気を失った。泣き叫ぶミルタンの声を聞きつけた村の民兵が、2人を保護して病院で手当を受けさせていた。

「いてっ！」

寝返りを打った瞬間に夢から目覚めたユノは、無意識に涙を流していた。あまりにリアルな夢だったために、動悸がしばらく治まらなかつた。

（不思議な夢だった……。今度のリハビリの帰り、ドクター・ヘンリーのところに行つてみようかな。タクシーなら大丈夫だよね）

そんなことを考えながら、またうとうと眠りについたユノだった。

徹底的に安静を保つたのと、鶏肉中心の料理で筋力を増強させたのが功を奏したのか、全治6週間の診断は3週間で完治という診断結果にカルテが置き換えられた。休養中は、蓑上ランボーからもメッセージが来ていたが、笑うと腰に響くため、しばらく放置していた。

（そういえば、山中さんはなにも言っていないな……。私のことなんかドーデモな感じなのかな……。）

来て欲しい人からの連絡が来ず、ため息をつくユノだった。



病院でのリハビリを終えた後、ユノはドクター・ヘンリーの診療室に向かった。短時間なら座っていられるまでに回復したユノは、早速夢の話を始めた。ドクター・ヘンリーは眉間にしわを寄せながら、以前クーニー教授から送られたメールをプリントアウトしはじめた。

「四つ葉のクローバーには『復讐』という意味もあるんだ」

「え???’」

ユノはこれまで信じていた事が、180度覆されたようで、驚きを隠せなかった。何を隠そう、ユノも子供のころ拾った四つ葉のクローバーをパウチして大切に持っていたからだ。

## 休憩室「番外エピソード」

〈蓑上さんのお気楽で豪放磊落な日々〉

●ある日、蓑上さんが「ヒートテック着てるのに寒い〜っ」て言うので、爆笑したら、TT（トータル・トスという業務用端末）で頭を殴られた上に、更にそのTTの角で頭のとっぺんをぐりぐりされた。なぜ笑ったかというと、

以前「寒いー寒いー、あんた、そんな格好で寒くないの!?もつと厚着しなさい!」  
と言った、舌の根もかわかないうちに、1つ仕事を終えて帰ってきたら、

「暑い〜暑い〜、あんた、暑くないの?脱ぎなさい!」と、まったくもって得手勝手なことを抜かしていたことを思い出したから。

●階段から勢いよく駆け下りてきたと思ったら、あと2段というところで、ズルつとすべつて、どん、どん、どんと3段階に渡って体を強打した後、背中から着地。一瞬死んじやったか!?と思つて、大丈夫ですか!!!と、声をかけたら、

「ロウサイだーろうさいだー労災だー」

と、天井を見たまま、両手両足をびくびくさせていた。とりあえず生きていたから

ホツとしたが、その姿が、殺虫剤かけたゴキブリみたいで、笑いを堪えるのが大変だった。

●ある真夏の夜、蓑上さんが、早川部長さんに話しかけていた。

「も〜暑くて、ぽけつとの中びしよびしよですよ。財布とか大丈夫ですか？」

早川部長：(???)

「おれ、財布がびしよびしよになって、中のお札までよれよれになって、入金機に入られなくなっちゃうんですよね。みんな大丈夫ですか？」

って言うんで、(財布の中までびしよびしよになるやつなんて、おらん!、それって汗じゃなくて油漏れしてんじゃね?)と、言いそうになって大爆笑したら、

くるつと振り返って、「なんで笑うんだ!!殺す!」と言いながら早川さんの方を向いて

「早川部長、こいつ殺していいですよね?」との、蓑上ランボーの意味不明な発言に「???」え?って顔の早川部長。

すると

「ほらっ、早川部長のお許しが出た!」早川部長は何も言っていないのに、勝手に承認受諾されてしまい、またまた充電器を握りしめながら、鬼の形相で追いかけてきた。

●いつも左右が逆で、もともとは左利きなことを言い訳にしているが、

「あ、雲が西の方から動いてきた。そろそろ雨がふるぞ」と、動物的な勘で方角だけはおぼろげにみたく、その直後、雨が降った。

● 上下左右が逆なだけじゃなく、時刻設定も狂っているらしく、曜日順序もわからないらしい。

「ねえ、テツヤ、今日何曜日?」

「火曜日っす」

「じゃあ、水曜日って明日?」

「そーっす」

「じゃあ、月曜日っていつ?」

って、縁側のじーちゃん&ぼーちゃんみたいな会話を繰り返している。

● じゃあ、次の待ち合わせ場所はここね! といって、人差し指で下を指していたので、今いるA地点で待ち合わせという意味だと思って、一仕事終えて、A地点で待っている。と電話がきて、「なんで来ないの!!」と、ぶんぶん怒っている。とりあえず本人が言っている場所に行くと、どうやら、手に持っていた箱に書いてあった住所を指して「ここ」って言ったつもりだったらしい。

あんたが持っている箱の住所を指して「ここ」って言われたってわかるかい! と、憤懣やるかたない気持ちでいっぱいだったが、まあ、おんぼろなんで仕方ないや、とあきら

らめた。

●「じゃ、次の通りにいるね！」

というので、おそらく、次の次だと思つて、二つ目の通りにいたら「よくわかつたね〜!!」と、大喜びしていた。

なんでわかつたかというのと、「次」と言つたあとに、少し間隔置いて、あごで「の」と差したから、たぶん、やつの中では「次」(ひとつめ)「の」(ふたつめ)だろうと思つて、脳内傾向と対策マップを広げたら、二つ目に違いないと確信したからだ。

●ときどきしゃべるのがめんどうくさくなるのか、待ち合わせ場所を的確に告げずに、

「次はね〜臭いできがしてね？」

というので、オイルの臭いをたどつて、行つた場所を予想し、見事にビンゴで無事会えたら

「さすがだね〜♪」と言つて喜び、爆弾みたいなおにぎりをくれた。

## 花言葉

新緑の季節になった。ユノも全快し、快気祝いも兼ねてピクニックをすることになった。前回、合流できなかつた、リノの友達のミーナとユウト姉弟は今回参加することができた。

「あれ？がちやがちやおじさん、来ないの？」

リラがユノに尋ねる。

「え？ランボーなあのおっさんのことですかい？あの方なら、畑の草取りでお休みですよ」

ケタケタ笑いながらユノが答える。

「リラーノ、がちやがちやおじさんって誰？」

リラの仲良しであるミーナが尋ねた。

「ミーナは知らなくていんだよ。一度みたら夢に出てきそうな程、強烈だからね。まちがいなくうなされるから」

リラのコメントに、ユノ、ケント、山中も爆笑していた。

「ミーナ、差し入れありがとね。おかあさんにお礼言っておいてね。そういえば、ミーナ

はおかあさん似だね。ユウトは大きいけどミーナ小柄だもんね。リラは身長だけはやより少々低めだから、3人でミニモニじゃね？」

ユノがそう言う

「姉は年寄りなんだから、混ざらないですよ！」

と、リラがつつかかる。

「なんだってーーーーー！」

ユノが血相を変えて立ち上がる。

「ちよ、姉。がちやがちやおじさんみたいだよ。その速攻な反応！」

リラが後ずさりしながら、抵抗しようとする

「せっかくいなくて静かなんだから、やつこの話題を出さなくてもよいつ！もー、いなくてもうるさいってか、存在感あるんだから」

ユノもリラも騒がしい蓑上がないため、つつこみどころを変えてふざけていた。

「あれ？リラちゃん、どうして爪がオレンジなの？」

ケントがリラの爪をみて尋ねた。

「ああ、これ？これね、ハウセンカを絞った汁で染めたの。初雪までに消えなかつたら、初恋が叶うんだって」

リラが答えると

「リラちゃん好きな人いるの？」

と、山中が尋ねた。

一瞬ドキツとするユノ。

「ん〜予定は未定です！好きな人ができたら、叶ったらいいなって。まだ、好きな男子とかいなくて、物色中でえ〜す」

明るく答えるリラに

「こら、物色とか、品のないことをお言いでない！」

少々焦りながらユノが突っ込むと

「そういうお年頃だもんね？」

山中が笑顔でそんなことを言うので、リラが調子づいて恋話を始めた。

「四つ葉のクローバーもね、持つてると幸せになれるんですよ。姉も大事に持つてて。真実の愛って意味があるらしくて。ね？姉？」

リラが話し始めると、なぜか焦って変な汗をかいてしまうユノだった。その時、ケントが反応した。

「ぼくも四つ葉のクローバー持つてるよ！沖縄にいたときに見つけて、押し花にして大事に持つてるんです。」

と、言いながら携帯の画像を見せた。



「え？どれどれ？」

興味を示したユノは、ケントから携帯を受け取って画像をみた。いつものクセで、思わず画面をスライドしてしまったユノは、次に表示された画像をみて、驚きを隠せなかった。

「これ……この赤ちゃんの写真ってだれ？」

ユノの質問にケントが答える。

「あ、僕です。僕の赤ちゃんの時の写真です」

ユノがリハビリ中、パソコンでネットや動画を見たついでに、アルバムをめくって懐かしむように、フォルダの画像一覧も閲覧していた。その時、takami.jpgというファイルが気になり開いてみた。すると、赤ちゃんの写真が表示された。

（タカミ……あ、お兄ちゃん？私が生まれる前に生まれてすぐに亡くなった赤ちゃんがいたって聞いた。生きてたら3個上って言ってたな……これ、たぶんその画像だ。）

その画像を思い出し、ケントの乳児期の写真がユノのパソコン内の画像と酷似していたため、思わずケントの携帯を凝視してしまった。つまり、生後すぐに亡くなったユノの兄の乳児画像とケントの乳児画像がそっくりだったのだ。

「ま、皆さん、いつかはラブラブになって幸せになりたいってことで、いろんな迷信を信じておられるわけですね。あたくしは、学校でネイル禁止なので、花染めなら、まあ

いいかって、やってみたわけです。ネイルはだめだけど、花染めとかそこまでは厳しくないの、このぐらいなら、突っ込まれないかと」

リラがそう言うと

「私にも今度やって！リラーノ」

ミーナはホウセンカ染めに興味を持ったようだった。

「ミーナはなんにもしなくたって、モテモテでしょ」

ミーナをからかっているリラをみながら

（この子達の願いも、私の願いもいつか叶うといいな。自分の本当の気持ちを真剣に伝えるのってむずかしいよね。照れてしまつてちゃんと見えなかつたりとか、からかつてると思われてしまつたりとか。）

軽いため息をつくユノ。

（へっばこランボーは恋愛感情まるでナツシングだけど、彼も幸せになつたらいいねって、願つて止まないな。人としては好きですからね。おもしろいし。てか、本当に心から思っている人には、どうやって伝えたらいいんだろう。・おにいちやんがいたら、どんな感じだったんだろ？ こういうことも相談できたかな？）

遠い目をしながら、妹達の会話を聞いていたユノだった。

## トマテスタン

体調も大分回復してきたが、週に1度、ユノは通院リハビリをしていた。今日は早退して、リハビリ後ドクターヘンリーの研究室を訪問する予定だ。帰宅の準備をして書類を整理していると、がに股で小太りの男性がユノに話しかけてきた。

「やあ、ユノノン、最近どやの?」

ユノはクスッと笑って、お決まりの答を返す。

「へい、ぼちぼちでんなあ」

すると、間髪おかずに小太りの男性がユノに問いかける。

「なあ、ユノノン、さつきサッカー見てて、思ったんやけど、カザフスターンとか、アフガニスターンとか、なんでスターンスターン言うんやろなあ?」

ユノが答える。

「なんでも、スターンっていうのは、『山の人々』って意味があるらしいですよ。だから、カザフ山の人々、アフガン山の人々、トルクメン山の人々、なんだそうです」

すると、小太りの男は目を見開いて

「ふおく!!! そうなんや? ほんだら、それネタとしていただくわあ。事務所戻ったら、

さつそく自慢したろ」

男はこつてこての大阪人と見えて、ちよつと変わった話題を入手すると、すぐに仲間に披露するという段取りが喜びなようだ。小ネタを多く持っているユノは、いつもこの取引先の男の標的になり、ネタ提供を余儀なくされるのであった。

ユノは事務所を後にし、リハビリを終え、ドクター・ヘンリーの元を訪ねた。前回の訪問時は、まだ本調子ではなかったため、短時間のインタビューだった。今回は、ピクニックの報告も兼ねて、ティータイムモードでゆったりくつろぎながら、会話をすすめた。

事故後、安静にしている日が長かったため、ユノはいろんなことを回想していた。これまでの不思議な体験を、箇条書きで項目だけパソコンに入力しておいた。そのうちのいくつかを話し始めた。

大分前に1年間だけ、臨時職員で勤めていた役所でのことだった。健康保険課での業務中、問い合わせがあった。健康保険を取得する手続きに関して必要書類をたずねられたため、説明すると、どうしても離職証明が取れないという。

そこで端末で情報を調べると、画面に表示された個人情報を見てユノは愕然とした。問い合わせた来たのは、ユノの友人の父で、長い間行方不明になっていた人物だった。画面に表示されている名前は、住所番地から間違いない友人であることがわかった。

とりあえず取得方法についての説明を終えると、問い合わせてきた人物は、家族には秘密にしてほしい、問い合わせてきたことは告げないで欲しいと懇願してきた。もちろん個人情報の開示しないことになっているので、極秘事項として扱いますと告げると、問い合わせた人物は安心したようだった。

しかし、ユノは仕事人として守秘義務は徹底しなければならぬということと、一個人として友人を安心させてあげたいというジレンマが襲ってきて仕方なかったが、とりあえず友人には黙っておくことにした。それにしても、前日その友人と会って、ユノはその会話をしたばかりであったので、翌日問い合わせがあったことに驚きを隠せなかった。

その数年後、交通事故相談センターで受付業務をしている時のことだった。その上司がある日、自分の家への道のりを詳しく告げるので、ユノは不思議に思った。3年間勤務していたのに、そんな話をしたことはなかったからだ。突然そんな話をするなんて、不自然だと感じていたら、数日後に、上司は心筋梗塞で亡くなってしまった。突然だったが、ユノは、上司の家へ香典と供え物を届けに行こうとバスに乗り、上司宅付近で降車したが、上司が言っていた通りの景色がみえたため、一瞬も迷わず、上司宅に着くことができた。

これら一連の不思議な出来事を簡潔に説明し終わり、お茶を飲みながらユノがドク

ター・ヘンリーに質問をした。

「ところで、先生、ちょっとおたずねしたいのですが、先生の馴れ初めって、どんなかんじだったんですか？」

なぜそんなことを聞くのか、だいたいの予想はついていたが、ユノとは長いつきあいでもあるため、個人的なことを話しても差し支えないと思い、ドクター・ヘンリーは椅子を回転させてユノの方に向きを変えながら話はじめた。

「僕は遠距離恋愛でな。なかなか会えなかつたんだよ。今のように携帯もメールもないからね。もっぱら手紙交換だったよ」

ユノは大いに興味を示した。

「手紙・・・ですか!! いいですね! 直筆の文章って、いいですよ。本人の心が伝わってくるような、暖かい感じがしますね。」

答えながら（手紙ねえ・・・それっていいかも。でも、手紙を書いたとして、事務所では渡せないしな・・・壊れたラジオみたいになるさいおやじがいるから、見られた日にはどんな恐ろしいことになるか、わかつたもんじやないし・・・自宅に送つても本人以外に見られるかもしれないし・・・うくん）

ユノの懸念がわかつたのかドクター・ヘンリーはあるヒントをくれた。

「メールもいい点はあるよね。まず間違いなく本人がみるから。でも、手紙だと家族に

見られるんじゃないかと思つて、僕は簡易書留で送つたんだよ。『親展』つて書いたところで、開けられてしまつたら同じだからね。」

(なるほど！簡易書留なら本人の手に直接渡るから、ポストに入つていて誰かに取られたり、みられたりつていう心配がないのか！)

ポストに入つているものを、わざわざ抜き取る人もいないだろう、と、思つたが、近所の子供がいたずらしたりすることもないとも言えない。しかし簡易書留ならそんな心配がないから、それは良い考えだと、ドクター・ヘンリーに感謝した。

「ユノ君、そういえば、この間の夢の話だけど、チオルノブイラがあるトマテスタンという国出身の放射能研究者がミルタンというんだが、君の見た夢の小さい子供もミルタンという名前だつたんだね？」

ドクター・ヘンリーの質問に、仰天するユノ。

「先生、さつき事務所を出るとき、取引先の人が、スタンと付く国について質問してきました。アフガニスタンとかカザフスタンとか。それで『スタン』というのは、山の人々という意味ですつて、説明したところだつたんです！」

「うゝむ。君の体験はパズルのようだな……かなり難解だが、遠くない将来、全容が見えてくるのではないかという気がしてきたよ」

ドクター・ヘンリーは、妻が用意した手みやげをユノに渡すと、玄関まで見送つてく

れた。

その日は、家に戻ってゆったり体を休めたが、翌日は祝日だったため、リハビリも兼ねて多めに料理を作った。いつもはリラにユノが届けていたが、その日はリラが来てくれるというので、昼食を用意して待っていた。和食しか食べない子だが、ユノの自慢料理のひとつであるチャーハンとオムライスだけは食べてくれるので、それほど手間のかからないオムライスを作った。

「あゝ、姉のオムライスうまいわゝ。」

「でしょー。心がこもっているからね、おいしいんだよ」

ユノがそう答えると、リラはニヤつとしながら、ユノに問いかけた。

「ところで、ねーさん、告る準備はできたのかい？」

唐突な質問に動揺するユノ

「は？いきなり何をおっしゃっているのですか？妹君。姉はリハビリを終えたばかりで、体調回復が今一番の目標ですよ。」

核心を突かれ、かなり動揺しながらユノは答えた。

「あのさあ、今って、メールとかでしょ？手紙とかっていいなーって思ってた。この間部活の後輩から、直筆の手紙もらったんだよね。部活終えて、高校進学するついで、先輩、お世話になりましたっていう。それってさあ、すごい、じんときたからさあ。手



紙っていいなって思ったんだ」

意味深に話すリラの話しを聞きながら、ドクター・ヘンリーの診療室で話したことを思い出し、ユノは耳が真っ赤になっていた。

## 秘めた思い

事故後は自然治癒力が高まっているためか、いつもより睡眠時間が長くなっていたユノだった。そのため夢をみることも多く、起きてすぐに鮮明に覚えている夢も普段より多くなっていた。

普段はひとりでお酒を飲むことはあまりないユノだったが、たまにおいしいおつまみをいただいたりすると、どぶろくのようなマツコリというお酒を一杯程飲むことがある。その日は、チャンジャという魚の塩辛コチュジャンあえを知り合いの大学の先生からいただいたので、ヤムニョムチキンを作って、マツコリを飲むことにした。事故後、はじめての晩酌だった。

久しぶりにアルコールが入ったためか、かなり深く寝入った感じがしたが、朝方不思議な夢を見た。目をあけると、亡くなった婚約者がいて、笑顔で話しかけてきた。

「レースのエントリーみてみな。赤い車の人が出てるよ」

「え!?なんで?なんで知ってるの?」

ユノが話しかけると、はっと、目が覚めた。さっきのは夢だったのか・・・と思われるほど、リアルだった。

まさか・・・と、思いながらも、昔仕事で携わったレースのエントリーを見てみると、なんと・・・山中の名前があった。ただ、同姓同名ということもあるだろうし、確認しないと本人かどうかわからない。車は同じ系統だけど・・・これ、本人かな？用事はないけど、プロジェクト室に行つてきいてみようかな。うるさいおやじがいらないといいけど・・・と、思案するユノだった。

その日の昼休み、盲導犬プロジェクト室を覗いてみた。ラッキーなことに、蓑上ランポーは外出中だった。

「あの・・・お忙しいところすいません。ちよつとお伺いしたいことがあつて・・・」  
と言うと

「あ、お昼にしようかと思つたので、よかつたら下の食堂で一緒に食べます?」

思わぬ山中の提案に安堵するユノだった。

社内食堂でランチをしながら、ユノがエントリーについて尋ねると、山中は飲むもうと  
した水にむせて、せき込んだ。

「ど、どうしてわかつたの?」

と目を見開きながら山中は尋ねた。

「昔、仕事で関わったことがあつて、何気なくエントリーみたら山中さんの名前があつたし、車もそつち系だったので、そうかな?」  
つて思つて

と、答えると

「いやあ、びっくりした！まさかユノさんからその話されるとは思ってなかったよ。車とか好きなの？」

山中の質問に答えるユノ

「はい、モータースポーツは好きです。運転するのが好きなんですけど、お金なくて車買えなかったので、車を運転する仕事したいと思って、モータースポーツ関係の会社に入ったことがあったんです。」

山中は興味を示し、車の話をはじめた。

「車関係のブログとかもやってただけど、今は忙しくて更新してないんだ。こんな身近に車好きな人がいたなんて、驚いた！」

やっぱり夢の内容は本当だったんだ・・・と、驚きながらも話が弾んだことを喜んだユノだった。

「運転が好きなだけで、車のことは詳しくないから勉強中なんです。山中さんは車アレンジしてるし、お好きなんだな、つてのは思ってたんですけど」

いつもより突っ込んだ内容を提供してきたユノに、山中も心を開いて話はじめた。

「アクティブな趣味だから、性格もオープンなように見えるかもしれないけど、子供の頃はすごく人見知りで、知らない大人のひとかいると隠れちゃったりしたんだよ。」

確かに今は誰とでもくっつくたくなく話す様子から、人見知りには見えないかもしれないが、ユノ自身も子供の頃、かなりの人見知りだったため、なんとなく山中の繊細さを感じ取り、子供の頃は内向的だったのではないかと、漠然と予想はしていた。

ランチを終え、午後の業務にとりかかったが、楽しかった昼の時間を思い起こし、いつもより仕事がかどったユノは、帰宅時間になるとすぐに、家に戻り、リラにチャット報告をしたのであった。

「夢にさんちゃんが出てきて、山中さんレースに出てたよって言うから、きいてみたら、ほんとうに出てたらしくて、びっくりした」

ユノのチャットに、テンション高く答えるリラ

「ほうーよかったじゃん。てか、さんちゃんが応援してくれてるってか、さんちゃんが連れてきたのかな!? そういえば、さんちゃんの好きそうなタイプだね? ケントおじつて。姉、がんばれ!」

完璧にユノが山中を気にしているというのがバレているとわかり、核心に触れる内容を話し始めるユノ。どうしても今ひとつ積極的になれない理由を妹に打ち明ける。

「でもさ……こつちが一方的に気にしているつつたつて、あつちの気持ちかわからないのに、勝手に押すつても迷惑でしょ……しかも、社内で妙な噂がたつたら、あつちに迷惑だし……あたしはいいんだけどね。気にしないから。玉碎覚悟で告るのとか、

ぜんぜん平気だけど、相手に迷惑はかけたくないんだよ。ましてや『お断わり』って返事だったら、あつちが気にして気まずくなるかなって思っ……」

ユノが自分の気持ちを正直に打ち明けてくれたので、溜飲がおりスツキリした気持ちになるリラ

「そんなん、ばれないよーに、いくらでもつきあえるって。」

全くマセたことを言う、今どきの女子だなあ、と思いつながらユノが続ける

「いやいやいや、だから、つきあうとか、あつちの気持ちがわからないので、にとともかんともできない状況でござる。はい」

すると、リラがこんな提案をしてきた

「がちやがちやおじさんに取り持つってもらったら？」

びつくり仰天な提案にせき込みながら、キーボードをたたくユノ

「そんな賭けつてか、親身になってくれるか、おもしろがつて広報されちゃうかのどちらかです……」

というと、リラが答える

「あのおじさんさ、ふざけてるけど、優しいじゃん？ 姉の真剣な気持ちがわかったら、最強の応援隊長になってくれソな気がする」

確かに……子供のくせに鋭いな、言いえて妙だ、と思うユノだった。

## カウンセセリング

「どこから話してよいのかわからないんですけど……いろいろ混乱してしまつて……」

ユノは額の汗をフェイスタオルで押さえながら、出された緑茶を飲み干した。

「まあ、慌てなくていいよ。ゆっくり、ひとつづつ、思い出したところから話して構わないから。時系列じゃなくてもいいんだよ」

ドクター・ヘンリーはユノの動揺を察して、焦らないよう促した。

「さんちゃんが……亡くなった婚約者が夢に出てきて、山中さんがレースにエントリーされてたことを告げたんです。半信半疑だったんですが、確認してみると山中さんの名前が出場者一覧にあつて……」

そのことを本人に話したら、出場したのは事実らしく、つまり、夢でさんちゃんが言つてた事が本当だったんです……私は勿論驚きましたが、山中さんもびっくりして、どうしてわかつたのか？つて。だから、関連の仕事をしていたので、たまたま見つけたつて言つたんですけど……」

山中への高ぶる気持ちを抑えながら、ユノは説明した。

「なるほどねー。まるで亡くなった彼が連れてきたみたいなお話だなー」

ドクター・ヘンリーは一旦天井をみながら、カウンセリングノートをめくった。

「リラも同じ事を言っていました。さんちゃんが連れてきたって。山中さんの甥っ子が飼っている犬も昔うちで飼っていた犬とよく似ているし、ケント君が赤ちゃんだった時の写真が、生後すぐに亡くなった私の兄ともそっくりだったし、偶然にしては重なりすぎる・・・それとも私の思いこみなんではないか？山中さんが気になるあまり、なんでもそうやってつなげたいんじゃないか？」

ユノは少々早口になりながら、ドクター・ヘンリーの意見を求めた。

「確かに人を好きになると盲目になるってことは良くあるけど、今回の一連の事象は、君だけの見解じゃないからね・・・犬に関しては、リラちゃんが主張してきたことだし、四つ葉のクローバーだって、ケント君と君が大事にもっていた。しかも、四つ葉を拾った夢をみたり・・・」

関連がないとは言い切れない。というより、大いにアリだと思うよ。山中君とは出会う運命だったんじゃないかな。君が好意を寄せるといふことも、もしかしたらそうなるように決まっていたのかも」

いつになく、ドクター・ヘンリーは穏やかに解説をするのであった。

「先生？これらの不思議な出来事も気になりますけど、私の思いを山中さんに告げるってことに抵抗があるんです。リラは告れ告れってあおるんですけど、同じ職場だ



し、相手に迷惑じゃないかと思つて……。

本当は玉碎覚悟で、いつそのこと告つてしまいたいんですけど。あ、先生、ごめんなさい。恋愛相談になつちやつてますね……もう苦しくて、どうにかなつちやいそうです」

ユノの必死さが伝わつてきて、ドクター・ヘンリーは優しく微笑むと

「自分のことより相手のことを思うつてことが、『真実の愛』なんだよ。四つ葉のクローバーの意味はまさにそれだから、君の彼への気持ちは、真実なんだよ。」

ドクター・ヘンリーの言葉に、目を潤ませるユノだった。

## 揺れる想い

タブレット端末で読む小説に最近ハマっているユノ。子供の頃は冊子ものを読んでいたが、タブレットなら書店に行かずとも、ダウンロードするだけで最新版が手に入る。お気に入りのコミック小説の最新版アップロードまで、まだ日がある。待ちどおしなあと、ユノはタブレット画面を見ながら、アップ日をカウントダウンしていた。

実は心に思う人の事の他に、悩みを抱えているユノだった。婚約者の没後は、あまり人と関わらない仕事を望み、今の職場を紹介され、人間関係や業務にはなに申し分ない環境で、心から感謝する日々を送っていたが、こどもが大好きだったため、通信大学では教育学を専攻し、幼稚園教諭免許を取っていた。

友達の家などに遊びにいくと、友達よりも子供と遊んでしまつて、1日が終わつてしまうこともあった。子守を買つて出るというよりも、率先してこどもと遊びたいというのが本音だった。

そんなユノに、児童館業務の話がきていた。郊外にある小学校併設の児童館に欠員が出るため、そこでの勤務を打診されていた。今の職場にはなんの不満もないし、仕事の責任もある。しかし、以前はABC教室での講師の経験もあり、こどもに関連した仕事

を望んでいたこともあって、心が揺れていた。

ただ、転職すれば、山中と会えなくなってしまう。騒がしい盲導犬アシスタントに伝言を頼むこともできないではないが、さすがに迷惑をかけてしまうようで気が引ける。万が一転職することになったら、結果はどうあれ、告白をしてみようかとも考えるようになった。

そんなとき、事務所のドアをコンコンとノックする音が聞こえた。

「ここにやにやちわ〜。ユノノッ。」

まだ夏には月日があるのというのに、真っ黒に日焼けした顔がドアの後ろからぬうつと現れた。

「あら、みのさん。なんか久しぶりな感じがするー。どうしたんですか?」

とりあえず急ぎの仕事は終えていたので、いつ笑ってもいいぞーという覚悟の元、顔を見ただけで笑いがこみ上げてしまう蓑上を受け入れた。

「今日さ〜 よけいにおにぎりつくってきちゃったから、こっちでごはん食べない〜?」  
いつも弁当を持参していたユノだったが、寝過ごししてしまったため、今日は食堂でランチをしようと思っていたところだった。

「みのさん、すごいですねー。今日私、お弁当もってきてないんですよ。」

ユノが笑顔で応じると

「でしよ。そうだと思っただよね！」

蓑上は自然無農薬派で、自分で米や野菜をつくっているため、彼の持参する食材はなかなかのもので、味も質も上等だ。

「こっちの部屋で待つてるからね。飲み物もっていらっしやうい」

今年も雨も多く、豊作だったのか、やけに上機嫌の蓑上だった。

「失礼します」

と、ゆつくりドアをあけると、山中と蓑上が椅子に腰かけ、テーブルの真ん中には相撲部屋の食事かと思われる量の爆弾おにぎりと漬物が並んでいた。

「ねえ？これじゃいくらなんでも、食べきれないでしょ？」

山中が笑顔で話しかける。

「いや、私に加わっても余るんじゃないですかね」

すると蓑上は

「だめ!!二人とも、これ全部食べなくちゃ!大きくならないわよ!」

ユノを見ながら蓑上がこり押しする

「えー、私は身長たしかに足りないけど、山中さんそれ以上大きくなったら、ドアくぐれなくなっちゃうじゃないですか」

すると蓑上は

「山中ちゃんは痩せすぎてるから食べなくちゃだめつ。あんたは、身長足りないからが  
んがたべなさいっ！」

自己主張が強い割には、言っていることがいつもめちやくちやで論理が破綻している元  
アマチュアチャンピオンである。

ユノが事務所から持ってきたインスタント味噌汁と、煎茶を給湯室に入れて、全員の  
分を用意し、プロジエクト部屋に持ってきた。みんなで爆弾おにぎりをほおぼっている  
と、襲上がニヤけながら、山中に話しかけた。

「ねー、山中ちゃん、好きな子とかいるのおく？」

すると、山中とユノが同時にむせてせき込んだ。

「あら、なんでユノノまで動揺しちやってるの？」

想定外なつつこみに、耳まで赤くなるユノ。

「あんたたちさあ、お似合いだなあ〜って思っつて！」

さすが現役時代は、右フックからの左ストレートで相手を瞬時にノックアウトすると  
いう得意技を持っていただけに、不意打ちの瞬発力だけは上等だ。

「みのさん！山中さんに失礼じゃないですか！迷惑ですよ・・・ね？」

すると山中は口の中に米粒のかたまりが詰まっているため、発話できないというジェ  
スチャーで、お茶を手にして返答をはぐらかしている。

(まあ、このタイミングで振られたら、答えに困るだろうけど、やはりね……脈はないってことかな)

何事ものおじせず、積極的に取り組むユノであったが、こと恋愛に関しては奥手であった。

「あはははっ！本人目の前にしちやあ、答えにくいわよね〜ヤマナカチャン！ユノノ。あとで聞いてあげるから、今日はおにぎり持って帰って、あつちで食べなさいっ」

とまたしても、得手勝手な提案をむちや振りしてくる蓑上であった。

「それはおいといて、みのさんと食事したら、消化不良おこすから、遠慮なくどすこいおにぎりだけいただいて、退散します。リラの分もいただいていいですか？あの子、米だいすきなんで」

すると蓑上は喜んで

「いいよ〜全部もってってー。漬物も持ってっていいよ」

恥ずかしさと気まずさで、一刻も早くこの場を立ち去りたくて、そそくさと事務所から持ってきたコンビニ袋に、巨大なにぎりめしと漬物のタツパーを入れて自分の部屋に戻った。

それにしても、蓑上はさすが元アマチュアチャンピオンということもあってか、人間観察は鋭い。とつくの昔にユノの気持ちを見抜いていたのだった。

## 果てしない夢

お気に入りのタブレット小説最新版があがってくるまで待ち遠しいので、ユノは久しぶりに図書館に足を運んでゆっくり冊子の本を読みながら静かな空間に身を沈めていた。恋愛ものは滅多に読まないユノであったが、今日は無意識に恋がテーマの本に手が伸びた。読み終えて一息つこうと、ドリンクコーナーに移動した。

様々な書籍のタイトルを眺めながら、いつそ、思いを告げてしまいたい。万が一仕事を辞めるようなことになったら、会えなくなる前に自分の気持ちを伝えたい。しかし、いつどこでどうやって告げたらよいのだろう。仕事場ではそんなこと言えるわけもない。あつちから連絡がきたら嬉しいけど、それはありえないだろうし・・・ホットココアを飲みながらユノはため息をついた。

相手の良いところも、残念なところも含めて、見てくれとか職業とか付帯しているものではなくて、本人の存在自体を想っている、つまり魂が引き寄せけられてしまう不思議。これって、本当の縁なんじゃないだろうか。会うべくして会った人なんじゃないのかな。

ココアが注がれた紙コップから立ち上がる湯気を眺めながら、ユノはぼんやりそんな

事を考えていた。

ただ、相手が私を求めていないのなら、あきらめるしかない。自分の気持ちだけを押しつけることはできない。私にはアナタが必要、デスカラ！って、言いたくてたまらないんだけどね。本音は。でも、『僕は要りません』なんて、言われちゃったら、あぼーん、撃沈。一旦富士山頂まで行って頭を冷やして、生まれ直したいってぐらいシヨック受けちゃうんだろうなあ。

まあ、言わずにあきらめるってのは、あかんたれだから、ぜつたい言おうとは思っている。私は勝ち負け関係ないので、敗北宣言せんぜんアリですから。でも、勝ち負けといえ、外国人はすごいわ。たとえ負けても、次はぜつたい勝つ！っていう強い信念のもとに突き進むからね。・ ・ ・

あのエナジーパワーは、たのもしいけど、自分のパートナーってのは、遠慮致す！だな。・ ・ ・そもそも外国人（とくに西洋人）は年かんけーないからな。・ ・ ・日本人は10才以上若くみえたりするし（というより、あっちが老けちよる）、がんがん来るよね。・ ・ ・みんなはユノって外国人が合うと思った、なんていうけど、アタシはノーセンキューでござる。アジアは大丈夫だけど。というか、友達だと楽しくていいけど、自分のパートナーとなると別だね。年などは特に気にしないけど。・ ・ ・そういえば、イスラム教の創始者ムハマンドって15才年上の未亡人と結婚したんだよね？ 国際大会でアラビア人



と一緒だったけど、おもしろかったナ……

仮に、仕事の活躍活動の場を外国に移せば、職種選択の幅もひろがるけど（外国は職業で年齢問うたらぶつとばされるしね？）でもさ、外国行ったら、リラと離れちゃうじゃん！それはいやだ……

夢は、外国の子供達と日本の子供達を交流させるような組織をつくって、そこで仕事があったいな……。日本の子供達が異文化に触れる機会を増やしたいし、またその逆も。リラが獣医師になって、そのバックアップで、子供達に無料で動物にも触れさせてあげるチャンスを増やしたり。そんなところで仕事ができたら、最高だな……

まあ、今一番に叶って欲しい夢は、私の周りの人達が幸せになること。ケント君、山中さん、やかましい元ボクサー、ミーナ、ユウト、そしてリラ……周り以外が幸せにならなくていいってことじゃないけど。

そして、思っている人に思いが伝わること。めでたく伝わったとして、その後の判断決断は、おまかせいたします。アタシは判決を待つのみです……『敗訴』か『勝訴』か。相手との勝ち負けじゃなくて、人生の賭けにおける勝負ってとこかな……

— 図書館の窓の外に広がる森林の緑をながめながら、ユノは自分のこれからについて考えていた。

## キジムナーの伝言

最近、疲れているのか眠りが浅く、今朝方ユノは、洪水が襲ってくる夢をみた。船に乗っているのだが、もうだめか・・・と思っていると、陸の上に乗り上げて、助かった！と、思ったところで目が覚めた。

夢占いによれば、洪水の夢は『おさえきれない恋心』という意味があるらしい。あるいは、『新しいスタート』を意味する場合もあるのだそうだ。前者は理解できるとして、後者はどういう意味なんだろう・・・

モーニングティーを飲みながら、休日の朝をまったり過ごしていた。すると、メールの受信音が聞こえた。パソコンデスクに移動して、メールをチェックすると、スウエーデンの友達が難病らしい。またもう一人の友人も、近日手術をするということだ。自分はその事故の後遺症もなく、全快したというのに、今度は友達が大変な日々を過ごさねばならないのかと思うと、単純に自分の回復を喜べないユノだった。

事故後の症状固定が認定され、傷害保険金がおりましたため、ユノは快気祝いを配りに廻った。盲導犬プロジェクトチームからお見舞いをいただいていたので、昼休みに届けようと部屋を移動した。すると、廊下で山中とすれ違った。挨拶をすると、そっけな

く通り過ぎてしまった。快気祝の礼を渡すつもりだという事も告げられず、意気消沈するユノ。

(やっぱり脈なしってことかな・・・)

沈んだ気持ちで、プロジエクト部屋をノックすると、無駄に元氣満々な浅黒い顔の男が、満面の笑みで迎えた。

「あら、ユノノ、どうしたの?」

「え、あー。快気祝いです。事故の傷害保険金がおりましたので、みなさんにお見舞のお礼を・・・」

沈んだ声でユノが応じると

「今さ、うちのプリンスとすれ違ったでしょ?」

なんでわかるんだ? 相変わらず、鋭いな・・・と、想いながらユノが答える。

「へえい・・・すれ違いましたけれども」

裏上はすべてお見通しに見えて、ユノをからかった

「はあく。そっけなくされて、落ち込んでるってわけえ?」

凶星と見抜かれたくないユノは

「え? せつかく入ったお金を、みの方に使わなくちゃいけないくて、落ち込んでるんだ  
す」

精一杯抵抗してみるユノ。

「う。ぷ。ぷ。じゃあ、そういうことにしといてあげる〜」

なんだか意味深に不敵な笑みを浮かべながら、蓑上はユノが差し出した品を受け取る。

そんなやりとりをしていたら、山中が室内に入ってきた。中にユノがいたのがわかっているのに、なぜか無視して、自分の席に座る山中。それをみてニヤニヤする蓑上。なんとなく、気まずいと思ったユノは立ち去ろうとする。

「それじゃ、どうもお世話サマでした」

すると山中は、ユノを見ずに書類を見ながら

「あ、悪い。今忙しいんで」

そっけないを通り越して、アラスカの空気みたいに冷たいもの言い、ユノを追い返す山中。

（なっ、感じわるっ!!!きらいならクライって言うてくれればいいのに・・・興味なっしんぐ!って。そんでふっーにしてくれたりいいじゃん。つきまとったりしないから!）

泣きたい気持ちで一杯だったが、仕事だから気持ち切り替えなくちゃ、と、自販機で冷たいジャスミン茶を買って、頭を冷やそうとしたユノだった。

とりあえず冷静さを取り戻し、仕事に集中した。気持ちがそれないように、休憩時間

は、本日の晩ご飯レシピを考え、買い物材料リストをあげていた。夕方、帰宅時間になり、スーパーで買い物をするユノ。

(勘弁してほしいわ・・・朝、起きてから寝るまで頭の中はあなたでいっぱいなのに！勝手に人の心に住み着いちゃって！どうしてくれるんだ!!!)

ぶつぶつつぶやきながら、買い物カートに商品を入れていると

(大丈夫だよ！彼は気付いているよ！)

誰かがささやく声が聞こえた。振り向くと、周りには誰もいない。

(なんだ？疲れちゃって幻聴が聞こえるのかな・・・)

すると

(それが彼だよ！)

再び同じ声がささやいた。

(え？だれ???だれなの???それが彼ってどういう意味???!!)

ユノはあたりをキョロキョロ見回しながら、心の中で叫んでいた。

ユノの頭に響いてきた声は、なんとなく聞き覚えがあった。そうだ。森の中で道案内をしてくれた、キジムナーと思われるこどもの声だった。

家に戻って夕食をつくり始めた。今日は大好物のヤムニョムチキンと豆もやしのナムル。国際大会で一緒だった留学生に教わったレシピだ。そうだ、SNSで近況をみて

みよう。パソコンから交流SNSサイトにアクセスすると、サッカーの国際大会ボランテアアで一緒だった友達近況一覧が表示された。

（あ、スンチャンもミンヒョクもみんな幸せそうだな。早いな。みんなパパママになってる！あの頃はまだ学生だったのに。ジミンとマイケルの子もこんなに大きくなっただんだ！あの大邱での結婚式ってそんなに前だっけ？）

〈回想〉

―大邱のある会場―

オヌル キョロンシツク チュツカドリムニダ

イゴスン サンシンヌン

イルボン アツキロ

チエガ マンドルオツスムニダ

自分で作った沖縄の楽器、三線を見せながら、弾き語りのお祝いを贈ろうとするユノ。演奏の前に、毎日何十回と練習した挨拶文をマイク越しに放った途端、会場の人達が立ち上がって喜んでくれた。自分たちの言葉で挨拶してくれたことが嬉しかったようだった。

参加者の余興が終わると、新郎が新婦のお母さんをおぶって会場を一周する。会場はまたまた盛り上がり、拍手の嵐。ユノも新郎に近づき、ファイティン！と、声をかける。

新郎新婦は国際結婚であったため、新郎はこの慣習には馴染みがなかったようだが、満面の笑みで新婦の母をおぶりながら汗だくになり、スタート地点に戻った。ユノは感激して、手が真つ赤になるまで拍手をしていた。

結婚式後は、新郎新婦の友人と親戚で、街を案内してもらい観光をした。町並みが沖縄ととてもよく似ていたことが印象的だった。また、家族をなにより大切にし、初対面でも会話を交わせればフレンドリーに接してくれた人々の心の温かさも、沖縄とよく似ていると感じた。

### イチャリバチヨーデー

沖縄には、『一度あつたら兄弟』という意味の言葉がある。人々の出会いをととても大事にしている言葉だなど想いながら、海外での素敵な結婚式もとても感動的だったと、ユノは思い出に浸っていた。

(よい結婚式だったなあ。いいなあ。ああゆう結婚式つてあこがれるなあ。私つて、いかり肩だから着物が似合わないんだよね・・・琉球紅型(びんがた)がいいなあ。着てみたいな。

あゝ今日も筋肉痛だあ。イテテ・・・さて岩盤浴にでもいくか・・・)  
おみやげでいただいた、いろいろなをほおぼりながら、ユノはリフレッシュタイムの用意をした。

## 診察室

今日はドクター・ヘンリーの定期検診日だ。いつもの不思議な夢とは別に、頭痛とめまいがしたため、保険を使つての診療をお願いした。すると、横断面図のCT撮影の後、ドクターヘンリーから診療室に呼ばれた。

「んー。なんかあるんだよね」

CT画像をみながら、ドクター・ヘンリーがつぶやいた。

「え？なんかつて、なんでしよう??？」

まさか重大な問題じゃないよね・・・と、思いながらもはつきりと知りたいユノだった。

「んー。もう一回、縦の断面図とろうか？気になるからね」

ドクターヘンリーの提案にユノは即、了承した。

CTの撮影は15分程かかる。大きな筒状のカプセルに入れられ、狭い空間の中で、道路工事のような雑音を聞かされる拷問に耐えなければいけない。ユノは、雑音は平気だったが、何もできないたいくつきさが少々苦痛だった。

退屈さの苦痛と不安を払拭するため、楽しくなることを考えようとした。そう、あの



おもしろ男、元ボクサー蓑上傑作集のページを頭の中で開いていた。

〈プチ番外編2〉

・ある時、書類がないといつて大騒ぎをしていた蓑上。ユノに罪をきせようとして、「あんた、なくしたでしょ!どこやったの!」と、ユノを責めながら、なくなつた書類を探させていた。ユノも一生懸命自分の所を探していると

「あ、ごめん、あつた」と、自分の書棚に自分ではさんでいたことを思い出したようだった。どうやら記憶装置にもかなりの不具合があるらしい。

・またある時、仕事先に書類を提出しようとしていたので、念のためユノが事前にチェックした。すると、全く違う会社向けの書類が混ざつていた。ユノが報告すると「ひえく!!!僕だつたら、そのまま渡してたく」

と、感謝されたが、感謝する前に、今一度チェックしたらどう?と、思つて止まない。

・書類が雑然と置かれていたので、整えてあげたら

「その優しさが・・その優しさが・・その優しさがつ!!!」

と、3回同じ言葉を繰り返していた。いったい何を言いたかつたのだろうか?

カプセルの中では、ヘッドホンを装着していたので、自分の笑い声もあまり聞こえず、また、自分の声も外に聞こえないので、「あの人、やっぱり変だわ」と、一人で大笑いし

てしまったユノだった。

長い退屈な時間をやりすごして、CTの撮影が終わると、診療室に呼ばれた。ドクター・ヘンリーは、縦と横の断面図を表示してユノにみせた。

「これ、見える？小さい白い丸つこのの。」

ゆのは画面に近づいて画像に見入った。

「あー見えます。はい、わかります」

すると、ドクター・ヘンリーは説明をはじめた。

「これね、ラトケ嚢胞といって、水疱瘡のみずぶくれみたいなものだね。そのまま放っておいても大丈夫だけど、突然ぶちゅって、破裂することもあるの。腫瘍とかじゃないから、心配ないんだけど、つぶれたりすると、ものすごい頭痛がね、起こるんだ。激痛が走るんだよね。」

で、そのままの場合もあれば、大きくなる場合もある。そうなったときには鼻の穴から、チューブをいれて、吸い取るっていう方法がある。それでも何度も大きくなるような場合は開頭手術をすることになるけどね。深刻な病気ではないんだよ」

ドクター・ヘンリーの説明に一旦は安心するものの、開頭手術ときいては穏やかじゃない。

「あの・・・とどのつまり、最悪は開頭手術ってことですよね？」

不安を隠せないユノ。

「いや、それは稀だね。大きくならない場合もあるし。これってね通常、胎児のときに消えちゃうんだよね。生まれたときに残っても、成長とともに消えちゃうんだ。通常は。それなのになぜか君には残っている。もしかして、不思議な体験や電波受信も、これと関係ないこともないかもしれない。まあ、前例がないから、調べてみないとわからないけどね。

大きくなつてないか、3ヶ月に1度、CTで写真取って確認しておけば大丈夫だから」とりあえず深刻な状態ではないということで、安心したユノだった。頭痛やめまいは疲れからくるもので、休養すれば治るだろうとのことだった。ただし、車の運転は要注意。もし激しい頭痛に襲われたら、すぐに車を止めて、タクシーかなにかで病院に行かなければいけない。

それにしても、体調不良になる程、思い詰めていたわけでもないだろうに。体力的に今の仕事があきついし、もうもたないという体の悲鳴なのかもしれない。配送管理は重量や大きさのある物を移動したり、体力を使う仕事だ。もともと1日中座っているような事務職はあまり好きではなく、アクティブな仕事が好きなため、今の仕事にも満足し、やりがいのある仕事であると思っていた。しかし、あちこちの筋肉が悲鳴をあげているように、アスリート系で一般女性の平均よりは筋肉が強いとはいえ、153cm46Kg

の体格には少々負担が大きいのもかもしれない。

おそらくユノにとつて長くできる仕事ではないようだ。そろそろ潮時かもしれない。職場が変わってしまったら、山中とは会えなくなってしまう。そうなる前に、自分の気持ちと言っておかなければ・・・そう思った瞬間に、また頭痛がした。ああ、やっぱり考えすぎたのかもしれない、と、今日はゆっくりバスタブにつかろうと思った。いろいろな種類の入浴剤のなかから、今回は「森林の香り」を選んだ。

## 告白は手紙にて

どこからなにを話してよいのか迷ってしまいますが、私の今の気持ちを書きたいと思  
います。

ご存じの通り、伴侶なる人に先立たれて、その後、失意のまま日々を過ごしてきました  
が、知人に今の職場を紹介していただき、そしてここで仕事が出来たことを心から誇  
りに思っています。いままでいろんなことがありましたが、皆様の暖かい思いやりと、  
ご指導、ご鞭撻を賜り、心から感謝しています。また不注意から事故つてしまい、皆様  
にご迷惑をかけてしまいました。本当にごめんなさい。

至らないことも多々ありましたが、受け入れてくださった皆様にはなんとお礼を申し  
てよいかわかりません。ここでお仕事させていただいたことで、自分自身も成長するこ  
とができたように思います。そして、心のリハビリになりました。

それからというものの、家族の成長を助け見守り、また支えられて平穏な日常が戻つて  
きたように思います。そんなとき、ふと心に浮かぶのがあなたの笑顔でした。気が付く  
と朝から晩まであなたのことを考えている毎日でした。

いろいろ楽しく会話したこと、犬のお話をきいたこと、そして笑顔。あなたの笑顔を

みると、なぜか癒されて心が落ちつく自分があることに、ある日気が付きました。

自分の思いを告げたいと思いましたが、職場で言うことではないし、個人的にお目にかかる機会もないことから、どこでどうお話したらよいか迷っていました。

仕事にも慣れて、なんとか順調に業務をできましたが、体調及び体力の限界という理由で今の仕事は長くできないようです。残念ですが、本意ながら、転職するかもしれない状況におかれています。このままこの仕事を続けていくには困難を極めると、家族や親戚、友人達からも強く反対されてしまいました。そのため転職は早いほうが良いと。

職場が変わってしまったら、もう会えなくなってしまうので、その前に私の気持ちをお伝えたいと思い、ペンを取りました。ずっと前から好きでした。どんなことがあってもなにがあっても、何を言われたとしても、好きです。大好きなんです。他の誰かではない、あなた、なんです。たとえ全世界が敵に回っても、私はあなたの味方です。嫌なことや辛いことがあつたら、吐きだしてぶつけてもらいたい。全力で受け止めるから。何があつてもついていきたい。自分というものをしっかり持っている頼りがいのある人だから。一緒にいるだけで、ほんとうに心から楽しいと思える人なんです。どんなことがあつても、ずっとあなたのそばにいたい。迷ったときは相談に乗ってほしい。あなたが助けてほしいときは、できる限り支えていたい。それが私の願いです。

あなたが発した言葉達は心にきざまれていて、1冊の本ができあがるぐらい。表現が独特でセンスがいい。一方繊細で。考え方も感性も、私の心に響きまくりです。そして心から尊敬しています。物知りなところ、業務に対するまじめな姿勢もそして人としても。教えていただいたことが、とても役に立っています。

いまからあなたへの褒め言葉をならべなさいと言われたら、学校の校庭の広さでは足りないぐらいの文章を連ねる自信があります。じゃあ、欠点は？と、言われたら、おそらく欠点かもしれないところも好きだから、欠点じゃなくなっちゃうんです、と答えるでしょう。いつも近くでその笑顔をみていられたらなくと、願って止みませんが、これは私の勝手な考えで、そちらに迷惑かもしれません……。でも、伝えないと一生後悔しそうですから、書くことに決めました。

答がノーなら、何もリアクションを起こさなくていいです。同じ会社にいれば、こちらも気まずいでしょうから。お気を遣わせるのは忍びないです。でも、私をウエルカム！ってことなら、なんらかのお言葉をいただけることを大いに期待いたします。

あなたが何も言わなければ、何もなかったことになりましょう。この手紙も読んでないことになりすし、告白されたことも、きかなかったことになりすし。この手紙も読んでないことになりすし、告白されたことも、きかなかったことになりすし。どんな結果でも私は大丈夫ですから、気にしないでね。あなたが幸せになりますことを、心から

祈っています。今までどうもありがとうございます。あなたとあなたの家族がこれからもずっと幸せでありますように。



## ミツシヨン・インポツシブル

最近では日本の南の地方が大雪に見舞われている。北国なら大雪でも毎年のことだから、除雪車の稼働も十分だし、一般の人々も融雪剤で対処したり、雪かき棒なども各家庭に1つはあるだろう。

この大雪で交通機関も麻痺し、緊急時以外は外出もしないよう勧告が出されている。ユノも窓の雪をみながら、手紙を出そうかどうか迷っていた。直接、山中の家まで行ってポストに入れることも考えたが、この雪では外出はしないほうがよさそうだ。

(それにしても、今朝、変な夢をみた。さんちゃんが出てきて、「これから映画を見にいから。職場の人と一緒に。」というので、「なんの映画」と、たずねたら、「Mission impossible」って、答えたんだよね。どういう意味だろ? って、思ったけど)

そういうことか・・・今日はムリだよ、っていう意味だったんだ)

ほんとうに、ミツシヨン・インポツシブルになってしまった。今日、渡そうと思っていたのに、物理的に行けなくなってしまうた。

一昨日は、頼まれた仕事で、県北の海沿いまで出向いたが、まだ雪は降っていないかつ

た。夜半過ぎに急に冷え込んできたから、雪模様は予想したが、想定外に大雪になってしまった。

依頼先に到着すると、久しぶりにお目にかかる取引先のご婦人と雑談を交わした。

「以前、あなたと一緒に行ったお寿司屋さん覚えてますか？あそこのご主人が」

（ああ、亡くなったんだよね）と、ユノが思うやいなや

「亡くなられたの。突然。先月だったかしら」

（え？先月？・・・この話、既に知っていた気がする・・・でも、前回ここに来たのは半年以上も前だから、知っている筈はないのに・・・）

「驚いてしまつてね。まだ、お若いのに・・・急に倒れられたそうよ」

と、ご婦人がつぶやいた。ユノが知っているのは不自然なので、知らないフリをして「そうだったんですか・・・」

と、返した。お子さんはいらつしやらなくて、ご夫婦だけだったようで、奥さんもさぞ悲しい思いをされたんだろうなと、ユノは思っていた。

どんなにつらいことがあつても、苦しくても愛する人が隣にいれば、どんなことも耐えられる。

ミッションスクールの宗教の時間に教わったことを思い出していた。辛いこと、大変なことは半分、楽しいこと、嬉しいことは倍になる、励まし合ったり、痛みを分け合う

のが家族、それが本来のあり方なのだ。

〈コリント人への手紙 第13章〉

たとえ天使の言葉を話したとしても

愛がなければ、鳴る銅鑼（ドラ）のよう

多くの知識を持つていたとしても

愛がなければ無に等しい

持つている物を全て施して

すべてを犠牲にしても

愛がなければむなし

愛は心広く、情けあつく

愛はねたまず、高ぶらない

礼にそむかず、利を求めず

憤らず、うらみを抱かず

不正を喜ばず、真実を喜び

すべてを包み、すべてを信じ

すべてを希望し、すべて耐え忍ぶ

愛はいつまでも絶えることがない

\*\*\*\*\*

中学、高校時の朝礼時に歌う典礼聖歌の中で、ユノが一番気に入っていた歌だ。歌詞も曲も美しく、とても印象的だった。

お金は棺桶の中に持っていけないけど、愛は永遠。その愛を捧げられるのは自分にとって特別な人。その思いをしつかりと届けたい。

今日は、ミッション・インポッシブルだったけど。

## 緊急逮捕

雪はだいぶ落ち着いて、路面も見えてきた。ユノは近所の子供がつくった鎌倉や雪だるまをみながら、昔の思い出をなぞっていた。

（今年は冬期オリンピックの年だな。日本はわりと冬期五輪でメダルが取れる傾向にあるよね。だって、冬期五輪に出場できる国は限られているからね。

そういえば、数年前にロシア語通訳の友達から、フィギュアスケート国際大会の招待チケットもらって、見に行ったな。日本のメダリストたちも悠々と演技をして、すばらしかった。なによりびっくりしたのが、カメラ。テレビでみても、どうやって撮影してるのかな？って思ってたけど、なんと現場でみて驚いたのは、天井からカメラが吊るされていて、ロープで左右に高速移動する。だから、選手の動きに合わせて、カメラも一緒に、同速度で動く。なるほど、臨場感あふれる映像が提供されるわけだ。

日本のメダリストも世界の代表選手も、近くでみると細い筋肉がものすごく発達していて、すごいなーって思った。また、記念撮影も気軽に応じてくれて、東ヨーロッパ出身のアメリカ代表のペア、アイスダンスかな？彼らはとても感じよく、可愛かったな。）

ユノが観戦した会場は、満員の観客席の様子がテレビにも映っていた。持っていた携

帯が振動したので、確認してみると、友達が興奮しながらテキストを送ってきた。

『ユノっ、NNNテレビに映ってるよ!』

「えく? こんなに満席なのに、わかるの?」

『白のダウンでしょ?』

「ありや、そのとおり」

『なんでかわかんないけど、あんた目立ってる』

「まじでく? なんで?」

『わかんないけど、目立つんだって。あとでみせるよ。録画してるから』

「ほほーい。あ、わかった。隣空いてるからでしょ? 満席なのに、私の隣だけ空いてる」

『え? 全席埋まってるように見えるけど・・・』

演技が始まったので、とりあえずチャットは終了し、演技観戦に集中した。

後日、テキストを送ってきた友人の家に遊びにいつて、一緒に映像を確認してみると、確かにユノの左隣は空いていた。

「ほらね、私の隣空いてるでしょ?」

友人は驚いた。

「ほんとだ・・・空いてる。でも、テレビでみたときは埋まってたんだよね。びっしり」  
ユノはなんとなく思い当たった。

「もしかして、さんちゃんかも。スケート好きだったし。だから、隣が最後まで空いてたのかも」

友人もユノの意見にだまって頷いていた。

確かに不思議だった。会場は見事に満席で、なぜかユノの隣だけが空いていた。もしかして、チケットを持っていた人が、なんらかの急用で来られなくなったのかもしれない。それにしても、ここだけ空席って……

不思議なことばかり起こると、普通でないこともあたりまえのように感じてきてしまうのが怖い。だから、知らない人と話すときは注意が必要だ。つい、変なことを口走ってしまう。ただ、『天然』ってことで片づけられることが多いため、救われてはいるが。

ユノは五輪のニュース画像をみながら、溜息をついた。

(それにしても、恋って辛いね。顔を見られて楽しい！ってこともあるけど、相手の思いを知りかねて、つらい……いつそあきらめた方が？って思ったり。

心泥棒だ。恋愛警察に通報して逮捕してもらわなくちゃ。罪状は「心及び全魂を奪った罪で逮捕！裁判は45日後です。実刑か執行猶予付いても情状酌量なしと思われる。す。）

心泥棒に魂まで奪われそうな日々を過ごしながら、心は揺れつばなしのユノ。そんなユノの今朝の夢は、飛行機に乗る夢だった。

ジャンボジェットに搭乗している。着陸直前にパイロットが進路を変更して、急に高度をあげた。え!!!びっくりしていると、また高度を一旦下げ、そのまま、きれいなジャングルの横を通過してから、高度を再度上げた。そのまま上空までひとつとび。主翼が見える。きれいな景色を見下ろしながら飛行は続く。隣にはリラがいた。

(夢解釈では大きな飛躍っていいらしく、同乗者がいたらその人も幸運だって。そうだといいな!!)

さて、そろそろヘンリー室訪問の日が近い。不思議体験の解明はまだ先なのだろうか。



## 赤裸々に

「ねえ、姉、久しぶりにランチしよ?」

リラの誘いはいつでも歓迎なユノ。

「いいよー。じゃ、いつもの和食バイキングでねっ」

「らじゃー」

ファミレスは苦手だが、和食バイキングだけは喜んで食事を楽しむリラ。

「ねえ、この後、しゃべくりセブンする?」

リラとユノは人に聞かれたくない話をするときは、コンビニでドリンクとスナックなどを買って、駐車場に車を止めて話をするのが恒例だった。

「姉、ところで告ったの?」

しゃべくりセブンしたがるってことは、そんなことだろうと思ったユノだった。

「いいえ、まだです。」

「じれったいなー。私が代わりに言ってあげるよー」

たじろぐユノ。

「あ、それはちよつとお待ちを・・・私にもいろいろタイミングちゅーもんがございまし

て」

ため息をついてから、リラが話を変える。

「あのさ、気になる人がいてさ・・・同じ中学だった先輩」

ユノは記憶をたどり、思い当たったのでリラに問いかける

「あ！もしかして、同じ部活だった谷川君？」

リラは一瞬驚いて

「そう！なんでわかったの？」

「だって、中学のときも、あの先輩いいなあって言ってたじゃん」

やっぱり姉は鋭いなと脱帽するリラ。

「いきなり告ったら、男子ってひくかな？」

「んー。中・高女子だったし、卒業してすぐ、さんちゃんと知り合って結婚GO

くってなったから、よくわかりません・・・」

そういうえば男性とまともにつきあったことがない姉にきいた自分が間違ったかと思

ったリラ。

「だったよねー。相談する相手が間違ってたか・・・」

「いやいや、話しぐらいは聞いてあげられるよ」

人からよく相談されることが多いユノは、話しを最初から最後までしつかりきく姿勢

はできています。

「あのさー、男子ってみんなエロいの？」

突然の変化球に一瞬戸惑うユノだったが、リラの真剣な表情に、ちやかすことはできないとまじめに答えるユノ。

「そりゃあ男子がエロくなかったら、人類滅びてしまいますダ。人間の本能として男性は発情することになっております。ただ、本能のままに行動したら、犯罪になるので、理性で押さえているだけです。」

オレエロい人々とか、表面に出すかか出さないかの違いで、それをキャラにしている人もいますが、男性として生まれたら、エロくなかったら、子孫が繁栄しないのです。

どこの王様でも子供がいるように、どんなに上品な人々であっても、エロいことは考えます。はい」

真剣に聞き入るリラ。

「じゃあさ、好きな人が、自分をエロくみててとかだつたらどう思う？」

きましたねー直球、とばかりに、グローブを引きながら力を込めてしつかりと受け止めるユノ。

「好きな人が、自分をエロな目でみても、いやじゃないよね。てか、むしろうれしいよね。女性として見てくれてるんだし。」

リラは目を大きく見開いて、こう叫んだ

「だよねだよね！あたしさー、そう思ってたんだ！」

笑いながらユノが答える

「ねえねえ、リラさん、本当は君の恋を応援してあげたい所だけど、大学行つてから恋愛しようよ。今は受験勉強しなくちゃだから、恋愛にのめっちゃうと、獣医さんになれないぞ」

「それがさ……谷川先輩と私、志望校一緒なんだ」

ユノは、一旦驚いたが、笑顔で応じた。

「じゃ、それを励みに頑張ればいいじゃん！谷川君ならー大は間違いないから、リラもそれ目指すつてことで、がんばれ」

「姉、ありがとう！それ聞いて、すっごく勉強したい気分になってきた！てか、姉も告るの、もじもじしすぎちゃったら、あたし行っちゃうから!!今度の模試終わったら、山ちゃんに言いに行く！姉のことどう思つてんですか？気がないなら、きつぱりお断りつて言つてよ。はつきり言わないとわからないから。じゃないと姉かわいすぎる！つて言つちやうぞ」

リラの前向き発言に、快い心地になるユノ。

「だねー、ほんと、踏み出せなかつたら、リラちゃんにお願いするかも。つきあつてる人

いますか？だれか好きな人でもいるんですか？って、きいてもらうかも・・・」

自信なさげに答えるユノにリラはこう返した

「そんなん、いたとしたら、奪っちやえ!!!姉ほど一途に愛するひとはおらん!!!これを逃したら、幸せにならないぞ!!!って、脅かす。私」

ユノは笑いながら

「いやいやいやいや、私そういう強引なのあれですから。奪うとかムリつす。勝ち目ないと思つたら、ひいちやうタイプですから。たぶん・・・経験ないからあくまで想像の域ですが」

雪解け水が美しい午後のひととき、超能力姉妹は赤裸々にほのぼのとした会話を楽しんでいた。

## 開けちやダメ!

(さあ〜って、どこぞに宝はないかいな〜?お、これだな〜。パチンコ大勝ちするより  
ずつと割がいいやつね〜。持ち帰って、ユノノとかプリンスちゃんに、スイーツ買った  
げよ〜と)

「みのおさん!!!だめです!!それ、開けちやだめ!!!」

「え?ユノノ。なんで?」

「みのおさん、それは、心のきれいなひとしか開けちや、だめなんですよ!!!」

「へ?僕、心汚くなんかいいわよ?」

「だめです。顔が黒いじゃないですか!」

「ユノノ!心つつただろ!!!顔、かんけーないだろ!!!You, know?」

「みのおさん、だじやれてる場合じゃないですよ!!!その箱って、純粹無垢な心みっちりじゃ  
ないとだめなんですよ!!!邪(よこしま)はだめ!!!」

「あら、なんで?あんたたちに、おみやげ買ってあげようってのが、不埒なわけ?」

「あたし達にくれるのは、ありがたいですけど、そこで、感謝されたいって思ってるで  
しょ?」

「……」

「みのおさん、それが、邪つつーんですよ。だから、箱あけちゃったら、とんでもないことに!!」

「じゃあ、感謝されなくたっていい。みんなでスイーツたのしもうよ」

「だから、だめなんだって!!!生きていけるぐらいの金があればいいって、言つてたじゃないか! あんた、心のどっかにちゃっかり心が潜んでるからだめなんだってば—————!

OH NO!!!

「姉?どした?」

久々に泊まりに来ていたリラが、姉の様子に驚いて声をかけた。

「え??あ……夢だったか……」

目覚めてホッとするユノ。

「なんか悪い夢でもみた?」

リラが心配そうに、ユノの顔を覗きこむ。

「いや……悪いっていうか、うるさいボクサー親父が、伝説の箱を開けようとしてたか

らさ、それはいかん！つて止めてたところ」

ユノが答えると、リラは

「伝説つて、おとぎばなしとかである、あれ？浦島太郎のやつ？」

ユノはかぶりを振った

「ん〜ちよつと違う・・・」

半分寝ぼけているので、ろれつがうまくまわらないユノ

「金銀財宝とか・・・」

リラが再度問いかける

「トレジャー・ハンター？それとも舌切り雀とか？」

ユノは動かない頭で、無理矢理思考しようとした

「ん・・・その要素もあるけど、ちがう・・・質問されて・・・」

リラが膝をたたく

「あ！じゃ、金の斧、銀の斧じゃね？」

ユノはベッドから起きあがった

「あく、たしかにその部分もあったわ。きれいな心じゃないと、箱をあけちゃだめらしくて、箱の中身は金銀財宝、魔法の薬なんかが入ってるらしい。」

ユノが答えると、リラはにやつと含み笑いしながら



「もしかして、がちやおやじが宝を持ってこうとしたんだね？でも、がちやおやじ、別に心汚くないじゃん？」

眠い目をこすりながらユノが答える

「心は汚くないんだけど、ちやつかりしてるでしょ。あの人。」

リラは笑いながら

「たしかに。ちやつかりしてるね。それがだめなんだ？」

会話が進み、頭もスッキリしてきたユノ

「だめってか、悪くないけど、その魔法の箱をあけていいのは、一点の曇りも汚れもない、純粹無垢な心の持ち主だけなのよ。・・ケント君みたいな。」

リラはちよつと驚く

「ケントねえ！ここでヤツの名前が出てくるとはおもわなんだ。ま、たしかに、ケントはいいやつだ。ちよつと気が弱そうだけど、心はきれいかもねー」

リラが妙に納得した

「そなの、そなの。・・てか、夢だけどね。あせつちやつたわ。だつて、それあけちやつたらとんでもないことになるんだもん。どんなことになるかは、謎なんだけども」

リラは姉の夢に興味を持ったようだ

「でもさ、そんな箱があったらおもしろいよね。世の中の、悪いヤツがこぞつてそれを狙

うじゃん?そんでもって、罰を受けたらいいんだよ!!成敗致す!っていう、そういうかんじでさ!」

ユノもうなずく

「そうなのよ・・・世の中いい人ばかりじゃないからね・・・でも、人を呪わば穴二つつていうから、やなことされても、その人を恨んじやいけないんだって」

ユノの言葉に目を大きく見開いたりラ

「なるほど・・・」

いつもみる不思議な夢とは毛色が違っていたが、とりあえずみた夢は全部記録するよ  
うに言われていたため、ユノはPCを立ち上げ、夢の内容を入力した。

## W | d e 検 査

久しぶりにユノとリラの2人で、ドクター・ヘンリーの診療室を訪れた。今日は、2人が脳の写真を撮る日だ。

最初に姉がCTスキャン室に入室した。待っている間、ドクター・ヘンリーはUSBに保存されたユノの夢日記ファイルを確認しながら、リラに話しかけた。

「リラちゃん、久しぶりだったね。学校の方はどう?」

「とっても順調です!部活も楽しいし、新しい友達もできました」

ドクター・ヘンリーとの再会を心待ちにしていたリラは笑顔で快活に答えた。

「そうか!それはよかったね。いっぱい勉強して、ぜひぜひ獣医さんになつてね。時々僕の仕事も手伝ってほしいな。」

ドクター・ヘンリーは、励ましながら、しかし実は本気でリラに研究を手伝って欲しいと懇願していた。

「もちろんです!博士!獣医しながら博士の研究をお手伝いできたら、こんなに嬉しいことってないです!!!」

応援団員が増えると、がぜんやる気をだすリラ。夢に向かってまっしぐら。この子は

そういうタイプだ。

「リラちゃん、ところでき。ユノちゃんは告白したのかな？」

CT室のユノには聞こえるはずがないのであるが、急にひそひそ声で話しはじめた。

「それがねー。わからないんですよ・・・肝心なことになるとはぐらかすから・・・姉。だからうなされて変な夢みたのかもしれないです。ほら、日記の最後にもあるけど、伝説の箱をあけるとかあけないとか、そんな夢みちゃって」

リラも実は心配していた。

「なるほどねー。仕事のストレスもあつたのかもしれないね。あとは、人間関係でも心配毎があつたのかもしれないね。」

ドクターヘンリーはいつになく柔らかいトーンで答えた。

「なんでも、新しい仕事の話がきているみたいで。多分、本人からも博士に相談すると思うんですけど、頭の中のみずぶくれの件、今の仕事やって大丈夫かって。でも、新しい仕事なら回避できそうだから・・・転職した方がいいのだろうか。診断結果に従いたって言ってました」

いつもふざげ口調のリラだが、なぜかドクター・ヘンリーと話すときは、持ち前のおちやめさをひっこめ優等生ぶつたまじめな話し方をする。

「そうだね・・・今回の写真でわかると思うけど、僕も出来れば今の仕事はちよつときつ

いだろうなあって思ってたんだよね。彼女、いろいろ考えちゃうタイプでしょ。すぐに心配するし。度胸はあるんだけど、細かいところに気が付いちやう。だからね、そういう脳の動きは、みずぶくれがでつかくなっちゃう可能性があるんだよ」

ドクター・ヘンリーはできればユノの転職を進めたいようだった。

ガチャ。助手がCT室のドアを開ける音がした。どうやらユノのCT撮影が終わったようだ。

ユノが診療室に戻ってきた。

## 検査結果

MRI室から出てきたユノはリラと交代で、診療室に戻ってきた。リラはなんだか、あのドームみたいなカプセルに入るのが、楽しみなのか、満面の笑みでユノと交代タッチをした。

ユノが診療室の椅子に腰かけ、診断結果とドクター・ヘンリーのアドバイスを待つ。

「ユノちゃん、どう？ 最近ちよつと疲れてたかな？」

ドクター・ヘンリーの意味深な物言いが、ユノはちよつと気になった。

「なにか・・・問題でもあるのでしょうか？」

ユノは眉間にしわを寄せて、椅子から身を乗り出した。

「んー、問題、という程ではないんだけど、ちよつとね。自分で気づかないうちにストレスがたまってるのか、おできのね、形がかわつちやつてるんだよね。今すぐどうこうってわけじゃないけど、今の業務は考えた方がよいかもしれない。神経使う仕事でしよ」

「先生、変わってるって・・・破裂とかしてしまうのですか？」

ユノは冷たい汗が流れてくるのを感じた。

「破裂つていうとびつくりしちやうけどね、まあ、ぶによぶによしたおできがつぶれるつて、イメージすればいいかな。ほら、子供の頃、転んだりすると、膿になったりしたでしょ？あれが潰れるかんじ。あるいは、やけどした水ぶくれが、ぷしゅって、潰れるとかね。」

潰れる瞬間と、その後はちよつと痛いよね？膿が全部出て、乾燥しちやえば、あとは平気だったよね？あのイメージかな。

ただ、頭の中だからね。その膿が残ると、またおできになつちやつたりするから、吸い出さないとだめだからね。できれば、そのままおとなしくしてほしいのね。おでき君に」

ドクターヘンリーのかみ砕いた説明は、ユノを安心させた。

「おでき君……ですか……。それって、ストレスとかで大きくなつたりもするんですか？」

すべての不安は払拭しておきたいユノは、ドクター・ヘンリーに更に説明を求めた。「ほら、にきびとかもさ、体調が悪いとぶつぶつ出てきちやうでしょ？それと同じでね。ストレスが溜まりすぎて、脳出血や脳梗塞になつたりすることもあるから、脳の異物はストレスフリーな状態が望ましいんだよね……。もちろん、異物に限らず、ストレスと上手に付き合わないと、人間の体と心はバランスを崩すからね。」

確かに。ドルチェのご主人も脳幹出血で亡くなったことを思い出した。温厚で無口なタイプだったので、ストレスがあることさえ、周りからは気づかれにくかった。

休日に趣味で少林寺拳法を教えていたが、生徒達にも慕われていた。父親がいない女子高校生は、まるで本当の父親のように、学校の悩みを何でも打ち明ける程、マスターのことが大好きだった。そんなドルチェのマスターは、仕事のストレスをひとりで抱えて、ひとりで逝ってしまった。マスター亡きあと、ひとりで切り盛りしているママさんの明るさだけが救いだ。

ユノ自身もストレスはあるようではないと思いついてしまふタイプなので、周りから言われないと、どんどん突っ走る傾向にある。そういう性格を友達や親せきが心配して、やいのやいの言ってくることが多い。

「先生、不本意ですけど、今の仕事はきっぱり辞めた方がいいんですね」

できれば、辞めたくはないが、主治医の指示にはしたがわねば、後々他に迷惑がかかってしまうと、ユノは思った。

「僕は、君の頭を開く手術なんかしたくないからね。」

ドクター・ヘンリーの手腕は確かだが、さすがに大事な患者の頭を喜んで切り開いてみたいと思うタイプの医師ではない。研究熱心ではあるが、情に厚い人柄でもあるため、リラもユノも、この研究者を心から慕っている。



ドクター・ヘンリーは伯父の幼馴染でもあったため、ユノもリラも小さいときからの顔見知りだ。

ユノは、父親代わりでもあるドクター・ヘンリーの助言には従うつもりだ。今月中には、上司に話して辞表届を出すことになりそうだ。迷惑をかけないように、最後までベストを尽くすつもりでいるが、実のところは申し訳ない気持ちでいっぱいユノだった。

ガチャ。今度はリラの検査が終わったようだ。

## ケガの功名

リラの脳撮影が終わった。

「どう、リラちゃん。長い時間、狭い中にいて窮屈じゃなかった？」

ヘンリーがリラを気遣った。

「いいえ！楽しかったですよ！まず、自分は閉所恐怖症じゃないことは明らかになりました。ちなみに姉は高所恐怖症ですが。」

リラはニヤリと笑いながらユノを見る。

「おかげさまで回避方法を会得しました！心配ご無用！」

ユノは早く診断結果をしりたく、リラをたしなめた。

「こつちがリラちゃんの映像ね。で、こつちがユノちゃん。ここが前頭葉といって、理性を司るところ。イラツとしたりすると、ココが反応して怒りを押さえようとするんだ」

（がちやおじは、ここがないんじゃないの？ぶぶぶ）

（こら！まじめに話を聞きなさい）

ユノとリラが目でシークレット会話をすする。

「それでね、側頭葉という部位がここで、第六感を感じ取っているのではないか、という

研究結果があつてね。2人の側頭葉が、これがまた不思議な形をしているんだよ。しかも、2人の形がおんなじ。」

ドクター・ヘンリーの説明を興味深く聞き入るユノ・リラ姉妹。

「脳というのは本当に不思議な部品だね。未知数が最大限にある。今も少しずつ解明されているとはいえ、まだまだ神秘の世界がひろがっているんだ。

人が危険を察知したり、なんとなくいやな予感がする、というのも脳の動きによるものと言われている。ポジティブなもののとらえ方をするタイプの人は、脳が活発に動いて記憶力、理解力にも影響する。脳がびかびか光を発するような感じかな。

ところがネガティブに捉えがちな人は、脳の動きがあまりよくない。そして、堪え性がなくなっていくという傾向にもあるんだ」

ヘンリーの説明を聞いて、リラが問いかける。

「確かに脳が性格を作り出すというのは聞いたことがあります。なんとなく、心つていうと心臓のあたりにあるのかな？つてイメージですけど、実際は、心も思考も脳なんですよね？だから、脳の病気で倒れた後、性格が変わったつていう話もあるつて聞いたことがあります」

理路整然と話すリラ。

「ほお、リラちゃんは物知りだね。いろんな事を吸収しているね。そう、君たちのように

ポジティブシンキングだと、いろんな事を見たい、知りたいという欲求が高まるから、記憶力も発達するんだよ。記憶ってね、連鎖の賜だから、物事Aと物事Bを関連づけたら、そこから生じる物事Cを生み出すというような、そんな経緯で記憶が形成されていくんだよ。

もともとの2人の性格もそうだけど、お互いに良い影響を与え合っているから、探求心も旺盛なんだね。脳が発達過程で、元来本能に近いインスピレーションや第六感も、なにかの加減で発達していくのかもしれない。

2人の研究データをぜひ論文として発表したいんだけど、許可を貰えるかな？」  
ドクターヘンリーの依頼を断る理由はない。

「もちろんです！」2人は双子のように声をそろえて快諾した。

「ところで、姉の不調などは問題なかったんですか？

リラが急に思い出したように、熱心な研究者に問いかけた。

「うん？心配はないんだけど、今の仕事は辞めた方が良くって言ってたんだよ」

ドクター・ヘンリーはやさしい笑顔で答えた。

「え．．．じゃ、がちやおじやケントおじと離れなくちゃいけないんだね．．．」

姉を心配して、リラがユノの顔をのぞき込んだ。

「うん、そういうことになるね。でも、仕方ないよ。無理して仕事してて急に倒れたりし

たら、迷惑かかってしまうし」

不本意ではあるが、もう決心は固まっていたユノだった。

「そういえば……この間、私先輩にぶつかっちゃって、捻挫させちゃったんだよね……それで悪いと思って、送っていったら、子供達が遊んでるから、なにかと思つて聞いてみたら、先輩の親がアフタースクールをやってるってわかつて。で、この間までいた先生がやめちゃって、人を募集しているって言つてたよ。」

イギリス人のサッカーコーチがメインでやってて、子供達と放課後サッカーしたり、いろんな遊びをするんだって。」

リラが思いもかけない話題を提供してきた。

「それは、学童保育の様なものだね？ 大きい子供達の保育園というか、両親が働いているから、学校終わったあとに、こどもたちを預かつて、一緒に遊んだり、監督したりする仕事だ。ユノちゃんにもつてこいだね。子供ずきだし、幼稚園の先生の免許もあるしね。学童は幼稚園免許でできるはずだから」

思いがけない提案に、ユノは心が動いた。

「私でいいかどうかわからないけど、もしチャンスがあるなら面接受けてみたいな」

ユノが前向きに捉えたことを喜び

「じゃ、すぐに先輩に聞いてみるね！あとで先輩の親から連絡がいくと思うけど、姉の携

帯教えていいよね？」

「もちろんです。業務時間帯以外とお休みの日でしたら、いつでも対応可能ですって  
言っておいてね。ありがとね、リラ」

人生、なにがあるかほんとうにわからない。ユノが願っていたことが実現するよう  
に、ドクター・ヘンリーとリラは、心から祈り案じているのであった。

## 新しい一歩

久々にスーツをきたので、ユノは、息苦しさを覚えた。大分前に購入したものだだったため、下半身はワンサイズダウンしており、ベルトが必要だった。

一方、上半身は肩のあたりがいかつくなってしまうていたので、多少窮屈だった。

「いやあ・・・冗談で、私アスリートだからかつかつくなってしまうていたので、多少窮屈だった。ほんとうアスリートみたいく、二の腕の筋肉だけじゃなくて肩まわりもたくましくなつたのね・・・」

リラの先輩の親が運営している学童教室から、ぜひ面接にきて欲しいと言われたので、休日に時間を設定し、履歴書を持参して教室を訪れた。

久しぶりの面接だった為、かなり緊張している。

「あれ？おかしいな。サスケのときは緊張した記憶がない。きつと、あのときはまだ臆としてたんだね・・・自分でまともだと思つていても、まともじゃなかったんだ・・・」

みんな、ごめんよ！こんなふつーモードじゃないアタシを暖かく受け入れてくれて！

でも、ドクターストップがかかった以上、この仕事はできないから、仮に今回がNGでも、他の仕事をさがさなくちゃいけない。来月の前半ぐらいには、上司に報告しなければ・・・」

同僚や先輩との別れを惜しむユノだった。

学童教室は子供向けとあって、色とりどりの装飾物が、室内の壁をあざやかにしていた。こどもが大好きなユノは、これらのアイテムや自ら考案の遊びで、こどもたちと楽しめたらいいなどと空想していた。

面接では、これまでの職務経歴などを聞かれた。また、志望の動機や諸々。なるべく不利なことは言わない方がいいのであるが、正直なユノは、包み隠さず話した。

すると、先方も理解を示したようだった。かなり詳しい話をし、条件も提示されたが、ユノ側は内容に不満はなかった。また、英語指導担当の外国人講師と、日本人スタッフあるいは、保護者との橋渡しをしてもらえると、なお良いとのことだった。留学生の友人が多くいるユノにとって、その点は有利だった。

数日内に、正式な決定が下されるようだ。

帰り道、ためいきをつきながら、とぼとぼ歩くユノ。新しいチャンスは嬉しいし、ぜひ挑戦したい。しかし、仲良くしてくれる仲間や、なにより大好きな人と離れなければいけないということは、大いに不本意だ。

おそらく愛しの君には、ユノの思いが届いているはずだが、いまだ何も反応がないということは、「脈なし」なんだろうな……

と、落胆しながら、たとえば脈がなくても、職場で姿を見られるだけで楽しかった日々



にはピリオドが打たれてしまうのだな、胸にぽっかり大きな穴が空いてしまうことは覚悟せざるを得ないと、心を決めたユノだった。



(あれ?犬プロプリンスだ。)

ユノが近づいていくと、犬プロプリンスは笑顔を向けた。

何も言わずに2人はスタジアムに向かって歩いていく。

(あれ?いつもかわいい系だけど、今日は白のタートルネックにダークブラウンのジャケットきて、めっちゃかっこいいんだけど???首が細くて長いから、タートル似合うね:やばっ)

いつもはカジュアルな格好の犬プロプリンス、今日はやけにモデルチックで決まってる。

(しれっと、腕つかんじやおうかな。えいつ)

ユノは、プリンスの左肘に自分の右腕をそっと回した。

(あれ?拒否らないや。じゃあ、しれっとこのまま歩いちゃおっと)

他愛もない会話をしながら2人はスタジアムに向かっていく。周りには観戦を待っている外国人がたくさんいる。スカンジナビア系、コーカソイド系、南方系、老若男女が入り乱れて集っていた。

途中、売店に立ち寄る2人。

「ぐえー」

犬プロプリンスが急に戻ってしまった。

「大丈夫？」

ユノは犬プロプリンスの背中を必死にさする。売店で水をもらうと、犬プロプリンスにそれを渡す。

「二日酔い？（みのさんもだったな）」

心配そうにユノは、犬プロプリンスの顔をのぞき込む

「うん。ちよつとね。でももう大丈夫」

（あー、びつくりした。）

ユノはホツと胸をなでおろした。

「じゃ、行こうか」

犬プロプリンスは、ユノを促す。

（周りだれも知ってる人いないから、またしれつと腕くんじゃおつと）

前回よりもしつかりと腕をつかんで、ぐいっと自分のほうに引き寄せるユノ。

（なんか、うれしいんだけど。とりあえず拒否られてないから、このまま腕つかんで離さないからねっ）

「おおおおい！おわったど！」

（ん？おいちゃん？）

いつもドアの修理などを善意でしてくれる、近所のおいちゃんの声でした。

(あく。夢だったか。不思議なことに、夢って、夢の中では事実だと思ってるんだよね。たまに、これって夢？ってわかるときもあるけど。なんか嬉しかったな。もう、このまま夢で会えたらいいかな。それだけでもいいや。もう会えなくなっても)

おいちゃんに、お礼のチョコクッキーを渡すと、部屋に戻ってグリーンティーを飲むユノ。事故に遭うまでは、珈琲が大好きで、豆を挽いて飲む程だったが、尾てい骨骨折後は、刺激物を取らないようにしていたため、いつのまにか珈琲断ちしてしまい、それからほとんど珈琲は飲んでいない。

ブレイクタイムはジャスミン茶か緑茶。

「緑茶はカテキンあるから体にいいんだよね。ビタミンCもあるから、風邪予防にいいし。利尿作用高いからトイレ回数増えちゃうけど」

事故後は特に健康管理に注意していたユノだった。

#####

それにしても、楽しい夢は数時間良い気分を持続させてくれる。新しい生活への見通しはまだたっていないのにもかかわらず、なんとなく道に光が差しているのを感じたユ

ノ  
だ  
っ  
た。  
。

## 告白夢

朝日がまぶしい早朝、ユノは朝食を早めにとつて出勤した。

昨日より多い仕事量を手早く片づけ、次の準備にとりかかった。

無心で仕事に取り組んでいたためか、今日は時間が経つのが早く感じた。

昼休憩の時間になった。

ピン！

テキスト着信音になる。

(あ、リラからだ)

『あね!!!決定だつて!!姉にもメール行くとするけど、たまたま先輩の親とさつき会つて、聞いてちゃつた』

ユノは信じられない思いで、何度もメールを読み返した。

『リラ、ありがとう。』

ほとんど同時時間帯に別のテキストメールが送られてきた。

『正式採用が決定いたしました。後ほど雇用契約書をお送りいたします』

ユノはこれが夢ではないかと、自分のふとももをつねつてみた。

（あまり痛くない・・・そうか、太股じゃだめか。掌をつねつてみたら・・・いてつ、けつこう痛い。夢じゃないんだね・・・）

というか、夢の一步が叶ったんだね・・・

今日は上司が不在だから言えないけど、近日中に報告しなければ・・・ドクター・ヘンリーにも

とりあえず電話だけしておこう。心配させてしまったしね）

午後の仕事を片づけて、部屋を出た。

あれ・・・みのさんいる・・・

理由はわからないが、じーっと、ユノの顔をみる蓑上。

理由はわかっていているが、その顔を見て笑いがこみ上げるユノ。

肩を震わせながら、笑いを堪えると、蓑上が近づいてきた。

「なに、人の顔見て笑ってんだ！」

といって、がしつ！と、突き飛ばされた。

壁にどーんと手をつきながら、更に爆笑するユノ。

「なにがおかしいって、そういうところがおかしいんじゃない」

と、言いながら、ユノは笑い泣きしていた。



(あれ・・・そういえば、夢みたんだっけ。

内容は違うけど、正夢というか告知夢だったのか？

これは、ドクターヘンリーへの報告事項欄に赤丸だな・・・  
それにしても、この人、ほんと、おかしいんですけど・・・

いつも変なことしておいて、なんで笑うんだって、その質問が  
だいたいしておかしいわい。

まあ、こうやってふざけてもらえるのも

あとちよつとか・・・ま、この辺うろろすれば、この人  
出没してるから、別にいつでも会えるしね)

職場を離れる寂しさより、目の前にいるたぐいまれなお笑い勘をもつ人材の放つ

オーラが刺激的過ぎて、こみ上げる笑いを堪えながらユノは帰り支度をした。

帰り道、いろいろな事を思い出していた。はじめてこの職場を訪れた日のこと。泣いたこと。笑ったこと。怒ったこと。感激したこと。

どれもこれも懐かしい。鮮やかな色で思い出達が回想日記を彩っている。ほんとうにここでいろんなことを教えてもらったし、たくさん学んだ。3年、あしかけ5年、今年で卒業・・・なんだな・・・

とにかく最後まで全力でやらないと。中途半端はいけない。仕事を終了するその日まで責任はあるのだから。

ユノはお世話になった人達への報告をしなければと、メールリストをチェックした。

## 卒業文集

上司への報告が終わり、ほっとしたユノ。

皆にお礼状を書こうとしたら、頭に浮かぶのはへっほこボクサーに笑い死にさせられたことばかり（本命君についてはこっそりひっそり自分の世界で瞑想「迷走？」中）。

（まだまだあるぞ、へっほこネタ）

◆ラジオがかかってないと、死にそうになるらしく

車のラジオが壊れて、私が降りたらどうしようどうしよう（話し相手がいなくなる）  
つてうるさいから、家にあるラジオもつてきてやったら

おとなしくなった。

◆「シロイヌサスケです」と、電話にでたら

今、「運送屋っていった？」と、つつこまれた。

どうやら集音装置も狂っているらしい。

◆AMラジオが大好きなへっほこ。

AMってさ、アホのさかた♪かかないね？

とか

そんなヒロシにだくまされく♪って流れてきたら  
だまされちやっただって？

と、同意を求めてきたが、無視した。

◆び、び、び。データを入力しながら

こんな楽チンなのばかりで、件数だけあつてさく

他の人には口がさけてもいえないく

って言うけど

私の口は裂けてて、とつくに情報漏れてるけど？

◆建物の説明するのに「そこずーっといって右ね」

って言うけど

右には土手しかない

当然、左にいったらあつた

◆あのさ、あのひとびみよーなのびみよー。

びみよーだから、見てきてね！

っていうから、何を言っているのかと思つたら

奇抜なメイクのデザイナーさんのことを言っていたようだ。

どうも、言語が正しく変換されないようだ。

◆また別の建物の説明をするとき

「あそこにあるマツチ棒ね」

っていうから、なんのことかと思っ行つてみたら、ログハウスのような茶色い壁の一軒家だった。

おそらく、「マツチ箱」っていいたかつたんだろう。

物体認識装置も交換が必要だと思う。

◆かもん学習教室の入り口で

「僕も通おうかな……」って、ぼそっとつぶやいた。

かもん塾より、工場で再生してもらったほうがいいと思う。

◆壺と式の区別ができないらしく

何十回と

どつちが「いち」？って聞いてくる。

壺万円札みたことないのかな？

◆入金処理機械の前になると、必ず

ぶつぶつ言ってる。いちまん、さんびやく、さんじゆう、えつとー

ごえん……あれ？いちまん、さんびやく、さんじゆうー

と、呪文のように繰り返している。

うなされそうだから、やめてほしい。

◆バレンタインにチョコよこせと言うから  
しかもオジバがいいって指定してきたので、  
でっかく「義理チョコ」ってシールを貼って  
渡してやった。

◆初売り行くの？って聞いてきたから  
いつも文房具やだけは必ず行くと言ったら  
「クリアケース買ってきて」と、頼まれた。

言われた通り、買ってきて渡したら、「ありがと！」と言ったきり  
いまだに代金はもらってない。

◆桃田さんっていう人がいて

ねえ、桃ちゃんととなにしやべんの？

って聞いてくるから

え？桃田さん、会話しない。

いたすか？

ここっす

おわりっす

しか言わない。

と言ったら

急に走り出し

「桃ちゃん、だめじゃーん、ゆのちゃんと

コミュにケーションとらなきや！

す しかいつてないじゃん」

と、言いに行つたが、桃田さんは???だった。

◆職場で面識だけあつて

まったく会話したことない人に

「いつもどうもね〜」とあいそをふりまいている蓑上。

言われた人が「なにがどうもなんだろうね？」って、つぶやいてたのを

私は聞き逃さなかつた。

◆困るとすぐ山中さんと呼ぶ。

「山中ちゃんこないかなーこないかなー、早くこないかな〜」ってうるさい。

(どんだけ犬プロ好きなんだよ！あたしの方が好きだ！ばあか)

って、心の中で罵倒しておいた。

◆ねえ、高澤となにしやべんの？って聞くから

「んー、犬のこととかかな」

って言ったたら

「じゃあさ、今度『あたし犬きらいなんです』って、高澤に言ってみて。

それで反応を僕に報告して」って言うから

私も悪のりして言ってみた。

高澤さんは目に涙をためて

「そうだよねーそういう人いるよねー」

って言うので、「ち、ちがいます!! 袁上ミッションです!!!」

と、すかさずフオローしたら

「こーって変な人しかいないよね・・・」

って目をうるうるさせながら毒吐いてた。

ちなみに、目に涙を溜めてたと、ものに報告したら

にんまーって喜んでた。

◆高澤とは気が合わないのか、電波が通じないらしく

高澤が電話すると、ものに通じない

なんで通じないんだろう? って、高澤が言うので

「充電中じゃないですか?」って言ったたら



「あ、携帯じゃなくて本人？」

「そうそう、走る格好のまま、止まって充電中」

と噂してたら、蓑上から電話がきたが

「も」と言つて、すぐ切れちゃった。

いくらなんでも充電されるの早くね？

◆ 「なんか変な音するね？」

つーつーつーつーつーつて、モールス信号みたいだ

みのうえさん、うんうん、うんうんつて答えてたりして」と、高澤が言うから

「あ、つーつーに反応して会話してますよ

間違いなく」

つて噂してたら

蓑上からでんわきた。

モールス信号ならまちがいはなく通じるらしい。

◆ 「ねえ、ユノ、A B型？」つて突然聞いてきた。

「ううん」

「じゃあ、Bなの？」

「ううん」

「O型あ〜?」

「ううん」

「え、? A型なの!」

って、驚かれたけど、全くもって意味不明。

ちなみに自分はO型と言いつ張っているが、ウソだと思ふ。

◆会社の名前を勝手に変えて呼ぶクセがある蓑上。

ずっとその名前だと信じて、そのまま会社名を告げたら

ちがいますよ〜って笑われた

人に恥をかかせやがって・・・

◆誰もいないはずのところで、ずでっ!って転んでしまった。

そしたら、どこで見ていたのか知らないが

「勝手に転んだわね〜」って

すっかりバレてた。

そういうところはやけに鋭い。

◆指導されたときに、他の指導者の人達と真逆のことを言うので

マニュアル確認したら、へっぽこがあきらかに間違っていたことが判明。

それ以降、なにを指導されても無視することにした。

\*\*\*\*\*

今日は、お客さんの所に黒と白のパンダ猫がいたのでちよつと戯れてたユノ。

次に行ったところでは、ティーカップヌードル、じゃなくて

ティーカッププードルがいた。あまりにかわいすぎてずっとぐりぐりしてしまい、しばらくそこを離れられなくなってしまった。

仕事でそういうことに遭遇するのが、とても楽しかったけど

今度は大好きな子供達と毎日会えるでしょ、と、自分に言い聞かせ事務所に戻った。

もともとは猫好きだったユノだったが、この会社に来てからは

犬もかなり愛おしくなっていた。

それにしても、この会社、本当に個性的な人の集まりだったな・・・とユノは笑いながら思い返していた。

## 宿題

新しい仕事に就くためにできるだけ不安材料は取り除きしておきたいユノ。これまで  
の夢日記も含めて、ドクターヘンリーからの心理アドバイスをもらった。

まず、心を前向きに持つていくために、これからしたいことを箇条書きにすること。  
それらを目標に掲げておけば、正しい指標に向かつて進むことができる。ポジティブ  
シンキングの状態を保つと、脳はいつもリラックスした状態、あるいは適度な心地よい  
緊張とともに、仕事に集中することができる。

〈これからしたいこと30箇条〉

1. もし好きな人とツーショットになれたら、横でずーつと顔を見てたい。話聞い  
たい。
2. もし好きな人のそばにいたことができたなら、ずーつと好き好きって言い続ける。
3. もし好きな人と手を繋げたら、ぜったい離さない。
4. 好きな人にハグしたい。バックハグして離さない。
5. 日帰りでもいいから温泉行きたい。
6. 遠くまでドライブしたい。

7. たまに外食したい。
  8. 思いっきり部屋の模様替えしたい。
  9. 久しぶりに飛行機乗りたい。
  10. 久しぶりに新幹線乗りたい。
  11. これらは好きな人と一緒に叶えてみたい。
  12. 残った仕事も最後まで気を抜かないで全うする。
  13. 家族のケアも忘れない。
  14. お世話になった人への感謝も忘れない。
  15. お金少し貯めたい。
- んん30もないな・・・
- だつて一番したいことつて、好きな人の顔をみて直接、だいすきなんですけど、だいすきすきすきつて言いたいんだもん。今はそれが一番かなえたいことかな・・・
- もし、今大変だったら、つらかったら、ぶつけてよ！痛いとか大変とか吸い取ってあげるから！我慢しないで吐きだしてよっ
- これまで一緒にいて楽しかったこと、会話したこと、笑顔みてたこと、一緒に笑ったこと思い出してる。あれがこれからも続けばいいのに・・・
- 間接的には伝わっていると思うけど、直接言いたい！直接近くにいたい。

それで

きらい

って言われたら

仕方ないよ。

あきらめるしかありません。

あれだね、一番きついのが

きらいじゃないけど、無理、とかいう中途半端な返事ね。

きらいじゃないけど、はいらない！

君は無理！でいいよ。

だめならだめではっきり聞きたいけど、職場の目があるから、脈なしなら

沈黙でいいですって言ってあるから、このまま沈黙なら

だめってことだから

そういう判断ってことで!!!

新しい仕事に集中しましょう。

さて、夕飯つくろつと。

今日はチャプチェかな。ちよつと多めにつくって明日リラに持っていこう。

あとは、リラの好物のにんじんしゅりしゅりを作る。

とりあえず新しい仕事が決まったんだから、あまり欲はかかないことだよね。

この喜びだけで十分・・・。4月からはまた心機一転新たな気持ちでがんばろつと。  
私の今好きな人、あんな人にはもう会えないだろうな。

めっちゃすきやねん！

宇宙の真ん中で今、叫んでるってば!!!

## Wの喜劇

お仕事終了まであと3週間ちよつと。いよいよラストスパート。しかし無理せず。最後まで責任を持って仕事をしなければいけない。今日は所属長から少し早く来て欲しいと言われたので、早めに出勤して仕事の準備をした。

今日は桃田さんのお仕事を手伝うことになったが、

書類を届けなければいけないので、場所を確認すると

「\$%&，(\$%&，(．．．．．つす！」

一生懸命教えてくれているのだが、ちよつとよく分からなかったので

地図を見せると

「地図にないんつす．．．．．新しいんで．．．

あつ！うえつ！！！！あるつ！！なんであんだ！！！！???

．．．．．ここつす」

ユノは笑いを堪えながら、書類などを受け取ると

仕事にとりかかった。

預かった仕事が終わったので、桃田さんに内線で連絡を入れると



「うええっうえっつ！\$%&，(%&，%&，○!!!．．．いつすね!!!」  
と、なにか驚いていたので

「なにか問題ありましたか!?!」  
と尋ねると

「いや．．．大丈夫です．．．」

といつて、電話を切ったあと、ユノはしばらく笑いが止まらなかった。  
さらに事務所に戻ると

例のお笑い帝王、元ボクサーの暴れん坊ランボー蓑上がいた。

(まだ桃田さんの笑いもおさまってないのに、困ったわ)

ユノは蓑上の顔をみないようしながら事務所に戻ると

蓑上は鬼太郎と会話をしていた。鬼太郎とはユノが密かにつけたニツクネームで

痩せているわけではないのに、メンパンがずりさがってるので(たぶんわざとだろう  
が)

鬼の腰巻みたい．．．と、思ったからだ。

蓑上が鬼太郎に向かつて

「ねえ、ほら、あの寝台車。なんだっけ?」

「え?北斗星でなくて．．．」

「ほら、ほら、うーんと、かがやき、じゃなくて」

かがやき、かがやき、かがやき、じゃなくってさ〜」

と、何度も繰り返していたので

（カシオペアのことがいな？・・・って『か』しか合うてないやん！）

と、思いながらユノが爆笑すると

蓑上がすつとんできて、またしてもユノは頭を殴られた。

（なんて乱暴なのかしら〜あなたのようにブリキじゃないんだから、やめてよね）

と、小さくつぶやきながらしばらく爆笑が止まらないユノだった。ぜんまい仕掛けのランボーブリキ男は、更にまた機械に向かってぶつぶつなにか話しかけていた。

（もう・・・今日は桃&蓑にダブルでやられたわ・・・）

それにしても、いいねえ寝台車。最近の寝台車ってすごく豪華なんだよね。

子供の頃に乗ったことあるけど、楽しかったな〜

また乗れたらいいな。犬プリンスも一緒だったら楽しいのにな・・・

まっ、お金貯めて、豪華寝台車の旅を目標にしようつと。

あ、そういうえば新しい職場に健康診断書類をださなくちやいけないんだつた。会社休みの日に行けばいいけど、ドクターヘンリーに頼んでもいいかな？保険外なんだし大丈夫だよな？あとで電話してきいてみようつと）

会社への提出書類のための検診と定期検診も兼ねて近々ヘンリーの元を尋ねようと思つたユノだつた。

## 秘密の裏日記

(これはドクター・ヘンリーには見せられないよね・・・もちろんリラにも。私がこつそり、楽しむための日記だから、内緒なのだ。提出用とは別に日記つけてるってのは誰も知らない・・・)

〈裏日記〉

某〇月〇日

1. 犬プリー(盲導犬プロジェクトのプリンス↓犬プロプリンス↓犬プリー。長いからかなり省略した模様)って、実はしっかりしているようで、けっこう天然なんだよね。そんなところがかわいくてたまらないんだけど。

ランボー(蓑上のボケとはまた違うんだよね・・・ランボーの場合は、ボケっていうより調節狂ってて、ポンコツなだけで、べつに基準は間違っていないんだよね。

あと、わざと笑いとりに来る場合もあるからね。おもしろい人ってくりだけけど犬プリーが本当の天然だ、と私は思う。だいたい頭がいい人ってまっすぐだから、天然だったことある。みのは天然ではないもん。養殖？

そういえば、こんなことがあった。

「明日は盲導犬の実地訓練の日だから、雪が降らないといいなあ。あ、ボクてるてる坊主つくつちやおうかな！雪が降らないように！」

「……てるてる坊主って、雨が降らないように願掛けするときを作るんだよね？雪ってきいたことないんだけど……でも、なんかかわいいい。そうよね。雪ふらないようにテルテル坊主でもいいかあ。マイナーだけど雲掃人形とかあるらしいけど、かわいから許す。」

2. ある時、荷物もってたらざり落ちてしまって、生爪が剥がれたことがあった。それで、うっ……爪はがれて流血した……って言ったら、「こういう仕事だから、ネイルとかは……」

って言うんだもん!!あたしやこの会社に入ってからネイルなんかやってないってばあ〜!!!

「ちがくて、本当の爪!!」と、言ったら気付いてくれたけど。女子はおしやれ気にしてるって思ってるのかなあ。かわいいねっ

3. ○○ちゃんは女好きなんだ……■子ちゃんは僕が行くとすごく喜んでくれるんだ。って言うから、友達の話?ってよくよく聞いてたら

犬の話だった……

「ただ犬が好きなんですか!!!!!!私にはあなたが大好きですけど!!!!!!」

と、心の中でつぶやいておいた・・・

4. ある時社内見学に来ていた小学生を引率していた先生がいた。こどもたちをきちんと制して、歩く道を譲ってくれた。それをみて、

「お、空気読む人だ。好きになってしまえようだ!」と、思わず叫んだ犬プリ。  
 (えく!!!私を好きになってよ!!!)と、やっぱり心で叫ばずにはいられなかった。

5. 同じく道をゆずってくれた人がいた。それをみて、「僕ああゆう人が好きなんですよ」と、つぶやいた犬プリ。

(道なんかいつだつて譲ってあげるからああああああ。なんだつてゆーこときいちゃうつてば!!!私を好きになりなさい!)と、心で吠えざるを得ない程、熱く燃えたぎる想いでいつばいだった。

\*\*\*\*\*

犬プリのとやりとりも密かにいろいろあるのであるが、それはどうしても恥ずかしくて、ヘンリー日記には書くわけにはいかない・・・なぜなら、リラとの共有ノートでもあるから。会話のはしはしに犬プリが登場するので、どんな人柄かということは、リラ

もよくわかっているが、かといって、ユノ自身の微妙な心の動きはなんとなく言えなかった。

職場を離れるということもあつて、私日記：犬プリ編を読みながら、なつかしいなくと頬を赤らめるユノだった。

## カッチャギウエ?

「ヘンリー先生！」

「どうしたの？」

「車のナンバーだったんです！」

「??？」

ドクター・ヘンリーに健康診断の予約をしていたユノは、息せき切って診療室に飛び込んできた。

「ユノちゃん、落ちついて落ちついて。今日はもう午後から診療ないから、

お茶でも飲んでゆっくりしていつて」

ヘンリーはユノを落ちつかせようと、ソファへ座ることを勧めた。

「あ……すいません。ちよつとびっくりしたので……」

「今、お茶入れるから待つて。今日はオレンジペコとフィナンシエがあるから」

ユノは普段紅茶はあまり飲まないが、以前、横浜の有名な紅茶店で味わった

オレンジペコがお気に入りだった。フィナンシエもココナツやアーモンド好きなユ

ノにはうれしいおやつだった。



紅茶の香りで落ちついたユノはゆっくり話はじめた。

「先生取り乱してしまつてすいませんでした。昨日久しぶりにリフレッシュ温泉に行つたんです。

しばらくいけなかつたので、仕事が終わつてから直接行つたんですが、そこでロッカーの鍵をいつも渡されるんですね。貴重品や着替えを入れる……そのロッカーキーの4桁の番号をみたら、盲導犬プロジェクトの所長が乗っている車の番号だったんです。」

ヘンリーは穏やかな笑みをたたえながら言葉を投げかけた。

「所長さんつて夢にでてきたり、いつも話に出てくる男性だね。ケント君のおじさんだったかな？」

君が大好きな、という表現を敢えてしなかつたが、ユノの想いの人であることを確認しているよという意味を込めて、ドクター・ヘンリーが質問をした。

「はい、そうなんです。昨日はケント君の卒業式で特別な日だったし、ちよつと驚いたんです。

夢ではありませんが、たまにこんな不思議な現象に遭うので、検診ついでに先生にご報告を……と思ひまして」

「そうか。それにしてもユノちゃんはランダムな数字を覚えるのが得意だね。

携帯を持つ前は電話番号ををソラで覚えていたんだよね?」

「あ、はい。全部ではありませんが、親しい友達の番号は記憶していましたので  
電話帳は使ったことがあります」

「数的処理が得意な人は、脳の動きも独特で、そういう人はインスピレーション力が  
高い傾向にあるんだよ。SEとかプログラマーがそうなんだけどね。

ちよつと違ったものを受信しちやつたりする人もいるようだ。リラちゃんも  
そうじゃない?」

「そうですね……リラは数学よりも理科が得意なんです。理科だけはいつも90点以上  
なんですよ……私は数学の方が好きだったんですが。」

「そうだったね。リラちゃんは将来、僕の弟子入りしてくれるんだもんね?」  
ユノは笑いながら答えた。

「そうなつてくれたら、ほんとうに嬉しいです。先生のお手伝いができて  
すきなことを学んでいけたら、彼女も幸せだと思います。」

「それにしても、車のナンバーが出てきたのは、ビックリしたね。  
いろいろな偶然が重なると、縁を感じざるを得ないね」

よくよく考えたら単なる偶然なのであろうが、なぜかその数字を見たときに  
不思議な衝撃を覚えたことが気になり、ドクター・ヘンリーに報告したユノだった。

新しい生活を前にいろいろとナーバスになっているのかもしれない。

また、遠巻きに見かけた犬プリが疲れた表情をしていたのが気になったのだろう。

未だ直接の関わりはないとはいえ、いつもユノの心の中には犬プリの存在が大きな位置を

占めていることには変わりなかった。

「先生、そういえば、リラが不思議な夢をみたことを思い出したそうです。

Kスターのジョヨンが亡くなる前に、大勢の人が行き交う中に彼がいて、海の向こうに

歩いていった夢をみたのだそうです」

「なるほど……伯父さんは亡くなった後に2人の夢に出てきたんだったね」

「そうですね……私達の体験は波があるようで、不思議なコトが続くときは立て続けに起きて

何もなときはほんとうに何も無い日々が続きます。」

ドクターヘンリーは今一度真剣な面持ちで、会話のデータ化を進めていた。

## あの時の記憶

リラの卒業旅行。彼女が行きたがっていた日本列島最北端の土地。

太宰記念館や三内丸山遺跡をみたいというので、中学最後の記念に

新幹線を利用して北へ向かう計画を立てていた。

(思えば、あの時は結果を待っている間が、死刑執行の宣告を待つ死刑囚のようだった……)

終わってしまった、ほっとして肩の力が抜けたっけ。

ユノとしてはどんな結果でもいいから、強く心を持って受け止めたい一心だった。

あの年は本当に過酷で、前期試験で県内トップレベルの高校に落ちた子たちが

後期試験でリラの志望校に流れてきた。結果、倍率が3倍に。通常理数科はこんな倍率に

ならないのに、No. 1高校受験の子全員がその志望校に願書を出した結果だ。

もうこれは絶望的。そう思っている保護者の気持ちとはよそに

最後の模擬試験がかなりの高得点だったことに気持ちを良くして

ほぼ無理だと言われている高校をリラは躊躇なく受験した。本人も納得済みだった

から

よかったようなものの、待っている大人は気がきじやない。

結果をきいてホツとした。既に受かっていた滑り止めの私立に進学が決まった。

この私立も併設の大学もあるし、国際交流や校内塾なども充実しているし

なかなかよい学校なのだ。奨学金制度もある。

公立志望校がだめだったおかげで、ギリギリ最後に追い上げたところで、世間は甘くない

ということを悟ったのか、高校1年から猛勉強を開始する心構えが

できたようで、大学受験はスタートが肝心とばかりに

勉強中心の生活に切り替えたリラだった。

勉強なんて強いて勉めるんだから、楽しいわけないのに

すればするほどいろんな発見があつて楽しいとのたまうリラ。

とにかく、なにがなんでも動物の仕事がしたい。

夏休みや冬休みはペットショップでバイトする！と、意気揚々と

通学するリラだった。

(やっぱり女子は強いね・・・こうなんていうのかな。ストレスに強いのは

女子の傾向にあるんじゃないかな・・・出産の痛みを男子が経験したら

死んじやうらしいからね・・・女子は痛みには強いらしい。

そこいくと、私も女子なのに、ストレスにはめっぽう弱い。大きな災害とか

そういう場合は落ちついていられるのに、仕事中の緊張や、受験結果を待っている間は、頭が爆発しそうだった。

卒業旅行の引率のための休暇申請をしていなければ、きつとそのまま倒れてしまったに違いない。姉、弱い！って、前にリラに言われたっけ・・・

そうなんだよね。けっこう気は強いつもりなんだけど、プレッシャーには

弱いかも。人前でしゃべったりプレゼンなどは全然平気なんだけど・・・

リラと私の緊張するポイントが違うんだよね。まあ、でも、今はキャパスライフを  
楽しんでいようだから、よかった)

同じ香りや同じシチュエーションで、以前の記憶が鮮明によみがえることがある。

桜のつぼみが待ち遠しい、あたたかな空気に触れた瞬間、1年前の記憶が

よみがえったユノだった。

そういえば、不思議な体験は、受験会場に送って行ったときに

「ハイハイじゃなく」

と、ひらめいたことを、ユノは思いだしていた。本来なら受かって欲しい場所なのに  
ここではないと、ひらめいてしまって、瞬時に否定しようとしたことを

落ちついた今は、ゆっくり思い出し、そのひらめきが「当たり」であったことを  
かみしめていた。

## 巡り巡って

1ヶ月以上も前に申請していたとはいえ、休みをとると

なんとなく罪悪感がわいてしまうというのは、日本人の特性だ。

めぐりめぐって1年はずいぶん立つのが早い。

自分の人間更新日ももうすぐ。何十回とそれを繰り返しヒトは人生を重ねていく。

こうやって長いこといろんな人をみていると

年を重ねて重みを増した人、ものごとを悟って、出来事には意味合いがあると

実感する人、

年月を経ても人間性が変わらず、変わるどころか悪い方へと進む人。

変わろうと努力している人は、間違はなく自分の理想像に近づくことができているもんだなあと、様々な職場やいろいろな所で人をみていると

つくづく感じることもある。

おもしろランポー蓑上は、いつも退屈しない。彼なりにいろいろ苦労も

しているのだらうけれど、あまり深いことは考えないようだ。

たまに「老後どうしよう？あんだどうするの？」なんて、考えても



しようがないことを、問いかけてきたりするけれど……

「その時はその時ですよ（だって時代や情勢も変わるしね）」

と言うと

「そんなことでもいいの〜???

あんた、寂しくてあそこに並んでたりするんじゃないのっ!」

なんて言ったりする。

『あそこ』とは、老人などを言葉巧みに景品で釣って、高額をだまし取る

詐欺商法売り場のことだ。一定期間、ある場所でわりと高級そうな商品を無料で配り最終的に高額なモノをうりつけ、その後、跡形もなくなる。連絡も取れない。

どこそこかしこでそんな光景を目にするのに、なぜお年寄りはその足を運ぶのか? だまされているわけではなくて、わかつて行っているらしい。

つまり『さびしい』からだ。

自分の家族は離れたところにおいて、なかなか会いにくることがない。来たとしても盆正月ぐらいで、話す時間も短い。

日常で会話の相手になってくれる縁側友達もいない。そんなお年寄りがよりどころにしてしまうのが、そういつた詐欺商法売り場なのだ。

売り場の店員はやさしい。必要以上にお年寄りに愛想を振りまく。

そんな光景を見て、蓑上は思うところがあつたようだ。

子供好きのユノは、道を歩いている子供が手を振つてくると、笑顔で手を振り返したり、話しかけたりする。すると蓑上は

「やめなさい!!!誘拐犯だと思われるでしょ!!怪しいからやめなさい!!!」  
と、激しく叫ぶ。

ユノはその度に腹をかかえる。

(怪しいのはあなたのほうでしょう)。私が手を振つてもおかあさん達だつて笑顔で見守つてくれているやんか)

「あら、ユノ、制服は?」

「え?ああ、中身ね・・・暑いから脱ぎましたよ」

「へえ・・・脱いだのね。脱いだんだ」

(なに言つてんだろ、この人?いや、無視しよ)

こんな他愛もない日常もあと少しで終わりがくる。

たまにしか会えないとはいえ、犬プリとも偶然すれ違うこともなくなってしまう。

言いしれぬ寂しさを抱えながら、ユノはとぼとぼ歩いていた。

(犬プリともいっぱい会話したんだよね・・・走馬燈のように)

頭に浮かんでくる・・・

今はオアシスに乗ってるけど、沖繩に居たときはなんちゃらシルバーの車に乗っていたって言ってたっけ。めずらしい色だつて。ちよちよこ

いじっているらしく、その車は大事だから置いてきたらしい。懇意にしてくれる車屋さんに預けたみたい。

車と犬が好きなんだね。いい趣味だ。どっちもお金がかかっちゃうけどね自分で一生懸命働いたお金を自分の趣味に使うのは良いことだ。

次の仕事でお金が貯められると良いけど、まずは仕事を覚えて、来る子供達の名前も覚えなくちゃ。

社員の送別会の時に撮った大大好きな犬プリの写真をながめながら、会えなくなつても、ずっとずっと心から離れないだろう愛しの主を思っているユノだった。

彼が何を考えているのか、どう思っているのか、最後まで尋ねることができないのだろうか。彼の気持ちを引ききたい。そう思いながらも実行できないユノだ。

今朝の夢は、新しい仕事場で荷物の移動をしているシーンだった。

お客さん（お父さん保護者？）に名刺を下さい、と言われてる。

あ、すいません、これしかありません。と、自営の名刺を渡そうか躊躇しているそんな夢だった。

「そういえば節目節目で、なにかしら夢をみていたかもしれない。

サスケに入社した直後も、犬プリの夢をみた。その時は、まだ自分の気持ちに気付いていなかったが、なぜ彼の夢をみるのだろう？と、思ったことがあった。とりあえず、意味はわからないが、定期検診時に提出するための『夢日記』に記録しておいた。

## 大変ダ

ユノは受験をしたことがなかったため、受験システムには疎い。

ましてや昨今の受験のシステムってなんだかさっぱりわからない？

前期試験？後期試験？AO入試??推薦・・・

(ん〜。高校入試もそんな感じだったけど

ほったらかしちやっただからね・・・まあ、とりあえず良い学校で

なんとかがんばってくれてはいるけれど

大学入試はケアしないとだめかも・・・偏差値なんてなに？って感じだったけど

こうやってみると伯父ちゃん、なにげにすごかったのね・・・)

一旦興味をもつと徹底的に調べないと気が済まないユノは

リラのために大学入試のデータのプリントアウトを始めていた。

(え？なに？今って第二外国語も受験科目としてみてもらえるんだ？

推薦とか、センター入試とか・・・

じゃ、リラは韓国語ならわかるからちよつと勉強すれば

いいんじゃないの？中国語やりたいって言ってたけど・・・

でも、会話とは違うからなーーーー  
難しいやん！

これはムン先生に特訓してもらわないとだめだな・  
てか、この子が受験する年にはまた制度が変わるって???

もう、わけわからん……

子供の数が少ないのに、なぜにそうやって受験制度を

複雑にするんだろ???

高校時、共通模試みたいのを受けながら、偏差値だしていつて  
レベル見合う学校にWEB出願する。それで、締め切りまで

定員に満たなかったら、全員合格

ぎりぎりまで出願して、その状況をみてキャンセルして

他に切り替えたりすればいいのに。オークションの時間制限みたいに。

それで、最後の締め切りで、定員50だったら55ぐらいまで

幅を持たせて（ドタキャン対策）、定員オーバーだったら

抽選すればいいじゃない。

それで×だった人は、2時出願ってやればいいのに。

もちろん学校毎に定員決めていいけど。それで、どれもダメなら

私立の滑り止めに行くとか。

私立しか受けない人、つまり専願受験の人は科目少なくなるとか。

あと、私立の推薦は私立だけを希望する人しか受け入れないとか。

そうやれば、定員確保できるんじゃないの？

というかさ、日本大学多すぎ！

なんか学業を商売にするって、どうなんでしよう？日本人が金有るってことだよ  
ね・・・

子供の数が少ないのに学校が多い・・・昭和の経済成長時代は逆だったのに・・・

本来の大学と言われるのは数校だよ・・・英語の University って

医学部とかある総合大学がそうらしいよね・・・日本はほとんど college

になっちゃうらしいよ。特に私立は・・・

大学行って勉強しないんだったら、高校でて働いた方が

よっぽど社会性が身に付くってものだ・・・

いたなあ。そういえば某会社でも。大学でてます、でも使えませんが・・・

あれはびつくりした。女性達はすごくデキル女子なのに、男子が

は???

その時ほど、日本は大学でたから知識ありますとか頭いいですって

くくりにはならないってのを実感しましたね・・・

だって、元首相、新潟出身の故田中角栄さんなんか小卒だもんね？

まあ、時代の関係もあるだろうけど、学校は行ってないんだよね・・・

それで総理大臣になった人もいるわけで・・・

大学って～なんだろ？

と、思いですが、まあ、リラちゃんはどうしても勉強したいというので

私もがんばって、そういう環境は作ってあげたいと思うわ・・・

理科も好きだけど、経理も好きだって言うからね・・・

簿記検定受けてもらいましょ。

いやあ・・・あたし、しかたなく経理とかやったけど

だ伊ツきらいだわ・・・

借方貸方とか、意味わかんないもん。勘定科目も

なんでこれが作業経費でこつちが経費なの???

へいいのよー、好きに分けて～って言われても、覚えられないわ・・・

とにかく興味ナッシングだったから、私は簿記やら経理やらNGですけど

簿記はやってても損はないからね・・・

問題集ネットから注文しときましようか。



もう、受験に関しては、月謝払ってでも、ドクターヘンリーの  
ご協力もいただかねば・・・

生きていくためにはお金が必要、お金を得るためには、仕事を  
得なければね・・・  
自分がやりたい仕事につける人はほんの少数。

でも、努力はし続けて悪いということはないから、私も久々に

韓国語勉強しよつかな・・・

英語はほんとーに嫌いで、仕方なくしゃべったりはするが、

長文などを見ていると、寝てしまうユノだった。

なるべく楽しく勉強しようと工夫したのが、セサミストーリーだった。

これだけは、楽しいストーリーと、愉快的キャラで何度も見たり  
繰り返し返したり

マネしたりすることができた。

(B人に言ったら笑われたけど、勝手に笑ってればヨカ。しゃべってなんぼじゃ！)

英語を母語とする人達の論理思考が、性に合わない故、いやいや勉強したユノは

リラには勉強にやりがいを持って、進めて欲しいと思っていた。

(犬プリに相談したかったけどね)。でも、なんか邪感漂うから、できなかったわ・・・

元気かな？今、なにしているんだろ？仕事かな・・・

これまでの仕事とはまた違った課題が増えるであろうユノの新社会生活。

同時に妹の進路にもスタートが肝心とばかりに、調査を進めるユノだった。

## ユノの独り言

とりあえずリラはさあ落ちついているけど・・・

落ちついているのか？

落ちついていると信じようとしているのか？自分

私はリラの心配&今の仕事全うしなくちやの心配&新しい仕事の心配&

自分の体の心配 e t c e t c (一番はあの人はどう想ってるかだけど保留ダ)

頭爆発しそうなんだけど？

1日が34時間ぐらいあつて1時間が360分ぐらいあつたら

なんとかかよーでるかも、だけど・・・

車の手続きは、近所のまつにいがやってくれるつていうから

とりあえず安心したけど・・・(てか、おんぶにだっこでいいのか?)

あの人世話好きだから、なんでもやってくれちやうんだよね・・・

今日だって合間に私物の部品の交換してくれちやうし・・・

行為に甘えっぱなしつてのも、心苦しいわけです・・・

なーちゃんに頼まれたまっぷは、もう渡したからいいでしょ・・・

リラのケータイ解約もおっけーでしょ

あとなにやるんだっけ？

あ、ヘンリー先生から貰った健康診断の間診票 e t c を

新しい職場に出さなくちゃ・・・

あと、職場のシフトがわかったらヘンリー先生にも

メールしとかなくちゃ・・・定期検診の予約の関係もあるしね・・・

不思議な事ってあったっけ？

あ！あったあつた

いつもお墓参り行くとなにか聞こえるのに

今回は

あれ？なんにも聞こえないや・・・って思ったら

墓地Aで「%&'○%&'(&'○」へ内緒

って聞こえてきて、まじすか！って、叫んじやった件

墓地Bでは「&'○&'(&'○」へ極秘

って、聞こえたというより会話しちゃってるかんじの様子

(ヘンリー先生じゃなかったら別の病院連れてかれるトコだよ・・・)

てことを、暗号にしてヘンリー先生に提出

でしよ

あとは、健康保険料金の支払いだ・・・  
平日じゃないと銀行やってないから、午前中にいかないと・・・  
そんなもつて

近況のおしらせを送らなくちや・・・

コ藤さんと中田先生かな・・・

友達関係はメールでいいな

放置組は年賀メールでいいや

明日は忙しいのかな・・・

今日は少なかつたからよかつたけど・・・

とりあえずこれらが終わつたら

またリラとご飯食べにいかなくちや

学校関係&資格取得&もろもろの打ち合わせ

そういえばこの間ごはん食べたとき

東方とか艦コレとかISとか、詳しくたわくあの娘

思わずインタビューしちゃつた

エヴァの解説もしてもらつて

ガンダムなら多少わかるんだけどね・・・

私は北斗の拳とかは好きだったし

スピリッツは弟のおさがりもらって読んで

廃品回収だしてたから

そーゆー系はわかるけど

リラは小説書きたい！とか言ってたから

ああ、ネットで書いたりできるよーって

教えてあげたけど・・・

ひとつあいてるノートPCあげることにしてるから

そこからアカウントとればいいしね・・・

その前に検定用のMS office入れてあげなくちゃだから、

そーだー、その作業もあつたんだ・・・

フォルダ整理しとこ。べつにやばいものとかは

入っていないので、無問題ですが、仕事のとか入ってたら

移動しとかないとね・・・

あとブックマークは削除しとかないと・・・いちおうね。

・・・と、こんなところでいいのか？

料理する時間あまりないーーーーー！

料理しないとストレス溜まるわ・・・

事故後、珈琲飲んでなかったのに

この間、思わずセブンコーヒー飲んでしまった・・・

たまにならないよね？健康のため

アルコール、珈琲、刺激物はとらないようにしてましたけど・・・

辛いのも好きですが、トツポギに入れるコチユジヤンも控えめに

しております・・・

そうだ。食生活日記もヘンリー先生にださなくちゃいけないんだった・・・

心身共々先生にはお世話になっております・・・

あ、お風呂お湯が溜まってきた！

いかななくちゃ

## インタビュー

Q : あれ、ユノノ今日って特別な日じゃなかったの？

A : そうなの！あと7分で特別な日が終わっちゃう！

Q : プレゼントもらった？

A : 内緒！

Q : メッセージは？

A : もらったよ。

Q : 誰から？

A : あたつてから！

Q : なにかいいことあつた？

A : あつたあつた。

Q : なにかあつたの？

A : おもしろいこと。

Q : 教えて。

A : 何くれるの？



Q : ん。チョコでいい？

A : ちつ・・・デイル！

Q : 取引成功ね？

A : うん

Q : じゃ、まずなに？

A : Kさんと途中すれ違い、譲って貰って助かって、お辞儀とどうじに、手を振っちゃった。そしたら笑ってた。なんか救われた。焦ってたから。

Q : そうか！仕事スムーズにいったんだね。

A : うん。あそこ切れないからさ・・・

Q : 次は？

A : 次はね。ちやうちやう犬みたいはH君がね。がんとれてきたの

Q : それっていいこと？

A : うん。だって、おもしろいんだもん。

すこんでるけど、ぜんぜんおかしいの。

Q : おもろ顔なの？

A : だから、ちやうちやう犬みたいなんだってば！



Q：ユノノスペイン語わかるでしょ？

A：わかるけどさ。

Q：フェリス・クンプレ・アニョス！

A：ぐらしあすっ

Q：何語で祝われたら嬉しいの？

A：何語でも嬉しいよ。ようは心だよ・・・

Q：想いの人からはなにか来たの？

A：ふんっ・・・こないよ。あいつはもうだめだ。

Q：あきらめたの？

A：あきらめたくないけどさ。なしのつぶてだもん。

なしごれん!!!

Q：ユノノ、だじやれががちやおじさんみたいだね？

A：うるさい・・・

てか、避けるように帰っていったわ。想い人は

Q：知らないんじゃないの？ユノノの大事な日。

A：その「知らない」ってのが、無関心ってことでしょ。

Q：そうかなあ・・・？

A : そうだよ。たぶん

でもさ、ずっとまえに Hugするって言うてくれたのにさ  
あれ、冗談だったんだね？

Q : いやあ・・・それは覚えていると思うけどな。

A : じゃ、なんでしかと？ 昨年だつてスルーだよ

Q : タイミング逃したとか、それと恥ずかしいとか？

A : ふん・・・そりゃあ、人前ではちよつとね・・・

Q : どこでハグするの？ つてことなんじゃないの？

A : そんなのどこでもいいわい！！！！

Q : まあ、いろいろあるんだよ・・・

A : いろいろつてなに？

Q : いろいろさ。

A : ふん・・・何も言つてこないつてことは、脈がないつてことでしょ？

Q : 直接いきちやえばいいじゃん？

A : それができたら、今頃、私はこんな

ぐちぐちしていません！ てか、追えば逃げるしさ・・・

Q : いきなり突進してきたら、だれだつて逃げるよ。

A：いいいいいよ。もういいんだ。

あああ！すぎちやったよ！25日になっちゃった！

Q：ははは！でも、良い1日だったんだね？

A：うん。今まででけっこう良い日！かな。ここ最近では泣かなかったかなー

Q：いままで泣いてたの？

A：ん・・・仕事、きついか、それどころじゃないとかなんか寂しかったり、いろいろ。

Q：そっか。今日は良い夢を見られるといいね！

A：ありがとう！良い夢を見て、それを夢日記にするわ！  
念じて良い夢みて、それを現実にしちゃうから！

Q：そうそう。その勢！仕事がんばってね。

A：ありがとー。あと少しだから、がんばる。

Q：ファイティン！

A：こまうお！

## インタビューV o 1 2

Q：ユノお疲れ。

A：お疲れ様！

Q：今日は仕事どうだった？

A：んー。ぼちぼちね。いよいよ終わるかなって感じ。

Q：みんなに挨拶できた？

A：そうだね・・・ほとんどの人に挨拶できた。お世話になった人には漏れなく・・・

あ！漏れてる・・・一部言えてない。

Q：だれでしょう？

A：うっせーおやじと、ガリガリ君。

Q：ああああ、主役2人じゃん！

A：一人は主役でいいけど、もう一人は脇役です！言っておきますが！

Q：主役をしのぐ破壊的な存在感だよね？

A：それは・・・否めません

Q：でもさ、思い入れがある人にはなんとなく、言いづらいよね・・・

A：ん・・・さよなら、つて、なんか言えないな。でも、ランボーおやじはべつにそのまましれーって、別れても平気なんですけど！てか、どうせこの辺りうろろしてるから、会いたくなくても遭遇しそうだし・・・

Q：愛しの本命君だつて近くにいますよ？

A：ん・・・それはそうだけど、彼の場合は気合いいれて探さないと会えないから、なかなか難しい。

Q：そっか・・・ところで、ユノのプライベートな質問しちゃっていい？

A：え・・・なにかしら？

Q：スリーサイズとか

A：はあ？だれも、そんなの知りたくないんじゃないですか？

Q：だって、ユノが小さいってことしかわかんないじゃん。

A：それで十分じゃないですか？てか、それ違うコーナーでお願いします。

Q：じゃ、なにかの機会に触れることにします。

A：作者、男子ですか？

Q：どう思いますか？

A：わからないからきいてるんです！

Q : 天使です。

A : はあ？ 天使って中性じゃないですか。

Q : じゃ、そういうことで！

A : どういうことですか？

Q : あまり突っ込まなくてよいではないか。

とりあえず読者の皆さんのニーズにお応えしよーかな？ なんて

サービス精神満載な回です。今回。

A : ガールズトークなら気軽に言えますからね。

Q : あー、女子の会話ってえぐいよね？ 男は単純、女は複雑っての

よくわかるわ。

A : えぐいよね？ あたし、だめなんだ。あーゆるーの。

Q : だからこどものときは男子とぼっか遊んでたの？

A : ーんー、いまはおしやべりだけど、小さいときは、あまり

しやべらなかつたの。口より先に手がでるといいうか、体はがんがん動かすけど

口がまわらなかつたのです。

だから、男子という方が気楽だった。あとは、女子でも体育会系の女子。関西からき

た子。



Q：それでたまに関西弁でるの？

A：どうかな？ただ、うちのまわりって関西人が多かったのは記憶にある。

Q：全く遠いのよね？

A：街の真ん中だったから、転勤してくる人が多かったの。だから、地元民はほとんどいなかった。外国人もいた。

Q：インターナショナルだね？

A：当時はそう思わなかった。あー、だれだれちゃん、中国の人ね。だれだれはアメリカと日本が混ざってるのね、とか、そんな感覚。

Q：だから、ユノって外国人みても平気なのね？

A：そうなのかな？べつに顔と目と髪の色が違うだけだなんて思うだけで、なんにも考えてなかったよ。

Q：そういえばお父さんも海外出張とかよく行ってたんでしょ？

A：あ、そうそう。旅行代理店してたから、韓国とか台湾、香港（中国）はよく行ってた。

あるとき、韓国の会社の社長さん連れてきて、一緒にご飯食べたんだけど、日本語話すから、びっくりした。

Q：日本語ぺらぺらだったんだ。

A : そう！で、じーって顔みてたら、お父さんが

「クオンさん、頭の中で考えてるときは、日本語？韓国語？」って聞いてくれたの。

Q : ユノの疑問を代弁してくれたんだね？

A : そう！そしたら、「うーん。両方かな？」

って、社長さんが言うから、すごく興味持った。

どういう思考回路なんだ？って

Q : それでユノは外国語に興味を持ったんだね？

A : そだね。違う言語で考えるってどゆこと？って

Q : じゃあ、韓国が最初の海外との出会いなんだね。

A : そうだね。テレビでは、ブラジルのバレーボール選手がすごく

印象的で、なんかいろんな人種混ざってる！って思ったのが最初。

初めはポルトガル語（ブラジル）をやリたかった。

Q : サッカーもブラジル強いもんね？

A : そうなの。でも、お父さんが、世界共通の英語はやってたほうが

いいよって。そうすると、けっこうこの国でも通じたりするっていうからしかたなく英語はやった。

Q：英語っていつでも国によってなまりとかあるでしょ？

A：そう！イタリア人とアラブ人は、LもR全部Rで発音するの。つまり巻き舌でるるるrってかんじ。

Q：ききとるの大変じゃない？

A：慣れるまで大変だったよ。イギリスとアメリカも違うし。

Q：でも、わかるようになるのと楽しいでしょ？

A：そうだね。発音というよりは、考え方がわかってくるから多少ききとれない言葉でも、いいたいことはわかってくる。

Q：日本語だって、方言違うとわからないもんね？

A：そう！桃田さんなんか、7割なにいつてるか、わかんないの！  
今日も一緒だったけど!!!

でも、最後はわかるから、言いたいことはわかるの。てか、

おかしかった・・・暑かったから、半袖きてたら

& '(\$%& , %& つすね!!!半袖つすか!!!?<br>!!!?

って、驚いてるから、受けたゝ

Q：ユノ、3月なのに半袖だったの？

A：制服全部返しちゃったから、中にきるやつ、半袖しかないの。

Q：風邪ひかないでね？

A：ありがとう。でも、今日、暑かったのよ。

Q：まあ、体調に気を付けて、新しい仕事場でがんばってね。

A：はい！がんばります。

## 有終の美？

ユノは窓の外を見ながら想っていた。

(長かった……)

この1ヶ月、ほんとうに長かった。

途中、原因不明の激痛が襲ってきて

一時はどうなることかと思った。

今日は大分痛みもひいてきたので

急ぎのものでちよいとハードを極めるものもあつたが

担当の人も忙しいから

処理することにした。

ちよつと大変だつたけど、これを私が処理すれば

担当者はわざわざ戻ってくる必要がないから

持っていくことにしよう……

すると担当の福山さんから電話がきて

「ユノさん、もしかして、あの急ぎのもってつてくれた？」

と言うので

「はい、持つてきました。処理完了しました」

と応対すると

「あつ、ありがとーーーーー!!!」

と、絶叫された。

今回担当の福山さんは、もと野球部ということもあつてか

なかなか熱いお人柄。

ちよつとしたことも、大きさに喜んでくれたり

お礼を言われたりするので、その度にぶぶつ、と笑つたりはするが

悪い気はしない。

そして、合流して書類などを渡された時に

「俺、あしたから連休なので、今日で最後かな?」

と言われた。

「はい。大変いろいろとお世話になりました。ありがとうございました。」

と挨拶をすると

「ほんつと、助かった!いや、ほんと助かった!ありがとう!」

また体調治つたら、戻つてきてね!」

と、笑顔で挨拶してくれた。

もう、この仕事に戻ることはないだろうけど、ここの人達は本当に良い人ばかりだった。

たぶん、そうじゃない人もいたのかもしれないけど

今となつては、そんなことも気にならない。むしろ、なにか困ったことがあると

みんなよつてたかつて、助けてくれたから。

感謝してもしきれない。

ありがとう。ほんとうにありがとう。

私の方こそ、ありがとう。具合が悪くなつて、迷惑かけてしまつたりしたのに

感謝してもらえて嬉しかった。

職場は近所だから、みんなとはすれ違つたり、偶然あつたりする可能性はあるから

そんなに悲しくない。

ただ、あちらの方からそうやって、はなむけの言葉、みたいな挨拶をされると

ちよつと照れくさかつた&うるうるしちゃうよね。まあ、硬派の運動系で

熱いひとだから、律儀なんだろうね。

できれば、あつさり、じゃね〜お世話様でしたっ！つて、あしたは

しれーしれーと、何事もなかつたように、ふつーに、お疲れ様でしたっ

と言つて、帰つてきたいものだ。いや、そのつもりだ。  
改まったのは苦手だ。しやちこばつてしまふ。

犬プリさんにも、ちやんと挨拶できるといいんだけど。

最近はすれ違いでなかなか顔を合わせられなかつたから・・・  
ユノの業務も残すところあと1日となつた。

最後まで気を抜かず、しつかりがんばるんだぞ！ユノ！



## ドクターヘンリーとの問診電話

(Hはヘンリー博士、Yはユノ)

H：ユノちゃん！久しぶりだね！仕事どう？

Y：はい、初日は緊張しましたが、子供たちの顔を見たらとても気持ちが上がりました。

H：肉体的には楽でしょう？

Y：そうですね！朝起きて、筋肉痛がないのでびっくりしました。

H：やはり以前の業務は、肉体そのものも酷使し、さらに緊張を強いられていたため、筋肉痛がひどかったようだね。

Y：そうですね・・・今も、こどもから目を離せないのです、緊張感がないわけではありませんが、会話ができる年齢ですから、乳幼児の監督よりはずっと緊張しないようです。

H：他の先生たちとも連携取れる？

Y：はい。指導してくれる女性の先生と、あとは男性の先生です。どちらもてきぱきしていて、すばらしいなと思いました。

いろいろ勉強になります。

H：なにか気になったことは？

Y：それが・・・先生・・・

H：どうかした？

Y：ええ・・・ちよつとまた偶然が重なってびっくりしたんです。

H：ほう・・・じゃ、会話を録音してあとはデータをまとめるからね。

Y：はい。お願いします。

H：用意はできているよ。どうぞ。

Y：はい・・・まず、一番最初に会話をした子が、前職で担当だった人と

同姓同名だったんです。ニックネームまで一緒にびっくりしました。

よくある名前ではないんですよ・・・苗字は割と多い方ですが、フルネームだと

ありきたりではありません。

H：ふむ。それから？

Y：それから・・・なんと、例の彼のプロジェクト・・・それと

まったく同じお仕事をしている親御さんがいたようで・・・子供との会話でわかり

ました。

あとは、男性の先生が、犬プリと同じ種目の運動部だったんです・・・ちよつとギクッ

！としました・・・まあ、体型から納得はしましたが・・・

H：んー。なるほど・・・

Y：他にも、こどもたちとの会話が、以前、私が夢にみたことと同じだったり・・・スタッフとの共通の知り合いがいたり・・・

世間は狭い、ということと片づけられることなのかも・・・とも思いますが。

H：子供たちとの会話を夢にみたことは、やはり、君には未来を予知する能力があるのかもしれないね。それが夢に出る。リラちゃんもほぼ同じだね。二人の能力の出方が違うだけで・・・

Y：そうなんでしょうか・・・

H：うん。君がその職場に入るのは決まっていたんだね・・・

また、気になる彼との出会いも、意味のあることだったんだね・・・

Y：そうですか・・・

H：気になる彼とはその後会ったの？

Y：いいえ。会つてもいないし、連絡もくるはずないですし。

ただ、他の人たちとは、通勤途中で会って、めいっぱい

手を振って笑顔で挨拶交わしました。だから、ちつとも寂しいという

感じはありません。

さつきもいつもお世話してくる人が、用事があつて寮近くまで来てくれたので、数分立ち話しました。

H：そうか・・・前の職場も本当に人間関係に恵まれていたね。

Y：そうなんです。本当によい人ばかりで、感謝してもしきれません。

H：うむ。ユノちゃんも新しい仕事で疲れているだろうから、

今日はこのぐらいにしておくね。また、時間があつたら、ゆつくり

こつちで話をしよう。リラちゃんも一緒に来れるようだったら連れておいで。

Y：はい！ぜひ！

先生、今日はありがとうございました！

どやった？

「姉、おなかすいた〜」

「お、リラっち、なんか久しぶりやね」

「うまいもん、食わせて〜」

「いいよ。今日は材料ないから、外食しようか？」

「いいね。和食バイキングがいい〜」

「リラっちは、本当に和食好きだねえ〜」

「だって、洋食嫌いだもん」

「めずらしいお子様だ」

「もう、お子様じゃないぞ！」

「あはは、失敬。めずらしい若者だ」

「ほないこか」

「いこういこう」

2人は近くの和食バイキングに足を向けた。  
バラエティに富んだ和食物菜が店内中央に

所狭しと並べられている。

ユノとリラは、おかずを好きなだけ皿に盛って

自分たちのテーブルに戻った。

「姉、仕事どう？」

「え？楽しいよ。まあ、責任があるから、ただ楽しいだけじゃ

だめなんだけど。やっぱり子どもが好きだから、正直楽しい。

そうそう、TTSとか詳しい子がいてさ。男子だけど。話し盛り上がったよ」

「えーじゃ、ジョヨンのことも知ってるの？」

「そう。その話しも出たよ。文化事情にも詳しくてさ」

大統領の話まででた」

「すごいねー！」

「そう。話してて、飽きないね。子どもは。他の子は進撃の巨人の

話しとかもでてさ」

「姉、しってるの？」

「いえ。存在しか知りません」

「ははは！だろうね。姉は、犬夜叉止まりじゃね？」

「止まりもなにも、ワンピースだってぎっくりしかしりませんし

デイープな話題可能なのはK—P—O—Pとサッカーの話題ぐらいですよ。あ、今日は車の話でも盛り上がったな・・・コナンはふつーに

わかりますしね」

「ま、ちよいちよいあたしが教えてがえるよ。リラ先生とお呼び」

「ちよつと会わないうちに、エラソーになったね」

「ふん！偉いモン。あたしや可能性大だから、がんばるんだ。」

簿記だつてやるし。理系だけじゃつぶしがきかないからね。

簿記だつたら、長く使えるしき。手に職をつけて女子力アップ」

「ほお、リラ先生一丁前なことをお言いだね。」

でも言い得て妙だ。さすがあたしの妹」

「ほつほつほ。若いうちにやることやつとかないとね！

スキル有れば年とっても骨董品になりうるやん」

「リラ先生、ちよつと見ない間に、ボキヤ増えたね」

日本語も正しく使えるようになってるやないかい」

「そうでしょ。だつて、勉強したもん。中森先生に注目してほしいから

ガチでやった！」

「まあ、そういう邪な目的でも、実になればよろし」

「そういえば、ヘンリー先生のところには行ったの？」

「忙しくて、行けなかったから、電話で問診してもらった。

今度はリラもおいでって」

「そっか・・・アタシはとりあえず、これといって

不思議なこともなかったけど・・・先生に会いたいから行く！」

「うん。私はまた不思議なことがたくさんあった。

最初に会った子がなんと、前の職場の担当の人と同姓同名で

ニックネームも一緒だった。そうそう、その子なの。K | p o p

詳しいってこ。だから、たくさん話すんだよね・・・」

「うおっ、それはビックリだね」

「うん・・・あとね・・・今度のこちらの担当の方が

犬プリと同じ部活だったとかね・・・もちろん彼ら同級生とかじゃないけど」

「ふえっ！結構すごい偶然じゃね？マイナーとまではいえないが

メジャーでもないよね？」

「んー、どこの学校にも一応あると思うけど・・・

あとは、ある花のアイテムがさ・・・ひらめいて、それを

遊びに取り入れてただけ、そしたらそれが犬プリの報告書にも



あつたつていう・・・あとからわかったのね。あることで  
「え、!!!なにそれー。」

「あとは、人数カウントしてると、たまに一人多かったり・・・」  
「え!!!それつて、ホラーじゃないつすか、姉!!!」

「まあ、こども居るところつて、必ずそういうのあるからさ・・・

前も幼稚園の教育実習してたら、足をつんつんつてやられて  
振り向いたらだれもいなかったとかあつたから・・・」

「ぎよぎよぎよ！姉！怖くないの？」

「んー、怖い怨念つぼいのとかは感じないから、怖くないよ」

「うわつ、姉つてメンタル鋼？」

「いやあ、強力ゴムつてとこでしょうか。弾性に富んでおりますんで

鋼のように硬くはないが、分厚いゴムの様に、攻撃は吸収し、自分にも  
衝撃の痛手はあまりないという・・・まあ、サンドバックの様かな」

「姉・・・もうしわけございませんでした。あたくし

まだまだ修行が足りないようございます。」

「はははーリラっちはこれからでしょ。ゆる〜く、一歩ずついきなはれ〜」

「御意ー！」

## やっぱり一人多かった

仕事をしていると視線を感じるので

振り向くとだれもない。

そんな事が続いた。

たまたま桜子先生と夜一緒に

ご飯を一緒に食べた。

その時に桜子先生の方から話を切り出してきた。

「ねえ、ユノ先生、なにか感じますか？」

ユノはなんの躊躇もなく答えた。

「あ、いますよね。いつも視線感じてましたよ」

「!!!男ですか女ですか!!!」

「.....女.....かな？」

(実は一人じゃない。2, 3人いる)

「前から、なんかやだだったんですよ.....がた!つて音もしたり

他の先生も聞こえたらしいんです。」

桜子先生は腕をさすりながらこれまでに起こったことを話してくれた。

「……いるはいると思うけど、悪さをするとかそういうのは

感じないから、大丈夫だと思えますよ」

そう答えながらも、ユノはちよつと鳥肌が立った。

やはり自分が感じていたのは、単なる錯覚ではなかったようだ。

前の仕事をしていたときも、行った先で、感じることはあった。

あるFというマンシヨンだったが、エレベーターに載っていると

正面のガラス戸から人の顔が見えた。

待っている人ではない。顔だけが見えたから。

その話を前にリラにしたことがあった。リラはそこに行きたい！というので

連れて行くと、「いるよね……」

と、言っていた。

「ひとりじゃないよね？」

と、リラの質問にユノは

「うん。ひとりは男で一人は女。こんな感じの人」

見た人物の特徴を説明すると、リラも

「そう！メガネかけてた男のひとと、女の人は髪の毛が肩ぐらい」

リラが見えた映像とユノがみた映像は全く同一だったようだ。

たまたま次の日、あのランボー・蓑上が話していたことをきいて

ユノは少しぞつとした。

「あのさー、今きた人いるでしょお？あの人の奥さんがさ……」

あそこから……なのよ。ほら、前に○○部長が落ちた……」

(それだ。その人達だ。私とリラがみたのは)

それにしても、この世の人でない物体は

あちこちにあるようだ。

おそらく、みんな見えていないだけで、至る所に

ふつーに蝶々が舞うようにあたりに飛び交っているのかもしれない。

それが見える人と見えない人がいるだけで

この世の中は肉体のない抜け殻が浮遊しているのかも

考えるのは異常なことではない。

これまでは未来や過去についての不思議な体験を

ドクター・ヘンリーに報告していたが、

こうした霊的な体験についても、ヘンリーへの報告事項だと判断したユノは

とにかく事細かに漏れなく、見たり聞いたり感じた事象を

まとめて次回のMRI撮影時に提出しようかと準備を始めたユノだった。  
あの世、この世、前世、現世。今自分がいる世の中以外にも  
違う世界があろうことは想像に難くない。

## 溺れる夢

(あつという間に3週間過ぎた。ひととおり慣れた感はあるけど)

今週末と来月頭は一人で担当しなくちゃ、だから緊張する・・・  
なにせ責任重大だからね・・・人を預かるということは。

前職も大変な重責で押しつぶされそうになったこともあつたけど

みんなからは、あまり深く考えるな！って言われてた・・・  
もちろん、緊張しすぎはいけないけど、だらけ過ぎもいけない。

なかなか難しい。どんな仕事も責任はある。

たとえ、パートやバイトでもお金をいただく以上はプロなんだから  
責任があると思っていままでやってきた・・・

ヘンリー先生にも、ストレスが夢にできることもあるって言われたけど  
今回の夢もそうなのかな？)

ー先日見た夢(4月18日)ー

土手を歩いている。早く進まなければいけない。

仕事に行こうとしている。すると目の前にレスキューがいる。

え？川に誰か浮いてるの???生きてる????

土手にも数人・・・3人かな？横たわっている・・・

死んじやつてる???うそ!!!そんな・・・

え？動いた!!頭をあげている・・・よかった！

土手に上がっている3人は助かっているのね。

すいません・・・そこを通ります

(道幅が狭いため倒れている人を跨ぐ形で前に進む)

大丈夫・・・蹴ったりしなかった・・・レスキューの邪魔にも

ならなかった・・・よし、急ごう！

—— (目が覚める) ——

(なんか、衝撃的な夢だったな・・・)

レスキュー隊員も助けられている人達も誰も知らない人だった・・・

土手の向こうにはなにやら丸いタイムマシンみたいな

機械があつて、そこに入っていこうとしていたんだ。

どういう意味だろう？ヘンリー先生はきつと解説してくれるだろうけど

気になるなく・・・悪い意味じゃないといいけど)

先日、ユノはリラの懇談会に出席し、そこでもまたサプライズがあつた。

役員が壇上で紹介されているときに、見覚えのある顔がそこにあつた。

(え・・・あれって・・・志摩ちゃんじゃない？昔近所に住んでた・・・)

「よろしくお願ひします。山田志摩です」

(やっぱり!!!)

壇上から降りた見覚えのある女性を見ると、女性もユノに気が付いた。

「あ!!ユノちゃん!!(あとでねっ)」

会が終わるとすぐに、先程の女性がユノに近づいてきた。

「ユノちゃん???どうしてここに??」

「はい。リラの保護者で出席しました」

「え?リラちゃんって、まだ赤ちゃんだったよね?もう高校生?」

「はい!花のJKです」

「うわあ・・・時間経つの早いね。私の娘も同じ年よ。」

B組なの。リラちゃんは?」

「A組です」

「あら!進学コースじゃない!優秀なのね!」

「いえ・・・ただ、理系なんです。」

「そういえば、小さいとき、機械いじってたよね?」



あ……でも、あれユノちゃんじゃない？」

「はい、私が機械系が好きで、リラは生物系が好きなんです。

獣医になりたいらしく。」

「そうだそうだ。まだちっちゃいのに、いつも犬と戯れてたわね！」

「はい。そうなんです。」

「今度、お茶しましょう！リラちゃんもいつしよに！」

「これ、連絡先。いつでも電話して！」

「ありがとうございます！私の連絡先も渡しておきますね！」

「まあ。ほんとに奇遇だわ！リラちゃんにも会えるのを楽しみに

してるわね!!」

2人は笑顔で別れた。

(それにしても、びっくりだ。15年以上も前の知り合いに

こんなところで偶然に会うなんて。)

つくづくユノとリラには『偶然』が多いことにいつも驚かされる。

突然、リラからのメッセージ。

「姉!!!ねえ!!!私のロッカーの番号

犬プリの下の名前なんだよ!○○6。ビックリだよ!!!」

「え!!!てか、私もびっくり。志摩さんが懇談会にいたんだよ!」

「志摩・・・さん?」

「そっか。リラは覚えてないよね。昔隣にいて、リラのおむつとか

替えてくれたんだよ。そのお嬢さんがリラとおなじ学校なんだよ!

B組だって。」

「なんじゃこの偶然シリーズ。博士に早速報告だねえ」

夢報告とこの偶然の出来事を記し、ドクターヘンリーへの

提出物を準備するユノだった。

## GW

あつという間に1か月が過ぎた。

ユノは久しぶりのGWをゆったりすごそうとしていた。

カレンダー通りの休みとは言え、こんなにゆつくりできるのは

数年ぶりだ。これまではGWも仕事をしていたため

ゆつたりのんびりした記憶がない。

今月はドクターヘンリーの検診を受けられなかったため

5月の休みの土曜日か、あるいは平日の午前中に訪問し

夢日記提出とMRI撮影&受診を行う予定だ。

(あくなんだかんだで、1か月が終わった。引き継ぎの先生も

もうお辞めになったし、これからが本番だ。本腰いれていこう。

GWは充電だな

まずは車磨いて、部屋の片づけして、たまつてた本読んで・・・

まったりゆるゆるプランでエナジー補給だな。リラも部活や勉強で

忙しいようだから、いっしょに遊べないし。)

来月のシフトはまだできていないため、来月の予定はまだ未定。  
ただ、暦通りの休み故、GWは休めるようだ。

(そういうえば、ここ数日夢、みてないな・・・いや、

なんとなく見たような気がするんだけど、朝おきるとすっかり  
忘れてる・・・だから、日記には記すことができない。

こどもと全力で遊ぶと結構疲れるからね・・・とはいっても  
シロイヌサスケのときの疲労度と比べたら雲泥の差だわ。

よくやってた・・・自分でもびつくりする)

ユノは子供たちに筋肉自慢をしたところ

ほぼ全員の男子と腕相撲をするはめになった。

結果は全勝。小学生男子にはまだまだ勝てるようだ。

女性の先生たちにも圧勝。余裕の全勝で得意満面になっていたら

男性の先生に挑まれた。

え・・・いくら痩せているとはいえ、男子・・・

サスケでは女性含む全敗だったからな・・・

Ready GO!

子供の掛け声でスタートしたが

ほんの数秒で、初黒星……

「よかつた〜！ユノ先生に負けたら

毎日筋トレしなくちやつて思ってたんですよ〜」

（く、くやしい……。サスケ辞めたら

筋力落ちちやつたみたい。……にしても、やつぱ

成人男子には勝てないのか!!!）

「おいおい、ユノちゃん、へんなところで負けず嫌いなものね？」

（くぬう……。今日から懸垂10回、腕立て20回のセット

毎日こなしてやる……）

ピン！

（あ、リラからだ）

「あねえ〜CDの音声mp3にしてよお〜」

「いいよ。」

「何してたの？」

「え？筋トレ」

「はあ？もうサスケ辞めたのに何で筋肉要るの？」

「私のライフプランなの!!鍛えればパネになるし

強靱な体力は病気も寄せ付けない！」

「そういえば、インフル流行ってんだよ。今、うちのがっこ」

「しってる。PTAでもそう言われた」

「姉は超丈夫だから、インフルかかんないよね？」

「これでも子供の頃は病弱だったんだぞ。」

大叔父がお医者さんだったんだけど、いつも薬もらってたんだ」

「T大医学部だったって人？」

「そう。すぐくやさしくて、いいおじさんだった」

「あたしもT大目指してんだ。理学部」

「ふえっ！目指すのはいいけど、あんな難関なところ・・・」

「難関だからやりがいがあるんだよ。今、姉にお願いしたmp3も

英語のリスニング。あたし英語苦手だから」

「ありがちだー。理系にありがちな、『英語苦手症候群』。」

ま、ぼちぼちがんばんなさい」

「うん。でも、ヘンリー先生のところにはいきたいから

行く日きまつたら教えて！ちよつとききたいことがあるんだ・・・」

「ん？なにか、気になることでも？」

「ん・・・ちよつとね。たいしたことじゃないけど」

「わかった。決めたらすぐに教えるよ。」

「じゃ、m p 3 送信待ってまゝす」

「了解」

ユノはP Cをサスペンドにすると、おやつを買いに近所のコンビニまで出かけた。

## 受診前準備

(えっと、保育日誌まとめなくちゃ。

今週もいろんなことがあつたな。とりあえず連休前

無事に終わってよかった・・・

ほんと、今年はのんびりできてるな

昨日みた、ネット動画は感動ものだった

記憶障害のある旦那さんのお話。

朝おきると全てが消去されてしまっている

つまりHD全削状態

だから、日記を付けているのだそうだ

奥さんはいかがいしく世話をして、なるべく

たくさん話しかけて記憶を掘り起こす作業を

手伝っている・・・

記憶はないけど、奥さんと一緒にいるんだよ・・・



なんかさーなんかさーなんかさー  
記憶がなくなっても好きって

なんかさーなんかさーなんかさー  
愛だよね・・・魂からの

そういえば私もさんちゃん没後  
そこからサスケまでの記憶がなくなっただった  
なにしてたんだろ？って

さんちゃんが亡くなってからサスケに入るまでの  
記憶がない・・・

それって、解離性健忘で一過性だったことらしい  
それまでは一部記憶がなくなるって  
どういうこと？って思ってた。

前の職場で、階段から転落した人が  
頭を打って1ヶ月ぐらい？かな。入院してたけど  
その時の記憶がないんだって

それが信じられなかったけど  
自分もまさかそうなるなんて

驚きだったけど

ヘンリー博士との会話で

事故後の記憶が無いってことを相談したら

日記を勧められた

だから、今はデータを毎日入力している

表計算シートを日記形式に作って

見たいときにいつでも時系列ですぐにたどれる

さんちゃんの死は相当ショックだったんだね

あの後どうやって暮らしてたか

何をしていたか覚えていない・・・

でも、サスケでのつらかったことは不思議と覚えてる・・・

きつといいこともあったから

心はそれほどダメージを受けてなかったのね

なにより好きな人と会えることが

嬉しかったんだらうね

私も記憶がなくなっても

好きな人のことは

覚えているのかな・・・

さて。保育日誌とGWあけの活動の準備しなくちや。

お茶してからゆつくりまとめよう。

チャルチョコパイがあるから

それと一緒に

美味しいんだよね！

お餅の中にピーナツクリームが入ってて

チョコでコーティングしてある

通販で買えるから

買いだめしちやった

今回、掃除したら

さんちゃんからもらった小説いっぱいできてきたわ・・・

捨てるのはもったいないから

リラにあげよう

読んだらブックオンに持っていけば  
いいからって教えてあげなくちやね  
ちよつとしたおこづかいになるよ

それにしてもリラはJKだけど

中学生は修学旅行前に

リア充率上がってるって・・・

そんなもんだったか？

ってか、あたし中学から女子校だったから

わからんな・・・

その辺りのリア充事情・・・

それで受験受かるって

みんなすごいよね・・・

私はムリだー

好きな人いたら

そればかり考えちゃうから

受験なんて手に着かないよ

なにはともあれ

リラも楽しそうに学校通ってるし

私も肉体的負担はほぼ100%に近く

減ったから、快調。

たぶん、MRIもなんでもないと思うんだけど・・・

いちおう定期検診だから、いかなくちやね

5月中にはいかなくちや

最近は眠りが深くて

夢はみているけど、朝起きると覚えていない

そのうち脳にHD直結させて

夢を記録させる装置とか

できちやうんだろうな

それって、おもしろいけど怖いような・・・

あ・・・見た気がする・・・

犬プリアが出てきたような・・・

内容はわからないや

ドーナツ？

んーんーんーなんだろ

一応、細かいことでも記録するように言われてるから追加しておこうつと

あ、あと、ゆうべ夜の10時頃急に

悲しくなつたんだっけ・・・意味わからん

テレビみてたわけでもないし、なにか読んでたわけでもない  
サイトのニュース記事みてたんだっけ？

別に悲しい記事とかじゃないのに

それも入れとかないとね

なにかの事象に関連することかもしれないし

あ、お湯が沸いた。

お茶いれよーつと。

## マカロン

最近是不規則シフトでちよつと寝不足だったユノ。

近くのスイーツ屋さんで買ったマカロンをやけくそに頬張る。

すると、ヤツが現れた。

「オレのこと嫌いなら嫌いって言ってくれ！」

（はあ？それ、こつちのセリフだがや）

「俺の下の名前に『さん』付けで呼べ」

「○○さん」

「そうだ、もう一回！」

「○○さん！」

（笑顔）

「ねえ、戻ってきた！私のこと嫌いなら嫌いってはっきり言つてよ！」

.....

あれ？またしても夢だ・・

てか、ほとんどハグ状態で腕つかんだら  
笑顔で拒否ってたな・・・  
なんじゃそりゃ？

ところで来月からシフトが変わるし

仕事も増えちやうんだよな・・・

従ってヘンリー先生のところ行く時間は

やっぱりむずかしいなー

電話報告もアリだけど、今回

脳MRIとらなくちゃだから、行かないとだめなんだよね・

困った困った!!!

どうしよう。

まだシフトも出ていないしなあゝ

出てから考えるとするか。

夏に向けていろいろ対策考えないとな。

そういえば、夏と言えば

サスケ中は、夏が過酷だったなあゝ

瞬間冷却スプレーかけて



半分遊びみたいなかんじで

かけて、きやつきやしていましたな

「オレの遺産を受け取ってくれ」

とか言ってた〜

イミフ

最近、仕事の買い物があるから

あの辺り、しよっちゆう行くんだけど

そこ通るたび思い出すよね

でも、あの仕事には二度と戻らない

ユノ×1000乗の

バージョンアップじゃないとムリです

もう筋力落ちちやったから

今は自首筋トレしてます

そうそう、不思議な出来事の解明については

ヘンリー先生のお手伝いがなにも出来ていなくて

申し訳ない限りだな・・・

リラも勉強は楽しいとかいって

いろんな勉強サークルやったりしてるけど

不思議な夢はみてないみたいだし・・・

あれねロツカーキーが名前だった件ぐらいかな。

それについてもききたいわ

とりあえず別枠話の番号も

本人所有のなんだけどね・・・

仕事については

これから先、どうなることやら・・・

死ぬまで修行だ!!!

若手に囲まれ、活気はあるものの

あたしもまだまだ修行中の身だすからに

精進致します。

とりあえず仕事オンリーで

そこに専念し、あとは何も考えないことにする！

こども達が大事だから、そのことだけ考える！

今日も癒されたな。

ほっぺがぶにぶにしてかわいいから

思わず、ぷにぷにしちゃったよ

ほんと、こどもの近くで空気吸ってる

癒されるんだよね

同僚の先生ともそんな話してて。

子供好きだからこの仕事楽しいよねって。

言ってる先生もほっぺぷにぷにしてて

かわいいんだけどね。

事故後、コーヒー断ちしてたんだけど

最近、3日に1度ぐらいセオンコーヒー飲んでます。

飲んだカップがいるからです。

工作に使うのです!!!

さて、これからの指導計画

考えていかねば……

年間の指導計画つくろつと。

ヘンリー先生、時間必ず作ります。

もう少々お待ちを……

## 第2部 状況転嫁編

### 悲しい連鎖

6月に入っているんなことがあった。

ネットラジオから「等身大のあなたが好き〜」って曲が流れてくる。

平日なので、リラに会えないため、しばしのチャットタイム。

「リラ〜!!魚(ぎよ)、死んじゃった・・・」

「あらら」

「朝、ひっくりかえってばくばくしてたから、とりあえず水半分替えて

塩水浴にしたら、一旦持ち直したんだけど、仕事から帰って水槽みたら逆立ちのまんま、息絶えてた・・・」

「おーまい・・・」

「金のおときは、動揺しまくりで、どうしようどうしよう

職場のご近所さん呼ぼうか?なんですか?そんなことで呼べないし  
ああああああって、どう処理しようかオロオロしちゃったけど

今回はなんかかわいそうだった・・・外のプランターに埋めて花おいといた」

「結構長生きしたよね？」

「うん。リラ乃信が小学校低学年のときに、縁日ですくったやつだからもうかれこれ10年近くになるよね？」

「地震で水槽割れて、それでも生きてたのにな〜」

あんどき、さんちゃんもオロオロしてたよね？」

「そうそう、金も魚もまだびくびくしてるのに

葬ろうとしてたよね？それで、リラがさんちゃんにしてんの！って

突っ込んだよね？」

「そう!!で、姉が冷静に淡々と金と魚をセーブしたんだよね。」

「さんちゃん、水槽の破片をなんとかしなくちゃって

焦ったんだよ。君が踏んづけちゃうんじゃないかって。

金魚より、リラの信のこと心配してくれてたよね。来るなく

来るんじゃない!!足をけがするから!!って」

「そういえば、さんちゃんの命日まで2ヶ月ぐらいじゃない？」

「そうだね。金はおじいちゃんが亡くなる2日前だったよね。」

お彼岸のときだったから、そういう時に亡くなるのは崇高なことなんだって友達が言ってたっけ。

思うに、リラ先生、あなたが水槽を掃除していたときのほうがよかったみたいだよ。私なんかダメだったんだね。きつと。さすが動物先生だ」

「んー。姉さ、雑ってか、仕事早すぎるんだよ。金魚の掃除はゆつくり丁寧にしなくちゃね」

「ごめーなーん。私が悪かったです。てか、児童にもきいてみたら、金魚ってけっこうストレスたまるらしいからあまり掃除してもだめなんだって」

「あー、それはわかる。加減がむずかしいよね」  
「そうなんだよ！金るとき、ほったらかしすぎて

てか、前の仕事忙しすぎて、掃除できなくなつて、それで死んじゃつたから、今回まめに清掃してたら

水槽内の岩に頭突っ込んで、でてこなくなつてき。  
なんか拗ねてるかんじで」

「おもしろいよねー」。金魚なんて感情あるんかい？

って思うけど、ストレスとかあるんだよねー。

生き物だよね。だから私は獣医になりたいのだ！」

「はやくなって、金魚に困ったときは助けてください。」

ってか、もう生き物飼わない？」

子供の時にウサギとかハムスター買ってて

死んじゃったときに超ショックで、それから絶対

生き物は飼わない！って誓ったのに

君が縁日ですくってきちやうから」

てか、小・中学校までは君が掃除してたから

仕方ないな〜って感じだったけど……」

「まあ、命あるものは、いつか果てるので

仕方ないですな……」

「そうですね……私も、心のやりどころなくて

去年の金死別のときは、車もってきてくれた、まつさんに

金魚しんだ〜!!!って、思わず言っちゃったもんね」

「はっはっは！まつさん、困ってたんじゃない？」

「んー、覚えてない……もしかすると、困ってたかな？」

なぐさめようがないってか・・・」

「まあ、姉もここんどこ、いろいろ大変だったからねー」

また、忙しくなるから、もう魚の世話をしなくていいよー

って、ことじゃないかな」

「そう・・・かな・・・。そうだね。そう思うことにするよ。

児童も金魚飼いたいって言ってたけど、申請してみるか。

みんなで飼育したら楽しいもんね？」

「そう。今頃、金も魚もさんちゃんとかいって、

ひらひら泳いでるって」

「酒持って？」

「そうそう。じーちゃんも一緒に」

「なんでも前向きに考えなきゃね！」

「うん わたしもがんばるでよ」

「お、もう。こんな時間だ。リラの信、お休み」

「おやす〜！」



できるかな？

6月に入ってから、フルタイム出勤になったため  
ドクターヘンリーに近況をメールで報告するユノ。

【件名：ユノです】

To : henry@xxx.com  
from : yuno@xxx.com

—本文—

ヘンリー先生

ご無沙汰しております。6月からフルタイム出勤となり  
10時から午後7時半までの業務となりました。

自宅から約1時間かかりますので、平日は検診に伺うのは  
非常に難しい状況です。

土曜日は仕事があるときとそうでないときがあり、  
職場も家から20分のところでの業務と

たまに、いつも行っているところでの業務があります。

ですから、土曜なら伺えるときもあるのですが、

先生の診療所は土曜日の午後はお休みですので、今回

MRIが本来の目的でありますから、なかなか日にちが合いません。

とり急ぎ日記のデータだけをお送りいたします。

ご確認いただけましたら助かります。

7月の後半から8月の後半までは夏休みですので

早朝から夜まで開所しています。シフトはまだわかりません。

早いシフトの場合、7：30から午後4：30までとなりますので

その場合は5：30頃伺えるかと思えます。

伺えるときは、前もって電話連絡いたします。

いろいろご不便をおかけいたしました。

大変申し訳ございませんが、何卒宜しくお願い致します。

ユノ

【添付文書：夢日記5～6月.doc】

5月某日

● あれ？笑ってる。そうか、仕事中か。

「なんか、じーつとか、陰から見つめられてて

ずつとあなたを見てました、とか言われたらぞつとする」

「それじゃあ、今日は猛暑日で溶けてしまいそうだから

じーと、みつめてあげる。

「背筋がぞぞつとして涼しくなるぞ」

● 仕事では几帳面だと思われてるけど

自分の部屋はきつたねーんだよね。

君に見せたいよ

(見たいよ)

● 洗車にはこだわりがある。ぴっかぴかにするぞ。

一緒に洗車する？

(するする！)

6月某日

● あれ？心の住人だ。なんで勝手に住み着いちやってるわけ？

だれも許可していないのに・・・

いつのまにかちやつかり人の心に住み着いてる。

おいだそーとしても、どかんと居座って、出て行つてくれないんですけどー

てかき、なんで普段はいじわるとか

してたわけ？

ずつといじわるしたよね？

けつこうひどかったよね？

ね？

なんでだろー？

なんでだろー？

ななななんでだろー???

つて、懐かしい・・・

●金魚・・・

ひらひら泳いでる金魚。

あれ？金がいる・・・最初に死んじやつたのに。

あつちは魚かな？

ちろつと長いのが金で、お腹がちよつとぽつてりしてるのが魚だから、あつちが魚だな。

毎日なにげに癒されてたな

まだ水槽に水入ったままだけど、お休みの日

処分しなくちゃ・・・

ちと、ブルーな気分。

●できるかなのゴン太くん、大好きなんだけど

できるかなっていつまでやってたんだっけ？

最後にのっぽさんがしゃべったんだよね？

その最終回見てないんだけど・・・

うごうごゴン太くんっていう、デスクトップアイコンが

あつただけど

あれ、好きだったーーーー

できるかな の工作が大好きで

今、それ私やってるわーーーー

楽しい。工作はほんと、楽しい。

1990年までやってたのか・・・

じゃ、今の子は知らないよね？

できるかな、はてはてほほく

さて・・・7月から私がやんなくちやなんだけど

できるかな・・・

(今回、そのまま圧縮しないで送ります)

【Re:ユノです】

To: yunoo@xxx.com

from : henry@xxx.com

ユノちゃん。メッセージありがとう。

正社員になって忙しいそうですね。無理しなくて

大丈夫ですよ。右手のしびれが気になるって言ってたけど

おそらくそれは、筋肉痛からくるものだと思うから、あまり

心配しないように。ちよつとした痙攣のようなものだど

思います。

脳とは関係ないと思います。

それから、診療は社保がきてからの方がいいから

焦らなくていいからね。おそらくまだもらっていないでしょ？

今回、急に正社員になったから、おそらく社会保険の発行はすこし遅くなるんじゃないかと思います。

とにかく、焦らなくていいから。

それでは、またお目にかかる日を楽しみにしています。

季節柄ご自愛ください。

ヘンリー

## プチ修学旅行

学校帰り、電車に乗り継いで

ユノの職場に向かうリラ。

〈文字メツセージ〉

「あね？今学校オワタ」

「ええええええ？13:30に着くって

言ってたから、もう駅に迎えにきてるけど？」

「悪い、ごめん、ゆるして、(号泣のスタンプ)」

「この駅前は、車長く止めておけないから

ひとつ前の駅で降りて」

「わかりました・・・ごめんなさい(うるうるスタンプ)」

(まあ、どうせ買物しようと思ってたから

丁度いいや。リラが着くまで仕事用の買物してよーっと)

〈駐車場〉

電車を眺めるユノ。



(なんか……この光景見たことがある。いつ、どこでだったか……)  
〈文字メツセージ〉

♪ぴろん

「あね、今、西宮寺駅」

「次の次だから、間違えないで。飛合駅ね。」

駅降りたら、正面に止まってるから」

「りよーかーい」

(西宮寺駅ってことは、あと10分ぐらいかな。その間

小説でも読んでいようっと)

フフォン……電車が駅構内に進入してきた。

(あ、あれだ。そろそろ降りてくるな)

駐車場から、駅の階段が見える。紺色の高校の制服をきた少女の姿が見えた。

ユノの車を見つけると、小走りに車の方に近づき、助手席のドアを開けた。

「あねー……、ついたー……」

「ほれ、にぎりめしと惣菜だよ。おたべ」

「うわあーよかったー……。お腹ぺこぺこだったんだ」

「上井亭のおにぎりだから、おいしいよ。日帰り温泉いくから」

車の中で食べて。10分ぐらいで着くから」

「お、高級そうだね」

「うん。手作りだからね。」

「では、いったきまーす」

ユノとリラは、駅から数十分のところにある温泉郷へと向かった。

「うわあく!!!せんちかワールドみたい!」

「そう言えば、そうだね。なかなかいいよね」

「どこいくの?」

「リラの信が遅れてくれたおかげで、大きいところはもう

閉まってしまったので、ちょっと奥地の方にいきます。

そこは、ほかの半額料金で入れるし、夕方まで受付てるから

そこ行くよ」

「うおっほーい」

しばらく車を走らせ、木々に囲まれた細い道に入っていった。

温泉建物の手前に小さな池がある。

「うわ!鯉がいる!!亀も!!!あ!寄ってきた!!」

「餌ほしいんだねー。パンくずもってくればよかった」

「今度来るときは、パンくずもってこよう！」

円を描くように静かな水面に水の輪ができていた。

「いいねーここ！また連れてきてね！」

「うん。いつでも来れるからね」

2人は奥地にある温泉郷で日帰り入浴を楽しんだ。

ペンション風の内装で、ゆったり静かな雰囲気は

仕事の疲れをじっくり癒してくれた。

温泉地を後にし、家路に着いた。

「あねー、テレビみていい？」

「いいよ。地上波入らないけど」

「いいよ。ケーブルチャンネルみる。」

あ!!!ジヨヨンだ!!!うわあ.....

涙ぢよちよぎれる.....」

「うっ.....ほんとだ。まだ生きてるときのだね」

「うーうーうー」。リモコン入れてすぐこれでてくるって

なんででしょう?」

「ほんと、なんででしょうね?」

久々に小さく不思議な体験に、少々動揺する、ユノ、リラ姉妹だった。

「あね〜。今日は肌寒いから、一緒に寝よう？」

「いいよ！なんか修学旅行みたいだね！」

「●●がさー、アホでさー、もうさー（きやつきや）」

「爆笑!! うけるーなにそれー」

「もう、たまんないんだよねー。」

「まじ、受けるわ。てか、もう夜中だから、静かに話そうネ」

「うんうん。それでさ・・・（ヒソヒソ声）」

「ぶはっ！やめてー。声でちゃうじゃん」

2人は、修学旅行部屋の生徒よろしく、朝方まで会話を楽しんだ。

びびび・・・カァーカァー

明鳥の鳴き声が聞こえてきた。

「こんなに楽しんだのひさしぶり・・・ふああ」  
2人はいつの間にか眠りについていた。

## 真夏のつぶやき

くユノつぶやき編く

あれからまる3ヶ月が経過した。

仕事自体は慣れたから、大分いいかんじになってきたのになんと

いきなり責任者になっちゃって

というのも

今までいた人が

急に、とかいかいちおう1ヶ月前だけど

辞めるってことになっちゃって

どういうわけか

私がそこを動かさなければいけない立場になってしまったて  
しかもだよ？なんの知らせもなく、新しい人が入ってきて  
その指導させられてるって

どゆこと？ね、どゆことなの???

もう、頭痛が止まない状況・・・  
というより後頭部の下の首が痛い・・・  
それって、脳やばくない？  
って

気になりながらも

先生のところにはいけず・・・

おそらく

神経からくるもんだろうから

これも

慣れてきたらなんとかなるんじゃないかと

希望的観測を持つこととどりあえずひとまず

自分を励まそうとしていたんだけど

日本もあんな形で負けちゃって

ガツカリ君だよ・・・

その分

子供達と毎日

本気とかいてマジで

真剣とかいてガチで

サツカーやってます・・・

恐怖なのは

夏休み、朝早くからこどもたちがきて

夜7：30頃まで預かるということです

前の仕事の大変さを考えたら

もちろん

そりゃあもお

肉体的には

おっけーの助でござるが

とにかく安全確保

それが

第一なんです・・・

気を遣うポイントなんですね・・・

問い合わせとかも来たりして

対応できるの

あたししかないから



もう、あたまぶつちぶつちぶちきれそう・・・

そんな混沌とした脳内革命

いや、脳内の革命が起こってくれたら

御の字な

カオス状態ですけど

とにかくとにかく

もう祈るしかない

どうかどうか夏休み無事に過ごせますように・・・

備えあれば憂いなしだから

今から、カードゲームなどの

やり方チェックとか

活動のネタをいろいろと

集めていこうかと

思っています・・・

人生は

死ぬまで修行だあああああ

もひとつ

大きな悩みは

ここ毎日、料理してないことです

夜にはスーパーのお総菜が半額になるので

それ買ってしのいでいるっていう・・・

自分で作った方が

ぜったいいいのはわかっておるが

それができないのが

ちいとストレス・・・

でも

でもだよ

夏のあの大変な日々を思い出せ！

思い出すんだ・・・

そして今でも

前職の人達は

このてーへんな時期を

迎えちゃっついて

大変なんだろうなって

思いを馳せています・・・

元気かなー

今年はどうなんだろうな・・・

状況・・・

たまに遠巻きにみかけるけど

淡々としているよーな

気がしないでもないけど

今週初めは

暑かったから

しんどかっただろーなー

なんて

思っていました・・・

それでは

ごきげんよう

## セミの声

最近つて蝉の声を聞かなくなつた。

じりじり・・・次に

ミンミンミン　そして

カナカナカナナ・・・

蝉の声を聞くと夏だなあつて

実感したんだけど。

さて、夏休み前。コワイ話しは一旦集結。

彼らにはブームがあつて、がーつと集中して

そればかりやるかと思うと

次のテーマにうつると、前のことはなかつたことのように

忘れ去る・・・

まあ、私と似ていなくもないが

コワイ話しが集結しても

コワイ現象は未だ続いておる・・・  
それはまあ置いておいて

最近は、ユノもリラも忙しいから

オンライン会話か文字メッセージの

やりとりが主で

週1ぐらいで会ったりすることもある

不思議な体験の共有は

あるようでないような

もしかして

リラが大人に近づくとつれて

ユノとの一心同体な脳共有も

離れていくのかもしれない

保険証もやつとこさ届いたので

あとは休みの確保をまつて

ドクターのところに行く計画を立てているユノ。

ただし、あせらなくてもよいかもしれない。

夏休みは早朝から夕方まで勤務になるから

その後で訪問するパターンも可。

まあ、夏休みみだけの

疲労度となるかは、来てのお楽しみ・・・

今日だって、野球野球野球

せんせー、サッカーしよ

ういー、サッカーサッカーサッカー

格闘技しよーぜー

空手

次に剣道

おいーーーーー

いくらサスケで鍛えたからって

給水タイムぐらい

くれない？

ね？

いくら、ユノが格闘技好きだからといって

容赦ないちびっこギャングスター達

6年生の子と

ガチで野球って・・・

ソフト部だったから

ウインドミルで投げたら

早いからだめだ！

上から投げて！

あのお・・・上から投げた方が

もっと早いと思うよ・・・。

いいから!!!

はいはいはいはい

びゅっ||3333

うああああああ

ほらね

だから言つたでしょ

うひよーーーーー

あれ？喜んでる？

そんでもって、なんでいつのまにか

1 2 対3とかになつてんの？

もー、コールドじゃん!!!!

なんでさー、自分ルールなのさ!!!

アハハハ!!! ケタケタ!!!

楽しそうだからいつか・・・

家についたユノさんは、せつかく前職の悪夢から逃れて

晴れて筋肉痛からのがれられたつてのに

またしても、筋肉ががちがちになっている

次第でして

事務処理なーんもできずに

家に戻ってきました。

明日やります。

ちびっこギャングが来る前に

やっちやうことにしませう



ま、でも

今日も、大きなケガもなく

安全に楽しく遊べたから

いいでしょう……

(サッカー中の足骨と足骨がぶつかって

悶絶したのは負傷にカウントせず)

もう、ユノ先生は

男先生確定ってことで

残り2人が女先生なので

仕方ないですね……

まあ、暑いとはいえ

冷房効いてますから……

それだけでも御の字でございます。

暑い中、みなさんお疲れ様でございます。

そういえば、野球やってた子が

とつぜん●●●って

そういう呼び方で私を呼んだ

え？なんで？なんで知ってるの？

ちよつとびつくりしたかも。

暑さで忘れてたけど。

その子、勘がすごく鋭くて

たまーに、人がみえないきこえないしりえないものを

感じたりすることがあるんだ

なにか見えたのかな？

ねえねえねえ！

「ねえ！あね！今日さんちやんの命日だよ！」

「あ．．．．ほんまや！わすれとった．．．」

「まじーシンジられない！」

「いや、正確にいうとですね

朝は覚えていたんです。それですね

今日は暑かったので、こどもたちと水浴びしとったとです。

そんでもってですね、ずぶぬれになりました

なにもかもが、すつとーとーと

抜け落ちてですね

家に帰ったら、激爆睡しちやったとです．．．」

「うわあ．．．．過酷」

「いえいえ、前職から比べたら

屁

でもありません．．．．スポーツするっていったって

部屋、エアコンきいてますしね

外で水浴びなんて、最高じゃないすか

前職は、幻覚みましたからね・・・

5 F 4 F 5 F

→ ← → ← → ← → ← → ← → ←

の

連続で、朦朧として

いろんなものが見えました・・・

蜃気楼ってか」

「まあね・・・」

「あ、今TVでアクセシビリティちゅうしてる!」

「はあ?なにいきなり?」

「ああゆるのいーなーっておもて」

「しらない・・・きもい」

「きもいっていうな!いま、うちの館内では

『きもい、うざい』禁止ですから!!!

人に向かって、そゆこというな!・・・です」

「とにかく、さんちゃんの命日だからね」

「へい……今、思い立って」

「コンビニにお酒買いに行きました。

そんでもって、焼き鳥も買いました。

おいしいです」

「んじやなに？今、酒盛りちう？」

「はいそーです。だんだん

クラクラしてきました……」

「あした、仕事じやないの？」

「ええ、思いつきり仕事です」

「朝から？」

「ええ、朝から晩までです」

「夏休み期間は？」

「早朝から夕方までです」

「シフト？」

「ええ、そうです」

「とにかくがんば！」

「おまえもな」

「……………言いたいことはわかっておる」

「いちおう企業秘密ということだ」

内密にしておくよ」

「皆まで言うな」

「御意」

「せっかく健康保険きたのに

姉、ドクターヘンリーんとこいけないじゃん？」

「そうなんだよ…………このめまぐるしく

忙しい状況をなんとかして」

「ま、でも、サスケで鍛えたから

今は楽勝でしょ？」

「そう、そうなんだよ!!!」

それがあつたから、今が全く負担じゃない!

むしろ嬉しい疲労だよ…………」

「発展性があるよね」

「おー、いいことだね。そうなのよ。」

「発展性があるんだよ、この仕事」

「だってさ、前はなんか」

「刑務所の穴掘りみたいだって言ってたじゃん」

「そう・・・私にはハンデが多すぎて」

「むなしすぎ、休日は充電でオワテしまっていたから」

「もう、ヘロヘロのドロドロ」

「それを考えたら、今の大変は」

「実りある苦労だよね？」

「おう、リラっち、良いこと言うね！」

「あねに鍛えられたからさ。」

「ていーちや紹介してね！」

「邪満載ですな・・・」

「楽しみあつたほうが、勉強進む」

「ノーコメントにしときましょ。」

「そいじゃ、またね。さすがに水浴びて疲れたから」

「もう寝るわ」

「ばいばいきーん！」

# 夏休み

## 【回顧録】

夏休み・・・

私の夏休みは昨年まで

あつてないようなものだった。

一般のお盆休みのように

長い連休でもなく

というより

休みがあつても

充電で終わつちやう日々だった

ように思う

あまり記憶がない

もちろん

大事な記憶はしっかりと

刻まれているけれど



昨日、かな。

ふと、昨年の夏のことを思いだした  
運ぼうとしていたものを

落としちやつて

そのときに

あの人 helped くれたんだっけ

こつち押さえるから

そつち押して

つめたいようにやさしい人だなあ

ところが

やさしいかと思うと

一瞬で氷河期を迎えたような

つめたーい仕打ちをしてくることもあつて

ま

そんなところが

おもしろくて仕方なかったんだけど

今も

毎日、想像を遙かに超える

発想を展開する

ちっちゃい人達が

おもしろくて楽しい

今日も全身ずぶぬれになりました。

水遊びをして

水鉄砲とかホース水をぶちかまされました

去年は

自分の汗でびっしょびしょになっていたから

それを考えたら

酷暑の水遊びは

気持ちがいのです

他の女性は浴びるのが不可だから

室内でお仕事してたけど

私は喜んで

外いきまーす

って

水浴び隊員に志願いたしました

明日明後日は連休だから

ゆつくりしたいけど

夏休み活動の準備があるから

いろいろ買い物とかしなくちや

来週末と

月初の週末は

お仕事だからね・・・

によほほ

夏のイベント続きだし・・・

ま、でも

それが終われば6連休だし

福利厚生利用して

いろんな施設お手頃価格で

利用できるし

ビアガーデン行きてーーーーー

お手頃パッケージが

!!!!

利用できるんだけどな

ま

夏休み戦争がはじまるわけで

前の1ヶ月半の地獄の黙示録を考えると

全然の全然全然

楽勝なのです。

ただ最近

毎日家に戻った瞬間に

爆睡してますね・・・

おそろく

暑いからでしょう

1日中部屋の中で

過ごしてますけど

基本

たまに外に出て水浴びたり

スポーツ三昧で

部屋でもあつちこつち動いてるから

体力は使っているのかな

神経もはりめぐらしてるし

ケガのないように・・・

監視監視監視センサ—ON

いろいろ大変だけど

充実はしているのかもね・・・

事務処理もしなくちゃで

パソコンもちあるきながら

ある時は隠れて

あるときは

テーブルに書類広げて

ちっちゃい隊員たちが

他のところで集中しているすきに

だかだかだだ—ー—って

パソコンたたきまくって

印刷して

今日も忙しかったね・・・

それにしても

基本全員男子って・・・

すごいですよ。

男児って1人でもエネルギー満々なのに

それが複数いると

そりゃあもう大変です

息子3人いる親とか

偉いわーーーー

ぜったいうるさいから

ということだ

一旦休憩の後

戦闘モードでロックオン

雷砲を受けなさい!!!!

ちびっこたち!!

(私より大きいのもいるけど)

まだDrんとかいけないし・・・

いつ行くんだろ？

お盆やってるのかな？  
メールするヒマもないわ・・・

夏は夜

月の頃はさらなり

やみもなお

蛭の多く

とびちがいたる

のだよ





すれ違っただけで

笑われる人って・・・

うけるーーーー

ほんと

うける

まじでうける

そのあとも

モンキーパンチ

みたいな、他社のおっさんとも

すれちがって

あっちも

あれ？

って顔したから

手をふつたらあっちもふりかえしてきたけど

べつに笑いは起きなかつたな・・・

風体はこつちのほうが

おもしろいはずなんだけど

ブリキのロボット

鋼のがちやおじは

最強無敵です……

もう、あしたから6：30出発だからね

気合い入れていかないよ……

がちやおじパワーもらったわ

で

人体用フアブリーズ

クールミスト

みつかってしまった……

お子様に。

振って……!!!

安易に応じたら

そんなことしたら

すぐになくなってしまうので

1人2回まで！

って決めて

しゅっ！ってやったら

大喜びでした。

だれかも喜んでたよね……

今、何してるのかな……

もう私は待つ時間が無いので

そろそろきっぱりいこうかなと

考えてます。

人生は一度きりだし

思い出は一生消えないけど

不思議な出来事の数々の

説明もついていないけど

(きつとドクターが説明してくれるでしょう)

願っているだけじゃ

だめなのよね

実際に行動しないと

進まないから

時は流れているから

私達の力で止めることはできない

動くことで

道は変えられるけど

止まっていたら

道のほうから歩んできてはくれない

失敗を恐れるんじゃない

失敗して学ぶと強くなるから

転んだことがない人は

初めて転んだら大げがする

でも、何度も転んでいたら

受け身もとれるし、大げがしない方法を自然に覚える

人生の強さを

学ぶわけで

私はもう

生活の心配はないのだし

自分の道を

歩んで行こうかと思う

夏休み

仕事はあるけど

こころの夏休み

しつかりとつて

秋はイベントに勤しむぞ

これからは

たのしいこといっぱいして

心の呪縛から

抜け出す

いつまでも想っている

美しい静の時間も

今は流れを変えて

動の時間にして

生きるエネルギーにするから

リハビリ天使君

ありがとう

今元気でいられるのも

あなたのおかげです

不思議な出来事の数々の

運命論の解明

それはきつと

現世と前世来世をつなぐ

道しるべなのかもしれないね

人は前世の記憶が

現世に生まれるときに消去されるみたいだけど

なんらかのエラーで

たまに前世の記憶が残ってしまうことがある

データでもそういうことがあるように

きつとこれまでの

不思議体験も

そんなエラーが起こした

脳の不思議なのかも

がちやおじ

いまだに二リットルのペットボトル

数本抱えて

仕事してんのかな？

がんばってね！！！！

みんな

私もがんばる！

## 久々のデジャブ

夏祭りが盛ん。

そう、ユノの仕事でもお子様向けのイベントが目白押し。  
毎週末、イベントにかり出されている。

お盆の時期までは忙しそうだ。

「いらつしやーいーこっちで投擲ができますよ」

1回100円ね。じゃ、はい、これで投げてね」

こども達を案内し、父兄の対応をしながら

あくせく動くユノ。

人の多さで蒸し返る暑さが襲ってくるが

決して不快ではない。こどもの体温は

ユノにとつての癒しパワーだからだ。

「これね、おもいつきり投げないと倒れないからね」

えーいつ！って投げてね」

まだ、ちっちゃいよちよち歩きの子まで



参加してくれるから、ずっとそばにいてあげてゲームが終わるまで付き添ってあげる。

たくさん景品からいくつか選んでもらうのだがそれもちっちゃいこだと、選びあぐねているのでこんなのあるよくと、手にとって見せながら選ばせる作業もまた熱い。

お昼はエスニックが提供された。

ユノの好物であるから、それもまたうれしい。

自分よりは下の世代の人達との交流も

ユノにとっては嬉しいひとときだ。

— 今度の飲み会行きます？

あ！行くんですね。じゃ、私も行きます行きます！—

また、新たな人脈がひろがりそうだ。

小さい頃は、かなりの人見知りで

知らない人と話をするなんて、ましてや

自分から話しかけるなんて、ありえなかつた

幼少期。

今、はじめて会う人達は、そんなユノの小さい頃の様子を聞くと、ほぼ100%に近い確率で驚くようだ。

「ユノ先生がひとみしり？信じられなくい」  
口々に、ユノが現在は社交性が高いと絶賛される。

そんな楽しいひとときを過ごしていたらある関係者の荷物が紛失したという情報が入る。

みんなで探しているときにユノの脳裏に衝撃が走った。

(はーこれ、夢でみた!!!いつだったろう・・・  
けっこう前のような気がする・・・たぶん・・・  
前の仕事をしていた時であるのは間違いない・・・  
それで、なんでこんな施設で私は捜し物を  
しているんだろう・・・って思ったんだ！  
すっかり同じ場面だ!!!)

ってことは、やっぱりここで仕事をするのが  
決まっていたんだね・・・きつと・・・

ドクターヘンリーへの報告事項が

出てしまった。お盆なら行けるけど

先生、お盆いるのかな・・・)

ここ最近、不思議な出来事は息を潜めていたが  
久々の衝撃に戸惑うユノ。

(ここ毎日、こどもたちとコワイ話をしていたから  
怪奇現象はまったく動じなかったけど

デジャブる感覚って久々。あまりに鮮明な

正夢だったから、びっくりした・・・

そういえば、家の裏の畑にあるビニールハウス。

あれも、前職場に入る前に見た景色だった・・・

家の近くのなのに、通ったことはなくて、仕事で

通ったときに、はっ!!としたんだっけ・・・

研修中にはよく通ったけど・・・

そう、そうだった。

そんなことを思いながら、夏休み時期  
夕方には仕事が終わるため、日帰り温泉にでも  
浸かってから、明日は帰ろうかな  
と、思っていたユノだった。

## 第3部 発展展望編

## 少年の心を掴んだヒーロー

さてさて。

宴もたけなわ。

7才の少年が時間をもてあましている。

DSを握りしめたまま

周りになじめず会場をうろろしている

(諏訪部さんが合流してくれると

あの子、きつと楽しくなると思うんだけどな・・・

諏訪部さんは・・・あ、あっちかー。私も動けないから

困ったな・・・)

すると諏訪部さんの方から席を移動して、少年の隣に陣取った。

数分も経っていないのに、少年の表情が

みるみる明るくなった。時折笑い声も聞こえる。

よかったー！

第一ステージが終わる頃、ユノは少年に近づいていつてはなしかけた。

「宮人（みやと）くん、よかったね！」

諏訪部さんは、プロのゲーマーなんだよ

いっぱい教えてもらえてよかったね！」

少年は満面の笑みで答えた。

「うん！」

「いいな。こんど私にもデュエマとか

ベイブレード教えてね！ランチチャーの使い方へタなんだ」

「うん！いいよ！」

宮人君は、ジャンプしながら答えた。

すると背後から諏訪部さんがヒソヒソ声でつつこみを入れる。

「ランチチャーと違って薄いよね」

「そうですよっ！だから、宮人君におせてっていつてるんですよっ

ね〜！宮人君！」

7才の少年はゲームの秘伝を教えしてくれる達人と

仲良くなれたことが嬉しかった様子で、終始笑顔だった。

（あくあく。諏訪部さんのように男子心をつかむ人が

いてくれると、夏休み助かるんだけどなあ）

あつち部署だから、それはムリだしな・・・

てか、山中さんもかなりのゲーマーだったっけ・・・

ゲーマーでアニオタだから、間違いなく子供の心を掴むに決まってる。

しかも仕事内容が、男子の尊敬の的だ。私もカミングアウトしたら

えく!!! って、尊敬されたし・・・

ベイブレとかデユエマって奥が深いんだもん。

太刀打ちできないよ・・・

ほんと、手取足取り教えてほしいわ マジで

私ができるのは一緒にサッカー、バレー、野球。

水遊びってか水浴び。体調の関係でたまにできないこともあるし

あとは、将棋と五目並べだしな・・・

将棋は久斗（ひさと）しかやらないから・・・

いつも久斗が寄ってきて、せんせーやろー！っていうから

お相手するけど、そうすると他の子にかまってやれないし・・・

ベイブレ、デュエマならみんな楽しんでめるから……

とりあえず、諏訪部さんにカードの提供をお願いしておいたから  
児童同士でなんとかしてもらおうしかないでしょう。

スポーツもいいけど、今は熱中症が気になる時期だし

長時間はできない。しかも興奮しすぎてしまうことも。

でも、デュエマやベイブレなら、みんな静かにやってくれるんだよね。

その間に事務処理とかもできるし……

今は早朝から夜まで子供がずっといるから

なかなか事務仕事ができない。

せいぜいリクエストに答える形で、こどもセレクトのDVDを見せるのが  
精一杯。今はヒロアカ喜んで見てる。

来年の夏はこどもがだれないように

ゲームの腕を磨くか……ベイブレならなんとかがんばれると思う。

自分でもちよつとずつ買って。

デュエマはむりだわ。だいたいにして強いカードがない……

ま、自分ができることからやっつけていこうか。

将棋、五目並べ、スポーツ、それだけでも十分だよね。



工作は、あたらしく来てくれた裕美先生がいるから。おまかせ。さて。

アルコールも抜けたから、携帯なおしに出かけるか・・・

もう10日も使えてない状態だからね・・・

あ！やば！松にいに連絡しなくちやだ・・・てか、連絡きてたのかも？

あと1週間がんばれば、お盆休みだ!!!

いえあ!!)

## ユノの日記

【今日の日記】

会いたいな。

何してるんだろう？今頃。

もう3か月も姿みてないや。最後に見たのは

5月半ばだったっけ・・・

私もいろいろ忙しくて、バタバタしてたから

そこからあつという間に時間が経ってしまった・・・

用があつて近くを通ったけど

会えない。もう会えない運命なのかな？なんて

思ったりもする。でも、思いは変わらない。

彼にいろいろ伝授して欲しいことがあるけど

それも伝えられない。連絡先を知らないから。

しかも今、携帯壊れててだれにも連絡できない。

着信はできるけど、電話帳データもないから、どうしようもない。

お盆休みは、こども達の活動の準備でもしていよう。  
今日はアニマックスをずっとみていたから

妖怪ウオッチ↓稲妻イレブン↓銀魂↓ピカチュウ  
連続で見ちゃった。

妖怪ウオッチが面白くて笑っちゃった。

いろいろプラモデルも注文したり

カードも注文したわ。1デッキ分は

諏訪部さんからわけてもらえるから、残りの分を

自腹で発注。2デッキは必要でしょ？

覚えるのに時間がかかるわー。さっきクイズやったら

初心者編を脱出程度だったけど

実際、ほとんどわからないに等しいから

カードのキャラもわからないし。

初歩の初歩しかわかんない。5枚裏でだしとくとか

アタックするとか召喚するとかね。

実際にバトルして覚えたいんだけど・・・

家庭教師が欲しいわ。

子供の頃は男子とも遊んでたから

仮面ライダー変身ベルトも持ってたんだけどね

大人になってからは、子供男子の遊びって

やってないし

遊戯王の頃は多少知識があつたけど・・・

星の子カービイとか、ミニ四駆とか。

そうそう、今もミニ四駆とか

あるらしいよ。まあ、車や乗り物は

男子人気が衰えないものね。

私の宝物、サスケのトラックとウォークウルーミニカーふたつは

持っていないよ

ぶち壊されるのが目に見えてるからね。

ぜった持って行かない！

お盆後、夏休みはあと4回こなせばいいから

理科の実験道具で時間を費やそう。

カードは飽きないから、入手したら

定位置に置いとくことになるだろうな。

お盆休みは遊びの研究と

カードやゲームなどの知識量を増やすことに  
時間を割くことになりそうだ。

ゲームでアニオタな

あの方と仕事で一緒だったらしいろ  
聞けたのにね。

でも、その仕事してたら

その必要はなかったから、その話にも  
ならなかったのかな？

世の中はわからないものだ・・・

そういうえば、一人の子がT・グールの

質問してきたっけ・・・好きなキャラは？って

こどもはアニメでみるらしく

私はコミックだよって話をしたっけ

そうだ。続き読んでないから

借りに行こうかな。僕のヒ・・・の映画も

見にくくしね。

仕事とすきなことがかぶるって

幸せなことなんだって。

そうかも。仕事に好きな人がいたことも

幸せだったのかもね。

今いずこ。

## ユノの休日

「ねえ、リラ。映画みる？」

「え？いいよ。」

「あれ、みたいんだよね」

「ああ、あれね。でも、私ジユラシックパークがいい」

「ああああ、私も恐竜好きだからね。でも

今日はあつちがみたい」

「んー。ちよつと時間みてみる・・・」

あ！こつちはレディースデーじゃないよ。

あつちだと今日がレディースデーだよ」

「じゃ、あつちでいいよ」

「りよ。時間は・・・あ、後1時間後だから丁度いいね」

「じゃ、移動しよう」

「んと・・・ああああ、ジユラシックはだめだ

3時間後だから、あつちの映画しかないよ」

「最初の私の希望が通ったね。じゃ、あれで」

「ま、いつか……」

映画館に移動する二人。

「あれ？なんかあつたのかな……」

消防車が止まってるよ」

「うわっ、ホントだ……」

(もし、映画上映中になんかあつたら……)

それにしても不思議なのは、皆静まりかえっていて

ちっともパニックになってない。なぜみんな

落ちついてるんだろ?)」

「どうする? 姉」

「どうするって言っても……とりあえず

人が中にいるし、大丈夫じゃないかな」

「なんか買つていい?」

「いいよ。チュロス食べない?」

「じゃ、チョコで」

「あのねー、チュロスはシナモンが美味しいんだよ、リラ助」



「……わかったよ。出して貰う立場だからね  
何も言えんわ」

「買ってくるよ」

「ココで待ってる」

「はい、半分ずつこ」

「ありがとー。……(もぐもぐ)」

ん？うめっ！美味しい!!!」

「でしょ。君、シナモン好きなんだから

うまいにきまつてるでしょ」

「ほんまや……」

「食べ終わったらいくど！」

「り！」

上映館に移動し指定した座席に座る二人。

「いいねえ。ひろびろとして。おっと携帯切らなくちや」

「もう、すぐ始まるね」

「うん。楽しみ！」

ー映画がはじまるー

(お・・・このキャラは映画オリジナルかな?)

おー、やっぱり映画館は違うね〜音響がすごいのと

映像の迫力も半端ないわ。でもって、ストーリーー面白いわ。

よくできてるわ。でもさ、これとあれのキャラって

何語でしゃべってんだろ?? あっち外人だよね?

ま、いいか・・・でも、テーマが私の好きな分野だからね〜

面白いわ。オール○○○○って、さんちゃんに似てね?

素の方ね・・・)

「あつという間に終わった〜

面白かったね。リラはどうだった？」

「んー、まあまあだね。あたしは姉の付き合いだから」

「え〜? 楽しくなかったの？」

「あたしはいつもこんなもんだよ」

「かわいくないねっ!!」

「あたし、あんまり映画とか見ないから」

「なんだよそれー」

「いいじゃん、姉が楽しかったんだから」

「まあね・・・君は、買い物が好きだもんね。」

「あたしはあんまり好きじゃないけど」

「そうだよ。姉、買い物早すぎるもん。」

「買うモノ決まってる、それかったらハイ、終わりって

男か!!!

私は、いろいろ見て回るのが好きなのよさんとちゃんと一緒に」

「そういうえばアウトレット行ったときも、君たちが

あれこれ見て回って、私は『ベンチ座ってるから行っておいでよ』

って、待ってたよね・・・考えたら、ふつう女子が買い物

ブラブラしてて、おとうさんとかおにいさんが、待ってるぞーって

のが多いかも?」

「そう、100均とかでも、姉早すぎだって」

「だって、買うモノ決まってる、それ以外用事ないもん。」

「文房具やさん行くと、うろろうろしていろいろ見るの好きだけどね」

「だから、いつもあの文房具やさんの初売り福袋だけは

「買いに行くわけね？」

「さいです！」

「ま、だから、今日は、あたしが買い物楽しんで

「姉が映画楽しんでることでもいいじゃん？」

「そうだね。イーブンだね。じゃ、また今度

「買い物つきあつてあげるよ。あのオシャンティな家具屋は

「すきだよ。うろろうろするの」

「だって、あそこって、目的！ってだけ行けないじゃん。

「構造上。ぐるーってひとまわりするかんじになつてるもんね？」

「そうそう。フードコートも美味しかったしね」

「じゃ、あたしは姉に買ってもらった、本棚を設置して

「明日は部屋の掃除するよ」

「そうそう、がんばって！」

「あとで、シヤメ送るから」

「はい、待ってます！」

リラを送っていくと、ユノは自分の住まいに戻って行った。

(今日の映画、なかなか面白かったけど……)

そういえば、中学の時だったかな……3年？

授業中に急に眠くなって、一瞬ねちやったことがあった。

それで、すぐに、はっ！と、目が覚めたんだけど

そのときに

【ミツキイツグ】

って聞こえたんだっけ……なんだろう。この名前？

私の将来のパートナー？か、なんか思った記憶がある……

イツグ……？イツク？

あの頃はもちろんこのアニメなんかなかったし……

どうしていきなり聞こえてきたんだろう？

なにか、意味があるのかな……

先生の言うように、なにか前世と関係あるのかな？)

不思議な気持ちを抱えながら

とりあえず休日前半を楽しんでいたユノだった。

## 知らなかった!

やっとユノの携帯が戻ってきたようだ。

正確に言うと、壊れていた訳ではなく

メモリーオーバーで、正常に動かず

ユノ自身も、アプリを消したり、容量をあげてはいたが

それでもメモリー容量は変わらず

工場ですべて点検後、修理の必要はなく

ただし、メモリーセットが必要だったため

全削して、初期化してくれたらしい。

ユノはPCにバックアップ同期をとっていたから

復元作業をしていた。

すると・・

6月頃、前職場の人からのメッセージが入っていたことに

気が付いた。

「えっ・やだ!・6月って・・・随分前じゃない!

「ご無沙汰してしまってる!!!返信もしていない  
ってか、できなかった!!」

すぐに電話した。

前職場の人は、一瞬、むっとした声で応じたが

ユノが事情を話すと、笑って

「あんたさ、携帯壊れたって、ふつう

すぐに買い換えない?」

「いや・・・その・・・携帯って無くても

あまり不自由に感じないし、この機種まだ1年しか使って  
ないから、必要最低限動けばいいって思ってたんですけど  
メールとか受信してないのに気づかなくて・・・

「ご無沙汰してしまって、ほんとごめんなさい!」

「いやいや、いいんだけどさ。」

山中さん、転勤になったのよ?」

「え?????」

ユノは動揺する心を抑えるのに必死だった。

「で、転勤・・・ですか?ど、どこに行っただんですか?」

「沖繩に戻ったようよ。ケント君も一緒だつて」

「そ、そうだったんですか・・・どうりで

近くを通つてもいないはずだと思つていたんです」

「もうさ、ぜんぜん連絡とれないから

あんたなんか知らない!つて思つてたんだけどさ

天然なんだよね。ユノちゃんつて。

ふつう連絡こなかったら、あれ?つて思わない?」

「あ・・・てか、お忙しいのかなつて思つて」

「まあ、君自身も忙しかつたんでしょ?」

「確かに、そうなんですけども・・・」

「とにかく、こうやつて声が聞けてよかつたよ!

仕事がんばつてね」

「ありがとうございます。また連絡します。」

「あいよ!待ってるよ!」

(知らなかった・・・あたしつたら、気づくのめっちゃおそいでしょ!)

だから、天然つて言われちゃうのよ・・・でも、受信してなかつたんだから

仕方ないよ・・・(泣)



でも、もし6月の時点で

あのメツセージを受け取っていたら・・・

気になって気になって、仕事にならなかつただろうな・・・

すぐにでも沖繩に飛んで行ってしまったかもしれない。

頭パニ食つちやつて、引き継ぎどころじゃなかつただろう・・・

私の方は6月から今まで忙殺されてたから・・・

引き継ぎ↓新しい人の指導↓夏休み早朝から児童管理↓昼食用意 e t c e t c

それでなくてもわたわたバタバタだったから・・・

今回の携帯の不具合、シヨップ店員も不思議だおかし

と言っていたし、私もなにか変だと思っていたんだよね・・・

そういうお知らせだったのかもしれない。

この怪現象は、私やリラの脳波とは関係ないよね？

それとも脳波と電波ってシンクロするのかな？

ドクターは今、海外に研究出張中だけど

秋には帰ってくるようだから、そのときゆつくり

話しができるといいな・・・

ユノは、これまでの出来事を忘れないように

バックアップを二重にとりながら、PCに記録データを保存した。

## 青い海を映す空

—ねえ、パパ

空が青いから海が青いの？

海が青いから空が青いの？

ユノはどっちだと思う？

パパはね

空が青かったら海も青くなつて

海が青かったら空が青くなるんだと思うんだ

へえ！

空さんと海さんは仲良しなんだね。

そうだよ。

仲良しさんはいつも

お互いを映し出しているんだよ

空さんが元気なら海さんも元気だし

海さんがやさしかったら空さんもやさしくなれるよね—

ユノは目の前に広がる美しい景色をみながら

そんな昔の会話を思いだしていた

いろんな事があつた

今まで

でももう迷わない

自分の心はここにあるから

それと

ドクターOKもでた

5, 6時間ぐらいのフライトなら

ラトケ囊胞には影響がないと

むしろ穏やかな空気に触れ

美しい景色を満喫すれば

様々なストレスから解放され

体全てに良い影響を与えるだろうと

また、不思議な出来事の数々も

この場所と深く関連していることから

ぜひ訪れてなにか感じるものがあつたら  
電信連絡するようにと

ミツシヨンも授かつたから

ユノは大手を振つて誰にも気兼ねなく  
休暇を取ることができた

「さて。この住所は……」

大分北の方だな。普段はカーナビ使わない私だけど  
沖繩だけはナビ付きレンタ借りるんだよね。

最初はドライブ楽しんじゃおうかな

高速乗らないで。1週間はいるんだから

いつか会えるよね？」

盲導犬プロジェクトが一段落したため

山中は後任に仕事を引き継いで

本拠地の地元沖繩に戻ってきていた。

ユノの新しい仕事でも

沖繩で手に入れられる自然の景色や

おとぎ話など

役に立つことが多いため

研修旅行も兼ねてという名目で

長期休暇を許可された

旅立つ前に

ユノは部屋の大掃除をしていた。

すると

色褪せた古い封筒がでてきたので

そのまま捨てようとしたのであったが

一瞬躊躇した。

なにげに、そのヨレヨレの封筒の中身をのぞいてみると

なんと

樋口一葉さんが現れた。

そう、五千円札が2枚も入っていたのだ。

「あきちやびよ！捨てちやうところだったわ！

あつぶねく!!!でも、なんで出てきたんだろ？

・・・・もしかして、さんちゃんからの餞別？

そういうえば・・・・数年前の私の誕生日の時も

家の玄関あけたら空から五千円札が振ってきたんだっけ……

あの時もびっくりしたな。警察に届けようかと思っただけど財布があるわけじゃないし所有者を特定できない。

しかもじぶん家の敷地内だし……

誕生日プレゼントだよ。きつと。ってことでありがたく

いただいたんだ……

今回も絶妙なタイミングでお札出てくるんだもんなあ。

びっくり」

しばらく不思議事象はなりを潜めていたが

ここ数日は、またしてもユノの周りで不可思議な出来事が続いていた。

## 南国紀行

果てしなくコバルトブルーが広がる遠浅の海。

数年前に訪れて以来、ユノがこの南の島に足を踏み入れるのは久方ぶりのことだった。

ここ数年、ただひたすら突っ走ってきた。

しばらくここでゆっくりとした時を過ごしながら自分を見直したい。

じっくり充電して、これからの生活を充実させたい。

そんな思いを抱きながら、ユノはプライベートビーチのイルカをながめていた。

目の前で5歳ぐらいの少女がイルカに手を振っている。

イルカは特殊な能力があつて、その超音波で人間のある一定の

脳波等を読み取るらしい。人間の心のリハビリにも良い影響を与えられている。

たしかにイルカの近くにいると、癒される雰囲気満たされるのは

そういうことなのかと、悠々とおだやかな水面を移動する生き物から出る波動を感じとっていた。



ユノの目の前の少女はイルカに手を振りながら叫んだ。  
「イルカさ〜ん！またくるね〜！」

するとイルカは、目を細めて少女のほうに高速で泳いできた。  
キュキュキュという音を鳴らすと、少女の前で何度か身をひるがえし  
口を動かしていた。その様子はまるで笑っているかのようにみえた。

ユノは目の前の少女とイルカを同時に視界に入れながら

穏やかな気持ちで、ビーチを後にした。

「そうだ。諏訪部さんの結婚祝いのおみやげ、皆から頼まれてたんだ！」

これから、買い出しに行こうかな。レンタカーのガソリンはまだ残っているよね？

ちよつとあちこちぶらぶらしてみよう。水族館はまたあとで行こう。

ちよつと遠いから、明日かあさつて、ゆっくり見に行くことにして、

お土産わすれたら、大変だから、こっちが最初だね。

私も個人的におみやげ買おうかな。諏訪部さんと奥さんに。

だつて、あんなにカード譲ってもらっちゃつて、ありがたい！

ほんと、感謝感謝だわ。あ、リラや博士にもお土産かわなくちゃ・・・

というか、お土産リスト、速攻でつくろうつと。子供達には

星の砂でいいかな？」

カーナビを北谷（ちやたん）に設定すると、ユノはエンジンをかけた。

米兵の家族と思われる数人が乗った4WDがユノ車の右側についた。

「おっとー。米車とぶつかったりするとやっかいなんだよね。」

あつちは治外法権だから、保険がきかないらしい。気を付けないと」

ユノの懸念はどうやら取り越し苦労に終わりそうだった。

米軍達の手は本土の一般車よりよっぽど安全運転だった。

あつちだつて、トラブルは避けたいだろう。ちゃんと速度を守り

荒っぽい運転などしない様子は、ユノを安心させた。

「そーいえば、さんちゃんと来た時、インディーズやつてたっけ。」

あれが今思えば、ドレンジレンジだったんだよね。沖縄すごいね。

今回もストリートライブ覗いていこうかな」

沖縄にくると、やりたいことがたくさんあって、1週間じゃ足りないと思

うのはいつものことだった。

サーダアンダギーを買おうとして、車から一旦降りると

ユノにぶつかつてきた少年がいた。

「いめんさい。」

少年は唇を小刻みに震わせながら、後ずさりした。

「こちらこそ、ごめんね！大丈夫？けがはない？」

ユノはしゃがんで少年の顔を覗き込みながら、頭をなでた。

(あれ・・・この光景どこかで・・・)

「うん」

少年は少し安心したような顔で答えた。

「あ、サーダアンダギー落としちゃったね・・・

ごめんね。新しいの買ってあげる」

「え・・・あ、大丈夫」

「こっちおいで」

ユノは屋台のほうに少年を連れて行った。

「こんにちは。サーダアンダギー10個ください」

紙袋に入れられた、サーダアンダギーをユノは少年に手渡した。

「ほんと、ごめんね！これ、持って行ってね」

「ありがとう！」

少年は笑顔で袋を受け取ると、喜んで走り去った。

しゃがんだ時に見えた名札には

「島袋海人」と、書かれていた。

(カイト君……っていうのかな?)

そういえば、ケント君との最初に会った時も出会い頭にぶつかったんだっけ……  
どうしているのかな? 元気かな。

今の子、海人君? ケント君の瞳に似ていたね。キラキラした目が  
印象的だった)

現世で出会う人々は、前世でも必ず会っているという。

ユノを取り巻く人々も、前世でなんらかの形で会っていたのかもしれない。

そのつながりはいまだわからないが、ユノにとって、これまで出会った人々は  
彼女の人生に大きな影響を与えていることだけは間違いない。

沖縄での魂洗浄&癒しプランは順調なようだ。

# お休み回です。

作者さん、私今沖縄にきていますよー

すいませんね。忙しいのにお休みもらっちゃって。

☆彡 いいよ。ユノノンもがんばってきたもんねー

いいえがんばってなんかないです。ひたすらなんか必死だっただけです。

☆彡 そうなの、がんばったっていうんだよ。

そうかな・・・いろいろ考えることがあつて。

☆彡 だよねー。自分のことだとわからなくなるよね。

そうなんですよ。基本ポジティブシンキングなタイプなんです

あるときふと、ネガティブが襲ってくるものがあつて。

そういうときは、暗示にかけるんですけどね。

大丈夫大丈夫！って。

☆彡 あ、そうだね。私も今日、それで乗り切ったよ。

ポジティブに考えてると、ポジティブに事が運びますよね。

☆シ そうそう。 そうなんだよ。 やっぱり前向きね

でも恋愛に関しては、なかなかポジティブじゃないですね。

相手の心を図りかねるといっつか・・・

☆シ そうなんだよねー。 そうそう。 それは男女一緒だと思うけどね。

性格の問題もあるかな？ とか思ったり

☆シ いえいえだれでもそういう面はあるよ。 だから、友達に相談したりするんだよね

そう！ 友達。 かけがえのない友達。 助けられます。

☆シ ユノノン友達多いもんね？

んー・・・無駄に知り合いだけはいますけど、本当に心開いている人はそう多くないです。

☆シ ユノノン、噂ではティーンの時、攻撃的だったときいているぞ？

あー、攻撃は最大の防御？ ですかね・・・自分を曲げるのがいやだったんです。

☆シ あー、わかるわかる。 相手にあわせちゃうのみて、イラつときたりするよね？

そうなんです！ なんで、無理して合わせなくちゃいけないの！ って

思うんですよ・・・

☆彡 で、不本意ながら合わせることができちやう自分に驚いてあら・・・大人になっちゃってる、ってね。

そー、どーでもいーや、とか思っちゃって、はいはいくの返答を

しちやうこともあるし、お客さんとか仕事では、わりと合わせちやつたりします。

今も、ちがうだろーーー とか思っても

ですよねー (笑顔) ってことやっちゃってて。でも

それでいーんだ。バカボン！ってなてます

☆彡 バカになるってある意味大切よね

そうですね・・・無理やり自分を押し殺すんじゃないやなくて、相手に譲って

あげてんだぞー オラオラ しんのすけー

って、ゆるく対応すれば、自分もキュウキュウにならない

☆彡 それが生きるすべだよ。

ただ、ここ一発譲れない！って時は、ちゃんと出ますよ。

☆彡 そうだそうだ！主張すべきときはしてもいいと思うよ。

ちゃんと段階踏めば

そうですね。冷静に対処できるってことが大事だと

思います。ところで、ヘルニアっていろいろありますけど

痛いんですよ？

☆彡 あー、うちの弟鼠経ヘルニアになったよ。とどのつまり

脱腸ね。手術したけどね・・・あとは椎間板ヘルニアとかあるよね

あるべきものが突出しているのがヘルニアだそうです。

痛いんですよ・・・

☆彡 痛いってきくね。ユノノヘルニアなの？男性に多いってきくけど。

いえ、私ではないんですが、友達のおとうさんがヘルニアみたいで。

お見舞い渡そうかと思っただんですが、何がいいのかなくって

☆彡 お見舞いってなにをあげたらよいか迷うよね。

そうなんですよ。本が好きなのですが、どうなのがいいかも

わからないし・・・文字とか読んで大丈夫なのかな？とか

☆彡 友達とうさんに世話になったの？

はい、学生時分送ってもらったりしたので。

☆彡 そっかー。でも、お見舞いって渡すだけで

うれしいと思うよ。お花とかでもね。

そうですね。友達花屋なので、きいてみます。

☆彡 あっちプロだから、こういうお見舞いっていうと



上手にアレンジしてくれるよ。

はい！わかりました。それ、考えてみます。

沖縄のお土産も一緒に持っていきます。

☆彡それはいいね！じゃ、お休みゆっくり楽しんでね！

ありがとうございます！

## 休憩中

作者さん。

ずっとお休みしててごめんなさいねー。

沖縄長期休暇もらってます。

夏休みなんとか乗り切ったんですよ。

いろいろあつたんですけどね。

先週末なんか雷落としちゃいましたよ。

おかげで雨降って地固まるって感じになりました。

地域中、ほんとの雷もなってますね

すごい雷、5、6っ回、ぴかっつごろごろ・・・

電柱におっこちたらしいですよ。

なんか首のうしろがうすーく痛いんですが

ドクターのところには行けません。

土曜日が仕事るときもあるし

仕事ないときは、お部屋の片づけと

アニメみたりとか、のんびりすごしちゃってるんですよ．．．  
今は、ずっとKIDSステーションか  
アニマックス、あとはネット配信でT・グループみたりとか  
充実しています。

通勤には1時間かかるんですけどね  
車でね

でも首都圏だったらこれ普通。

地方都市での1時間は長いのですが

私は運転は苦にはならない．．．

どころか

運転好きですので

かつて青森までノンストップでいったこともあったり

むしろドライブ楽しむ感覚で

通勤楽しんでます。

で、会えたか？

ですよ。

気になっている．．．

それはまだ内緒です。

ちよつとした情報は入手したんですがそれが元になって

ある行動を起こしたという次第です。

ネタは提供いたしますので

あとは作者さんにお任せいたします。

秋に向かつてイベントもあるし

なんといつてもクリスマス……

企画運営を任されてしまつて

どうか

丸投げぶんなげむちやむりですよ……

いつもですよ。

むちやぶりされるのつて……

だから、今更動じませんけどね

ええ……

まあ休暇をうまくつかつて

なんとかやっていきたいです。

がんばつてると

いいことがありますからね。

これからも慢心しないで

がんばりたいと思います。

ところで

ヘルニアにはタバコいけないんですよね？

それだけは言いたいなー

私も腰骨折したとき

辛い物とかコーヒーぶった切ましたもん。

辞めましたよ

そしたら

半分の日数でなおつちやいましたから

てか

しばらく会ってない友達から

事故大丈夫？とか言われるんですけど

当の本人忘れてますわ・・・

そんなことがあつたね！

て、感じですよ……  
元氣すぎますもん。

よく寝ますもん。

今も、昼休憩は、爆睡。

まあ、ふつうのおうちの2Fが

休憩室なので、ゆったりできるつてのが  
いいですね。

大変な部分もありますが

恵まれていると思います。

ほんとうに神様に感謝しています。

給料はお世辞にも高くはないですが

生活していけるレベルですから

この点も御の字です。

と

日記のような報告になりましたが  
作者さんもおんばってください！

敬具

## 昨今

ユノは寝付けなかった。

ここ最近、不思議な現象が続いていたから。

## 〈ユノ日記〉

洗髪中、目をあけたら浴室の電気がぱちつと消えたので、電球切れかと思ってあとで、交換しようと思って、すすいでまた目をあけたら

あかりが煌々とついていた・・・

へんだなあと思っていたら、翌日もまた

浴室のあかりが消えたりついたり・・・

スイッチをオフしたら、ついたので

あれ？おかしいな、と思っていたら、また消えた・・・

それで、スイッチをオンしたら

今度はついた・・・

んーーーーー

おかしいな。

そして、髪のドライ中に

なんと、寝室の方から、がたがたっ  
!!!!

つていう音が・・・

あまり怖がらない私でも

さすがに、ちよつとぞつとして

おそるおそる寝室を覗くと・・・

落ちるはずのない箱が二つ落ちていた。

しかも、ただ落下するならすぐ下に落ちているはずが

ぼーん！とはじけたかのように、そう、まるで

誰かに押されたかのように、1m以上離れたところに

落っこちている・・・

なんじゃなんじゃ???

天国のとーさん、夢に出てくるし？

おかしいよ？いいいよ、お迎えきちやう系ですか？

そういうえば、首の後ろが痛いし

突然

こつちおいで〜つて



あの世からの招待状でも

きちやつたりしているんですか？

いやだ・・・まだそれは困る・・・

リラがちやんと進学して仕事決まるまで

それまでは見届けたいんですけど・・・

3歳の時に危うく命おとしそーになつたからつて

今がおまけの人生でも

まだ、呼ばないでください・・・

まあ・・・でも

そればかりは

私が決められませんからね・・・

寿命つて

なんでも生まれたときに決まっているらしいですよ・・・

きいた話ですけど・・・

でもね、まだ修行中だと思っんです。

まだまだ課題もいっぱいあるし

クリアしなくちゃいけないんです・・・

時代とともに人々の生活や思考、あり方は

変化しているのです、そこも勉強しなくちゃいけないし

自分で答えを出していかなくちゃいけないことも

ある・・・

大事なのは自分がぶれないことだね

そこ大切です

なにかがあってもへこたれないぞ！

って

決意表明しても

折れそうになるんだ・・・これが

人間だからね

そういうときはむりにテンパらないで

ゆだりって、ゆったりまったりすることに

決めています。

負の連鎖でマイナス思考になりそうなことも

あるよ

でもね、それってほんとNGだから

一旦休んで、あたまのんびりさせて  
プラス思考になるように

そうもつていこうつて

そんなとき、あのがちやがちやロボを思い出すと

これがまた爆裂珍事、迷言な名言を吐きまくるからね

笑っちゃうんだよね

悩みなんかなさそうなんだもん

あつたりするのかも？ だけど、たぶん

3歩歩くと忘れるじゃないかと思うんだよね・・・

あそこにいたときは、楽しかった。

今も、楽しいんだけどね。

いろいろ責任あるし・・・(前がなかったわけじゃないけど)

だいじょーぶさ

you can do it

あの方だつて、きつと大変だけど

がんばっているのさ

それを思ったら

自分の悩みなんてちつぽけだよね

さてさて・・・

書いてたら、眠くなってきた・・・

ふあゝ・・・

おやふみ・・・

# 恥ずか死ぬ

今日は研修。休憩時間にサンドイッチをほおばりながら  
沖縄でのことを思い出していた。

もう……

せつかく会えたっていうのに

恥ずかしすぎて

びっくりして

逃げちやつた……

北谷の大型ショッピングモールで

珍しい車が止まっていた。

あれー？

これって、言ってた車だよね？

たしかこの車種だよね？

沖縄でこの車見るのはじめてだから

もしかして……

あれ？バンパーになにかついてる……

まさか傷???

まさかね……

と、かがんでバンパーを覗いていたら

あれ？

つて、車の後ろから

あの人がぬうーつて顔をだした

あいつ!!!

あきちやびよ!!!!

んぎゃくーくーくーくー

マツハ5か???

びゅーくーくーくーくー||||333

つて

ボルトもびつくり

な

速度で

逃げてしまった私  
だって

びっくりしたんだもん・・・

帰る日まではまだ日数があつたんだけど

どうやら台風がきそうだから

早めに帰った方がいいって

急遽日程変更で

戻ってきちやつたけど

びっくりした・・・

「それでは午後からの研修はこの資料を使います」

はっ・・・もう、お昼終わりか・・・

それにしても、ほんつとびっくり

ひさびさに心臓がどつくんどつくん言ってたな・・・

まあ、場所も車もわかつたから

今度行つたときに訪ねられるからいつか

って

もどってきちやつたけど

沖繩くんだりまで行って

なにやっつてんだー姉！

って

妹のリラにはどやされちやっただけ

でもね

仕方ないじゃん

事情が事情だったんだから・・・

しかも、急な予定変更で

また沖繩に来るチャンスもできたんだし

生きていたら

また会えるって

私もとりあえず目の前の仕事がんばって

成果だそうかなって思ってる・・・

今日の研修でも

「努力し続けることが大事です」

って

言ってたしね・・・



焦っちゃいけないよ。

時は刻むものじゃなくて

流れているものだから

沖縄時間も

いつもそう

ゆったり流れに任せて

目を閉じて

木々の香りを、風の音を、波のうねりを感じる

それが人の自然の姿なのさ・・・

って、沖縄の人もいうしね

今回は沖縄でゆっくりできたってことで

十分、充電できたから。

しかも、沖縄プランの方が

安いだよね。ホテル付で二泊三日で3万円とかだもん。

近場の温泉とかに泊まるより

ずっと安いからね。

日程さえあえば、

いつでも行けるよ

今度は石垣に行きたいね。

行けたらいいね

きつと行けるよ

願っていたら

叶うから・・・

あの人の笑顔も

見ることができますように！

さて

ソフトクツキーでも作ろう

明日のお弁当の用意もしなくちや

ひさしぶりに子供たちに

会おうしね！

パワー満載で

かかってこーい!!!

## ご無沙汰メール

宛先：ドクターヘンリー

件名：近況報告

先生!! ユノです。

ほんと、ご無沙汰してしまってますいません。

新しい職場での仕事で、いろんなプロジェクトを

任されてしまって、結局MRIを撮っていたく時間が取れません。

せつかく機械を開けていただいているのに、申し訳なくて

謝罪の言葉もありません・・・。

リラは勉強をがんばっています。

理科、数学、社会が学年で1番ですが

国語と英語が悲惨だそうです。

なんでも、なにかにひっかかると理解するまで

気が済まないとか・・・先生に質問をして3時間も説明して

いただいたらしいです。

そういう疑問は大学に入ってから解決してほしいものですが、性格なので仕方ないですね・・・対応してくださいありがとうございます。先生に心から感謝です。

ということ、毎日遅くまで勉強してそこから爆睡しているらしく不思議現象とは無縁・・・

あ！「姉、なにかあった？」と、聞いてくるときは

私になにかあるときです。これは不思議です。

実は先日沖縄で大変、こつ恥ずかしいことがあったのですがそのときもSMを速攻で送ってきて「なんかあった？」と。

事情を説明すると「なにやっつてんだか・・・」つて

呆れられてしまいました。

私の天然っぷりは健在です。先日取材されているのに、なにかの勧誘かと思つて、速攻でお断りしてしまつたという

(結果よかつたんですが)

ずれずれの毎日です。

私の不思議な現象は、脳の・・・というより、ちよつとオカルトチックかもしれません。

バスルームの電気が消えたりついたりして、その後ある事件が起こったという・・・決まって洗髪しているときに

起こります。事件が収束してからは、電気の現象もなくなりました。

夢は・・・仕事のことが主です。おそらく、願望とか

気になっていることが出てくるのではないかと。

正夢になってくれたらいいな、という夢もありました。

これまでの正夢は、だいぶ時間が経ってから現実になることが多いので、添付ファイルの夢日記をご覧ください。そちらを

参考にしていただけましたら幸いです。

体調に関しては、頭痛などはまったくありません。

ただ、韓国の教授から、ラトケ嚢胞のせいで幻覚を見るのでは？

と、言われました。怪現象は脳の錯覚だから、とのことでした。

新しい仕事に変わってから、体調はすこぶるよく、昼休憩は

お昼寝できるのが最高です。たまにスポーツすると、ぐったりしますが

1日眠るとすっきり元気です。インスタントなどは取らず

できるだけ作ったものを食するようにしています。最近はおやつも自分でつくるようにしています。体が資本ですから・・・

という状況です。

本当は先生に直接お会いしていろいろお話したり

お伺いしたいことがあるのですが、土曜日が全休ではないので

お休みのときは、部屋の片づけ諸々で時間がなくなってしまう。

わがままですいません。

イベントが終わったら、ぜひまたお邪魔したいと思います。

季節柄ご自愛ください。

それでは近況まで

ユノ

---

返信：ユノちゃん

件名：Re 近況報告

メール拝見しました。

忙しそうですね！でも、仕事も充実しているようだし

精神的にはとても良い環境のように見受けられました。

リラちゃんもがんばっているんだねえ！

夢にむかつてまっしぐら。きっとその夢は叶うよ。

と、伝えてください。

夢日記も拝見しました。とても興味深いですね。

ユノちゃんの言う通り、願望や仕事上での心配事と思われる内容もあるけど、気になるものもいくつかありました。

これから、検証していきたいと思います。

MRIはすぐじゃなくて大丈夫。潰れたり大きくなったりするのはまだだからね。念のため、とっておいたほうがいいよってことで

あまり気にしないで。よけいな心配は無用です。

忙しい中、わざわざメールしてくれてありがとう。

また、二人で遊びにきてね。

会える日を楽しみにしています。

それでは

ヘンリー

## 台風一過

穴があつたら通り抜けたかつた日から

2週間経つた。また研修。今日は午後からだつた。

(そいや、あにき、何してるかな?)

そう思つた瞬間、目の前に兄貴の車が停車した。

「おっ!!!」

と、手を振ると、兄貴は助手席のウィンドウを下げた。

「久しぶりだな。元気か?」

「元気だよ。」

「何してんだ?」

「午後から街中で研修だから、バス待つてた」

「おー、んじや、またな」

「うん、また〜!」

たわいもない会話をして、ユノは研修会場へ向かうバスを待つた。

数分してバスに乗り込むと、空いていたので、目の前の席に座つた。



台風一過で晴れ上がった空からは、まぶしい太陽が車窓に照り付けてバスの中もエアコンはついていているものの、暑さで少し気分が悪くなった。

(免許取ってから、車酔いって滅多にしないけど)

今日は、ちよつと酔ったか・・・自分で運転しないと

たまに酔うからな・・・)

30分ほどバスに揺られ、研修会場に着くと、受付を済ませ

席に着いた。研修の内容は興味深く、なぜユノは自分がそうなのか

ということのヒントになった。

つまり、脳の状態が落ち着いていなければ

精神的に不安定になりやすいということ。睡眠は体の充電と

脳を休めるために必要である。

(そうだ・・・寝不足のときは、判断力が鈍るといふのは)

そういうことなんだね・・・。また、脳になんらかの異物があるから

時々、へんなものをみちやったり感じちやったりするのも

しれない・・・。

脳はまだまだ未解明な部分があるけれど、とりあえず現状維持で

心が落ち着いて過ごせる方法の模索を手伝ってもらった気がした。

さて！今日の研修内容を頭に刻んで、明日からの

仕事に生かそうと。それにしても、あの時のあの

アニメ的展開つたらなかったな・・・研修っていうと、思い出しちゃうよ。

それもこれも、予定にないことや予想外なことが起こったりすると

へんな行動取っちゃうっていう、私の特徴も、そういうことから

きていたりするのも・・・いやはや・・・びっくりした)

「他意はないんだ!!!んがー」

また、恥ずかしさを思い出し、声に出し羞恥心を払しよくしようとした

ユノだった。

また、リラがたまに理解できないことを言うと、それが

金属音のような不快感に襲われることも、そういうことなのか・・・

興味のない話などは、聞き流せるのに、イミフな話をされると

だんだんイライラしてきて、途中で内容を確認してしまう。

話の腰を折るな！と、リラは怒るが、リラ自身もそういう特徴があるから

話の腰を折られると怒るわけだ。

一方、ユノは話の内容が多少わからなくても、何が言いたいかわかれば

聞ける。怒ってる！とか、うれしかった！とか、不思議だった！とか。

一体何がいたいんだ？不満なのか、喜びなのか、疑問なのか。

リラは自分の頭の中に思いついたことをそのまま言葉にするからわけがわからないことがある。イメージで話すというか・・・

ヘンリー先生と話すときは、理路整然と話せるのに、ユノといると

主語も述語もなく、解説もないから、何言ってるか、さっぱりわからない。

でも、女性同士ってそういうの流して会話するらしいが

ユノには、無理・・・だから、そういう友達いない。

(ちゃんと、主語、動詞、述語があつて、独自のタームなどがある場合は

○○つていう、××があつてね、それつて、■■なんだけど、

それがこうなのよ。

つて、話してくれる。だから、スーッと理解できる。

つてことが、今日はよくわかりました。

つて、ドクターにも報告しよつと。

それにしても、ドクターは話聞くのがうまいね。

たまに、私も慌てて話したりするけど、ちゃんと

受け止めてくれるもんね？

あ、そうそう。今日の研修でも言つてた。

そういう特徴のある人たちの話を聞くには

温かい心で受け止めてあげることが大切ですよ。

自己肯定感を高めてあげることが大切なんだそうです。

そうだわ……

私も、まわりの人たちに肯定してもらったから

自己否定に落ち込む人間にならずに済んだのね……

父に感謝かな。あの人はぜったい否定しなかったから。

何しても、褒めてくれたもんね。

それは自信につながったかも。たとえできなれと思つても

挑戦するっていう気概をくれたのって、パパだわ……

なんか、一瞬、ニタニタしながら酒盛りしてるパパの顔が

思い浮かんだんですけど？

墓参りでは何も言つてなかったけどね？

ま。

いつでも勉強だね……

いつの日か天国に行く日まで

勉強しつづけるってこと

って、天国いけるかどーかわからないけど  
いけるよーにがんばらなくちや。ははは)

あと、研修は2回。研修の時には、いつもちよつと不思議なことが  
起こるようだが、「今度も有意義な時間が過ごせますように！」  
と、願わずにはいられないユノだった。

## あの時のタイムマシン

「うわー!!! やめてっ! だから、ちがうってばー!」

え? . . . . . 寝言だ . . . やだ . . . 自分の寝言で、目が覚めた . . .

なんか、顎が二つに割れてる人がすっごく顔近くて、

びつくりした . . . . . 誰だあれ? 走る鋼鉄男、蓑上がちや男にも

似ていたけど . . . . .」

ユノはパーティー後、疲れたせいか、ぐっすりと眠って一旦起きた後

二度寝したら変な夢にうなされたらしい。

「うわ . . . . . 首が痛い . . . . . 変な夢だったー!」

お笑いのクド鈴木みたいな頭で、顎が二つにわれてる人が

だー! だー! だー! すんごい勢いで追いかけてきて、画びよう手に持つてんだよね。

って、どつかであったような . . . . . その場面 . . . . .

しかも、キムチ買ってこいとか、なんで私がパシリしなくちや

いけないの? っつてか、あんた誰???

いやあ . . . . . ひっさびさにお酒を飲んだので、うなされちやつたな!。

お酒っていつても、昨日ってビール2杯とカクテル1杯しか飲んでないんだけどね・・・

テキーラとかだったら、酔わないのになあ。」

それって、強すぎでしょ？

「まあとにかく・・・なんか、すんごく怖かったから

お祓いでもしてこようかな」

お祓いってどこに行くの？

「んー。わかんない。近くの神社でいいんじゃないかな・・・

すぐ裏にあるし。」

効果あるの？

「わからないけど・・・だって、四次元ポケットから

アイテムだしやがれ、このやろーとか言って脅かしてくるしさ。

そんなもの持ってません!!!いや、持ってますけど

出しません!!」

持ってるの？

「いや・・・内緒です。とにかく!」

「こども達にもバレてるんですよ。先生宇宙人でしょ!」って」

ユノちゃん宇宙人だったの？

「この世の人はみんな宇宙人じゃないですか」

なに、こどもみたいなこと言ってるの？

「ん……お酒がまだ残っていて……」

そうだ。ウクライナの人に言われたんだった。

僕、前してた仕事さあ、毎回アルコールチェックとか

するんだよねーって。だから、私、あ！知ってる知ってる！

なんか、ふーって、息ふきかけるあれでしょ？

まえにさー、システムの仕事したときに、アルコールチェック

されて、なんか数字でちゃったんだよ。え!!!

飲んでないのに……

なんでかなーっていろいろ考えたら、キャブリーズのクールスプレーを

かけてたわけよ。それにアルコール入ってるから、それが首のあたりから

もわくって出てたので、アルコール検出されちゃったんだよね。

5分ぐらいしてから、も一度チェックしたら、検出0だった」

なるほどねー。で？今やったら、検出されそ？

「そうかも……今も、心臓がバクバクしてて



さっきの顎割れてる人の顔が、ちらついて離れないんだよね……  
誰だろ？」

もしかしてさ、ガチャさんの守護霊とか？

「え……やばっ！なんか、そう言われればそんな感じが  
しないでもない……」

それってさ、脳の錯覚ってやつらしいから

今見た夢をまたまた詳しく書いて、ドクターに報告したら  
よかと？

「そ、そうだね……怖すぎるもんね？」

なんか、正夢になりそう……」

ぷぷつ、おもしろそうだから、その人みてみたいけどね？

「いいですいいです、結構です!!!断る!!!」

あんなの現実に行ったら、鬱陶しくてしようがないわ!!!

せつかくがちやと離れたってのに……」

なんだかんだ言って、また会いたいんでしょ？

「……遠くからみてたら、おもしろいけど

直接絡むと、痛いからいいですいいです。どついてくるし」

走るの早いんだってね？

「そうそう、知らない人まで知ってるんですよ……」

ああ、あの足の速い人ねって。でもって、彼こそ

サイキックスじゃね？って時があって

だれもないところで、転んだのに

見えてたんですよ。何転んでんの！って言われて

その癖、メールとかの誤字半端なくて

真剣な話してんのに、笑っちゃうんだよね……

多分、指が金属だから、画面のセンサーが感知しないのかも。

会社のスマホやってるときも

あー、あーって、画面さわって、叩き割りそうになってたとき

あるから」

ど？酒抜けた？

「ん……ヨーグルトドリンクでも飲もうっと。

あと、クーブイリチーつくってあるから、それ食べて、あとは

映画でも見ます」

ごゆっくり〜

## 回顧のしゅーりんガン

「天田さんって、御さち田なんですよ」

（ふーん。うちが前いたところか。）↑気づいていない

「料理うまい人って、部屋もきれいだと思うんだよね」

（そおかあ？友達、料理うまいけど、部屋きつたないぞ？）

「なんつーか、熟年離婚ってか・・・長い間連れ添った

夫婦みたいなかんじで、なんかやなんだよね。あの人」

（長い間連れ添ったことないよね？てか、長い間連れそって

嫌って・・・おい!!!たとえがずれてるぞ）

「このマスカット、洗ってあるのかな？」

（知らないよお〜（；▽）あなたがもらってきたんじゃないの〜？）



会ったことない人には興味がないから」

(・・・一理ある)

「仕事は会議室だけでやってたって意味ねえんだ！」

現場知らないで、テキトーなこと言ってるじゃねえ！」

(1000%激しく同意)

「むり、とか言うな！お前仕事なめてんのか！」

「・・・すびっ・・・ぎよめんな・・・するっ」

「この辺りって、10年後はどうなってるんだろ？」

(10年後の私たちはどうなってるんだろ?)

「あそこってさ、停電になっても自家発電で動くんだよ」

(へえ)。物知りなんだね・・・でも、私は充電しないと動かないよ)

「鋼鉄男、油漏れしてたから直してあげて。あなたにしかできないよ」

「ん〜。部品古すぎるから、オーダーしてもないかもな？」

「廃棄処分しちゃえば？」

「どこも受け取らないよ」

ぶはっ

「入って早々、ロックするたあ、いい度胸しえるじゃねえか」

「入って早々、何も言ってくれないなんて、ひどいじゃないの！」

「そんな奴、みたことない・・・おまえ、変人だな」

「そんな変人の心つかむあなたこそ、ど変人じゃないの！」

「俺のこと嫌いなら嫌いって言え！」

（・・・嫌いじゃないから、嫌いって言えないよね？

好きです！って、今ここで言えってか？）

ポケ+ポケは、いずれか時間差で覚醒し

補いあったりするものでして・・・

えー、本日は晴天なり・・・

「回顧のシユール・ガン」の巻・・・

おそ松、あいやお粗末でした。

ー閉幕（綴帳が下がる）ー

## ジャコランタン

ユノは久しぶりにドクターヘンリーの元を

訪れることができた。

「先生！大変ご無沙汰してしまいました。本当にごめんなさい！」

ヘンリーも久しぶりにユノの顔を見ることができて

安堵と喜びの笑みを浮かべた。

「血色がいいねえ！元気そうでよかった。」

「ええ、今日、ちよつとしたトラブルのおかげで

鉱石サウナに行くことができたんです」

「それはいいね。でも、トラブルって？」

「はい。今日はアウエイだったんですが、急に不調を訴える子がいて

急遽、仕事打ち切り。外国人との打ち合わせを済ませ、戻ってきました」

「そうか・・・いろんなことがあるね。それも経験だからそれを糧に

次に生かせるよ。君は、トラブルがあつても、冷静に対処できるところが

すばらしい。これからも、ぶれないようにね」



「はい、ありがとうございます。実は、一昨日、夢をみたんです。」  
「ほう?どんな?」

「パンクの夢です。なぜか原チャリを運転していて

周りは森林なんです、道路は舗装されていて、まっすぐいくと  
国道つてとこの交差点で、バイクが前後ろ、パンクしていたことに  
気が付いたんです。

それで、あ、チューブも取り換えないとやばい!と思つて、すぐに  
バイク屋を探したんですが、近くにはないことがわかり、ちよつと進んだら  
すぐ左側にスタンドがあつたんで、入れたんです。

カードがあるから、全部速攻で修理してもらえばOK。たぶん、大丈夫。  
つてとこで目が覚めたんです」

「ほう!それつて、なにかトラブルに巻き込まれそうになるけど  
速攻対処が適切で、難を逃れるつていう、メッセージみたいだね」

「そうなんですか?でも、言われてみると、そんな感じ・・・  
結局、即対処して、なんとか乗り切つたんですよ・・・」

「人生、経験を積むと、不意のハプニングにも冷静に適切に  
対処できるようになるからね」

「そういうえば、前職でも、なんとか乗り切ったような・・・」

周りの助けもあったんですけど」

「君のSOSの出し方も適切だね。どこで、だれに、いつヘルプするかってのも

瞬時に判断できると、応急処置が効くからね」

「そうですね・・・でも、油断禁物だなんて思いました。」

「うむ。その心がけを忘れずにね」

「夢といえ、最近よく、昔の夢をみるんです。」

「どんな？」

「仕事してたときの夢ですが、ある仕事場で

とつても面白い人がいて、その人と3人ぐらいで話していたんですが

急に甲子園の話を始め、応援歌を歌いだしたんです。

国民的あの漫画の主題歌を替え歌で。アレンジは7時に全員集合する

コメディ調で。

すると、そこにいた人は、なんかそれ萌えるって、笑顔で言っ

ているんです。」

「なかなか面白いね」

「はい。ふざけている方も突っ込んでいる方も面白くて。」

それでもつて、つっこんだ方が実は、天然で、あるとき  
不届き物がいたので、それをみつつけて片方の手袋に小銭入れて  
投げつけたそうです。」

「ずいぶんコントロールいいんだね」

「なんでも、高校の時は野球部だったらしくて」

「へえ〜。男子ならでは、だね」

「私、男子つて言つてないですけど、さすがですね。先生」

「え？この流れだったら、男子でしょう？」

女子だったらすごいよね？」

「毎日、子供となんちやつてチャンバラや格闘技している女子も

いるんですよ？」

「それはユノちゃんでしょ？」

「バレました？」

「うん。とつくにバレてるよ」

「それで、この間はある男子児童が、横からむぎゆつて

押ししてきたんです。肘で、私の脇腹をむぎゆむぎゆつて。

そのときに、『は!!!今のデジャヴ!!!』つて」

「なんか、それってなにかわかるような気がする」

「はい……私も数秒後に、あ……あれだ……って  
気が付いて」

「前によく、そういうことがあつたんだよね？」

「はい、その通りです」

「その人って、もしかして、調教中に犬に

がぶつ！って、手を噛まれちゃった人かな？」

「(笑) 先生……思い出して笑つちやいましたよ！

笑つちやいけないけど、でも、おかしくて……

大好きな犬に噛まれて本望、って顔してたから

おかしいですよね。

私も今日、まさにそんな感じでしたから。」

「ユノちゃん。きつと、最近は忙しいけど

心は落ち着いているんじゃないかな。だから、昔の

いろんな夢を見るんだと思うよ。心に余裕ができたんだね。

脳は正直だからね。特に、眠っているとき。不安や不満が出ることもあるから。

あとは、予知夢とか、そういうことも言われているけれど

それは超常現象というよりは、脳がなんらかの未来の事項を察知してそれが夢に出てくるのでは、とも考えられる。

また、自分自身への警告だったり。物事が順調に進みすぎると

不安になったりするでしょ？だから、そろそろ気をつけなさいって注意っていうのかな。

免許取り立ては事故らないけど、慣れた頃に事故るつてのと一緒で

仕事に慣れた頃に、油断しちゃうことがあるから

それを注意しなくちゃ、って、自分自身で戒めていたんじゃないかな。」  
「そっかー。そうかもしれないですね。

いろいろな懐かしいなーって思うこともあって。

でも、新しい仕事しはじめのころは、確かにそんなこと思い出す余裕もなかった気がします」

「カウンセリングの感じでは、だいぶ良い調子みたいだよ。

あとは日記ゆつくり見させてもらうね。MRI撮っている間、見せてもらっていいかな？」

「あ、はい！このUSBに入れておきましたので、ご覧になってください」

「縦と横とるから、30分30分で1時間以上かかっちゃうけど」

あとは紅茶でも飲んでゆっくりしていった」

「ありがとうございます！検査のあとにお茶が出るなんて

先生のところだけですよ!!!」

「ははは。それなりに献上物もいただいているからね」

「あ、これですね。秋物のスイーツです。」

奥様にも差し上げてください。」

「妻も喜ぶよ。彼女、栗閨連大好きだからね。」

「よかった！今月末ハロウィンなので、今、お菓子屋さんめぐり

しているんです。準備のために。ですからそのついでなんです」

「ついででも、気にかけてもらってうれしいよ。」

「じゃ、あつちで機械準備してあるから、行ってきてね」

「はいー!」

久々の検査に、なんの躊躇もなく機械室に移動する

ユノだった。

## 光陰矢の如し

「ねえ、姉。なんで勝手に行ったのよ……」

「しようがないでしょー。急に勤務短縮になったんだから……」

リラだって部活あったでしょー」

「……ずるい！」

「小学生みたいなこと言わない！」

リラはユノがドクターのところへ単独で行ったことが

おもしろくないようだ。

「姉だけずるい！私もドクターに話あったのに！」

「え？理科と数学が一番で、国語がブービー賞だったって

その話？」

「姉えー……!!!ひどい！」

「ひどいのは、あんたのその格差成績でしょー」

なかなかそういう成績取る人いないと思うよ？」

「ふん……社会はクラスで一番だったもん！」

理科と数学は学年で一番!!」

「いくら自慢されてもねえ。大学に入ってから

ドヤ顔してくだせー」

「まだ時間はあるから、これからのの!」

「国語って、成績あげるの難しいよね? 勉強のしようがないもん」

「とにかく、英語もいまいちだから、そこ上げてく!」

「国語も読書しまくるから!!」

「はい、がんばりなはれ〜」

「ねえ、大学入ったら、姉のニヤンコ先生のぬいぐるみ

と夏目のフィギアちょうだい?」

「え? やだよ。てか、もともとさんちゃんのだし」

「そいや、さんちゃん、小説家になるとか言ってなかった?」

「あー、仕事引退したらね。編集の仕事してて

そこで文章かいてたけど、時間できたらゆっくり小説書きたい

って言ってたねえ。そういえば。持ってた本の数、はんばなかつたもんね?

没したあとも、トラクター台分処分したみたいだよ」

「あああああ、それ、もらっておけばよかった〜」



「何冊かは、私持つてるから、それあげるよ」

「え？ いいの？」

「いいよ。数冊は児童館に寄付したから」

「うおっしやー。じゃあ、さんちゃんのお品で

勉強するとするかー……ここにある本がそう？」

「あ、そうそう。本棚の一番上の段がそうだよ」

「おーいろいろあるね。ん？ これなに？ 記念樹って」

「あー。それは私のだけど、おじいちゃんがね

私が生まれたときに植えてくれた記念樹が、もみの木でね

その話をしたら、古本屋でめつけてきてくれた」

「へえー。私の記念樹はないの？」

「あ、リラのもあったよ。トド松だったかな」

「え？ おそ松？」

「ちがー……う!!! トド松（榎松）っていう松の木だよ」

「私それ、みたことないよ！」

「んーだって、リラが小さい時に、引っ越して前の家はもう

庭ごと売ってしまったからね。

「えー、木だけ持ってくればよかったのに。」

「あんなおおきい木、2本もどこに植えるのよ？輸送料だつてはんばないよ？」

「まあ、そうだけど……見たかったな」

「写真はあるよ」

「え？どれ？みせてみせて！」

「えつと……昔の写真は……このアルバムかな？」

「ん？なにこの車？こんなの乗ってたの？」

「あー、白のステーションワゴンね。なつかしく。」

これ、乗ってた。仕事に行くのに使ってたけど、そういえば

このキズ、どっかの高校生とぶつかったんだっけ」

「え？事故？」

「ん……T字路で左折しようとして、止まったら坂の上から

ぴゅーって、男子高校生が下りてきたんだよ。それで、私の車を

よけそこねて、ぶつかったのね。それで転んじやった」

「え？大丈夫だったの？」

「うん……『大丈夫？病院行こう？』って言ったら

『大丈夫です!』つて、逃げるように去っていった」

「どこの高校？」

「んー、よくみなかったけど、ブレザーにネクタイだった・

たぶん公立高じゃないかな」

「ケガとかしなかったの？」

「わからない・・・膝あたりすりむいてたと思うよ・・・

たしか、めがねも曲がってたような気がする・・・」

「うわ・・・でも、逃げちゃったらどうしようもないよね？」

「そうなの。今、どうしてるかね？けっこう前の話だから

もう大人になってるわ。間違いなく」

「イケメンだった？」

「はあ？そこまでは覚えてないけど・・・細くてすつとした顔だったような

気がする」

「覚えてんじやん」

「君は一体何を期待しているのれすか？顔はみましたよ。

ケガしてないか、顔色大丈夫かとか、そういう心配でみたんだよ。

とりあえず意識もあるし、立ち上がったし、大丈夫そうだなとは

思ったけど、念のため病院連れていこうかとおもって、自転車ごと車に乗せようとは思ったんだよ」

「怖くてにげちやったんじやないの？ 姉が」

「……とにかく、元気で無事ならいいです！」

「イケメンだったら紹介してもらおうかと思っただのになあ〜」

「そういう邪なこと言ってるから、成績にムラができるんじや！」

英語と国語、がんばんなさい！

公立試験は3教科だけで成り立つてるんじやないんだ！」

「まあ、みててよ。小さいころはよくさんちゃんに

読み聞かせてたんだから。うまいって褒められたしね。

今こそ名誉挽回だ。」

「せめて国語と英語、もうちよつとましになってから

ドクターんとこ行きなさいよ。きみの脳の構造の方がよっぽど

ミラクルだわ……5教科がトップとビリなんてきいたことないわ」

「でしょ？ あたし天才なんだよ」

「あるいみ、そんなスコア取れる天才かもね？」

「ま。正直なんですね。好きじやないものは、やりたくないわ。」

すきなことはとことんやる。てか、姉？ケントおじのことはどうなったの？」

「さて・・・と、仕事するか」

「はぐらかすなーーーーー!!!仕事なんてないやろーーーーー!!!」

「あるよ。ハロウインとかクリスマスの準備しなくちゃだから

いろいろ買い物とかスタッフの配置とか考えなくちゃいけないの」  
「え？買い物ならあたしもいく!!!私選ぶの上手だよ？」

「こどもがなに好きかわかるから」

「じゃあ、お伴願います。どうせ、ごはんおごってーって

そういうご褒美狙いでしょ？」

「バレたか・・・でも、100均行きたい!」

「じゃあ、買い物してからごはんね。1200円までだからね。」

「うへー。まあいいや。はい!ありがとうございましたます!」

「ほないこか」

久しぶりに再会した姉妹。女子同士は

話が弾むようだ。

## デジャヴる【最終章】

「おねえちゃん？」

「あ、リラ・・・ごめんね。ヘンリー先生に

勝手に会いに行っちゃって」

「え・・・？だれ？ヘンリー先生って？」

「リラ・・・怒ってるの？」

「おねえちゃん？まだ、意識が戻ったばかりだから

疲れているんだよ。無理しなくていいからね」

（ここはどこだろう・・・病院？）

朦朧とした意識の中、ユノは目の前にいる妹に

疑問を投げかけた。

「リラ・・・ここはどこ？なぜ私はここにいるの？」

「おねえちゃん・・・おねえちゃん、車にはねられて

1か月意識不明だったんだよ」

「え・・・？」

「さんちゃんが連れていつちやうのかと思った」

「さんちゃんは．．．．．？」

「さんちゃんさ．．．．．天国に行っちゃったんだよ。」

おねえちゃんは、それを聞いてショックでそのままフラフラと

国道の方に歩いていって、赤信号なのに道路に出てしまって

車にはねられちゃったんだよ」

「国道．．．．．ジョヨンは？」

「ジョヨン．．．ああ、私の好きだったKアイドルね。」

彼も死んじゃったよ。ジョヨンがどうかしたの？」

「ジョヨンが亡くなったことは、私知ってる．．．．」

「おねえちゃんが病室にいる間、私ずっと」

携帯で動画やニュースみてたから、それが聞こえてたんじゃないかな．．．

おねえちゃん、意識はなかったけど、ときどき指がぴくぴくって

動いてた」

「ケント．．．．．君は？」

「．．．．．？」

「山中さんは？がちゃおじは？」

「おねえちゃん。意識戻ったばかりだから

あまり無理しないほうがいいよ。これからゆっくり

話しようよ。時間はゆっくりあるから。

システムの仕事の方は、会社の人に話してあるから

ゆっくり治して、それから復帰すればいいって」

（システム？復帰？……じゃあ、シロイヌサスケでは

働いていないの？）

「ねえ、リラ……」

「おねえちゃん。頼むから、焦らないで。

まだ食事もしてないんだよ？ずっと点滴だったんだから……

食事できるようになったら、少しずつお話しよ？」

「わかったわ……」

ユノはまだ夢と現実の狭間で揺れ動いていた。

自分が意識がなかったこと、ドクターヘンリーや

山中のことをリラが知らないということ、

リラがファンだったKスターのことは事実だということ。

頭の整理をするには、少し時間が必要だ。



ユノはゆつくり目を閉じて眠ることにした。

.....

やっと点滴もとれ、流動食から

通常食をとれるまでに快復したユノ。

自力で歩くこともできるようになってきた。

8KG減った体重は少しづつ元にもどりつつある。

血色もよくなってきた。

学校を終えてリラがユノの病室に立ち寄った。

「おねえちゃん。調子はどう?」

「うん。大分いいよ。PCで動画もみているの。」

「なにみているの?」

「秋目友人帳」

「え.....?さんちゃんが見てた時

おねえちゃん見向きもしなかったじゃない?」

「そうだったけど.....?でも、面白いよ。」

あととはね、関東グループとか、斉木空介の災難とか……」

（おねえちゃん、やっぱり頭打っちゃったのかな……）

MRIとかでは異常がないって、お医者さん言ってたけど……）

「そっか……おもしろいよね。今、映画やってるから

退院したら見にいこうか？ 妹からのプレゼント。

快気祝っていうんだっけ？」

「ふふっ。リラちゃんもずいぶんと成長したのね。

快気祝いなんて知ってるんだねー。お姉さんになったね」

「そ、そりやあまあね。いろいろと覚悟もしたし」

「え？……あたしが死んじやうとも思った？

私は不死身だからね。なかなか死なないよ」

「まあ、そうでしょ。妖怪だもんねー？」

では、妖子さん、来週退院だから、荷物整理しておいてね。

ちよこちよこ持って帰るから。あとは、着替持ってくるね。

退院してすぐはどこ行きたいか、考えておいて」

「うん。もう、決まってるよ」

「……わかった。」

姉のユノがどこに行きたいかは、妹のリラはすぐに察知した。亡き婚約者の遺骨を散骨した沖縄に行きたいのだとすぐに悟ったのであった。

リラは医者に行き飛行機での旅が可能かどうかを確認し了承を得ると、早速沖縄行きの手配を手配した。イルカが見える海沿いのホテル。

ユノの婚約者とユノが大好きな場所だ。

ユノが無事退院手続きを終えて、空港に向かった。

搭乗手続きを済ませ、ユノとリラ姉妹は

沖縄行きの飛行機に乗り込んだ。

「ねえ、リラ。ごめんね。あたし窓際がいいの」「いいけどさー。おねえちゃんって、何時間も

雲みても飽きないって、変わってるよね？」

「だって、曇って不思議でしょ？じつとみると

いろんな形に変化するんだよ？」

空の上からみると、なにか物語のようで、天竺のような

幻影だったり、あそこにはもしかして都市があるんじゃないかとか  
妄想が掻き立てられるの。だから、楽しくて

ずっと窓の外をみていられるのよ」

「まあ、私は映画をみてるから、おねえちゃん

窓際でどうぞどうぞ」

「ありがとう」

数時間後に那覇空港に到着して、ホテルバスに乗った。

季節はもう夏。沖縄は、本土とは季節感が違う。

キャリーバッグをひっぱりながら、ホテルに入ろうとすると

ユノはなにかとぶつかりそうになった。

「あーごめんなさい」

犬を連れた少年がユノの目の前にいた。

「だいじょうぶです。こちらこそ、ごめんなさい」

少年は小学校高学年ぐらいだろうか。

盲導犬を連れ、歩道を渡ろうとしたところ

ユノのキャリーバッグに軽く接触したようだった。

ユノのキャリアケースに瑕がないか

少年は心配そうに、ケースに触れようとかがんだとき  
カタン、と何かが少年のバックパックから落ちた。

「あら、これ、落ちたわ」

ユノが拾って、少年に手渡そうとすると、それは  
赤いミニ四駆だった。

「ミニ四駆……懐かしいわ。私も昔

これ、持っていたのよ」

「そうなんですか！これ、僕の大切なものなんです。

父の形見なんです。父が一番大切にしていたミニ四駆なんです」

「そうだったの……傷はついていないみたいよ。

バックに入れてあげる？」

「あ、お願いします」

「じゃ、ここに入れておくね。気を付けてね」

「はい、おねえさんも、どうぞよい旅を」

イントネーションで、ユノが内地の人ではないことを

少年は悟ったようだった。少年が無事歩道を渡り切るのを

見守って、ユノはホテルにチェックインした。

(今の場面……どこかで見たような……)

長い間意識を失っていた時にみた夢だったかな……)

「おえねちゃん。少しビーチを散歩したら、ソーキそば食べに

いかない？ここの近くにおいしいおみせがあるんだって。

それで、夜は、ノレンジレンジのライブがあるから

それ見に行こう？」

「うん。いいよ。そうしようね」

ホテルのプライベートビーチをゆっくりと歩きながら

在りし日のことを思い出していた。

懐かしい思い出が詰まった星の砂の瓶には

キラキラと輝く思い出のひとつぶひとつぶが散りばめられていた。

ユノの新しい人生を応援してくれるかのように

ホテルのプライベートビーチを悠々と泳ぐイルカが

ユノリラ姉妹をみて、微笑んでいるかのようにだった。

---

(一旦閉幕)

---

## おまけ編

### + $\alpha$ 追記「幻日記」

あちやー。年末イベント運営って・・・  
どゆこと？

なぜに今春入社したばかりで、すべてを任されるのだ？

外国人も統率しろと？

むちやぶりすぎるー！ー！

夢であつたら覚めてくれ!!

来場者予定2000人って・・・

なんすかそれ？

ねえ・・・

前の仕事もひどかったけど

むちやぶりっぷりはんぱない・・・

まあ、ひとりじゃないからね。

同胞もいるわけで。



なんとかなるさ！

うん。なんとかなる。

と、おもっていたら

前職の人々から電話。

手伝わない？つて

あははははは！大爆笑。

手伝えたいのはやまやまですがあゝ・・・

ごめんね

むり。今、こんな私でも

必要とされているのであります。ありがたいことに・・・

なによりちっこいお得意様がね

とつても大事だから

離れるわけにはいかないのです。

手伝えば、会いたい人に会えるのですが

それをもつてしても

できないのであります・・・

幸せですね。

最近はいろいろと

プチ幸せに囲まれているので

なんとか人生悪くなーい

日々を送っています。

ただ気になるのは

気になっている人が

具合悪そーな顔をして

げっそりやせ細っていたりする

夢をみたりすると

ダイジョブか???

って気持ち満載になります。

この間みかけたけど、やっぱり

顔色はよくない・・・

心配なのであります。

さてと、今は異世界居酒屋をみながら

のんびり夕食をいただいております。

なんとなーく、頭が重いときも

ないわけではありませんが  
たぶん大丈夫でしょう。

また脳写真を撮りにいけばよいので  
そんなに心配しなくても

大丈夫。

こういうのは、きっとストレスで

ぶち壊れたりするんだから

今は、楽しいストレスだから

大丈夫。やればやっただけ

成果が目に見えるから

前は、やってもやっても

やってくる。刑務所の穴掘りのような

地獄の訓練所みたいな

そんな毎日だったから・・・

たんに私がへたれなのだけだね。

だってみんなそれをがんばって

やってるんだから・・・

脳がブチ切れそうになっちゃった私が  
あかんたれなんです。

もうちよつと身長があればなあ。

筋トレしても細い筋肉しかつかないしなあ

器械体操の人みたくなるだけで

まあ、とーさんが器械体操の人だからね

同じ筋肉の質なんだろうね。

今は、ちっこいのとスポーツするから

楽しいよ。たまに加減まちがえて

激打されちやうこもあるけど

名誉の負傷です。

ひとりおもしろいのがいて（みんなおもしろいけど）

悪ふざけをしたら、パソコンが止まりました。

今みていた動画が映らなくなりました。

すると、その方は

私がふざけたからです！反省します

ごめんなさい！どうか動いてください！

と

土下座してパソコンさんに頭を下げました。  
すると・・・

なんと、ぐいーんって、再起動したんです！

私は何も触っていません！！

いやあくびつくりした

&

爆笑した！

私の意のままですな。PCさまさま。

年末イベント終わったら

おいしいものでも食べにいこうつと・・・

お金セーブしてたけど

それぐらい、奮発してもいいよ。

自分にご褒美！

再?!!

## 再会の果て

ごめんね

君が今、超絶過酷な状況にあるのは  
冷静に考えたら

わかったはずなんだけど

あの時はあまりに突然すぎて

かける言葉が思いつかなかった・・・

君に挨拶するのが精いっぱいだった

世の理不尽さのなかで

さぞ息苦しい生活を

強いられているんだろうとは

想像に難くなかったよ・・・

でも

とっさにうまい言葉が思いつかなくて

どう対処したらよいか瞬時に判断できず

その場に茫然と立ち尽くし  
考えあぐねていた

短時間に試行錯誤の結果

実行したその方法論は却下されてしまい

本当に面目ない・・・

ずっと気にかけていたこと

そしてその不満を体ごと

受け止めてあげたかった・・・

それなのに

それをどうやって伝えたらよいのか

もちろん無理やり配信する方法も

ないではないが

それはそれを介する人達の

手を煩わすことでもあり

君が一番嫌がることでもあるだろう？

だから

自分はそれを実行できず

悶々としていたよ・・・

ただね

お願いがあるんだ

そんな中途半端な文言で

伝えておかないでくれ

奈落の底に突き落とさないでくれ

それであるならば明確に

もうおまえには微塵も興味がないんだと

目の前に金輪際現れないでくれと

そうはつきりと

引導をわたしておくれ

人間てのは勝手な生き物で

一縷の望みもあれば

そこにすがりたくなるものなんだ・・・

もしかしたら

まだ希望を捨てないでいられるかもしれないと

都合よく解釈してしまうものなんだ・・・



君のことを

本心に心から愛したから

はじめて本物の愛を知ったのだから

そんなに簡単に

諦められるわけがないだろう

ただ

それが君の望むところでないのであれば

もちろん

即刻撤退するよ

君を苦しめたくは

ないのでね・・・

心から君の幸せを願うよ

君を幸せにする使命をゆだねられていないのならば

それが自分の使命ではないのであれば

誰か他の適任者に託すしかないだろう

君が未来永劫

幸せでいてくれることが

自分の最大の望みなのだから・・・

あまりに残酷な仕打ちは

この身にはつらい

どうか

温かいやり方で

突き放してはくれないか？

せめてもの

選別として

受け取ってあげようではないか

初めて出会った日のことは

今でも目の奥にしつかりと焼き付いている

それを永遠の肖像画として

心の片隅に置いておくことを

許してはもらえないだろうか

自分の人生は

決して悪いものではなかったと

信じて止まない

紆余曲折こそあつたが

君との出会いは

私の人生に

大きな影響を与えたのだから

ありがとう

言わせてもらうことだけは

許してもらえないだろうか

ストイックな君だけど

それは許容してもらえたら

嬉しいんだけど